

六 各學年最優勢中項目

屢々述べた如く、「從順」は中項目中最も優勢なもので、その各學年に於ける率も、一として他の項目のこれに及ぶものがない。従つて第一・二圖に於いて觀察した「各學年最優勢中項目」は、尋常科に於ては、唯從順一項あるのみである。けれども高等科に至れば、「從順」の外に「安心」の一項が加つて来る。即ち次の通りである。

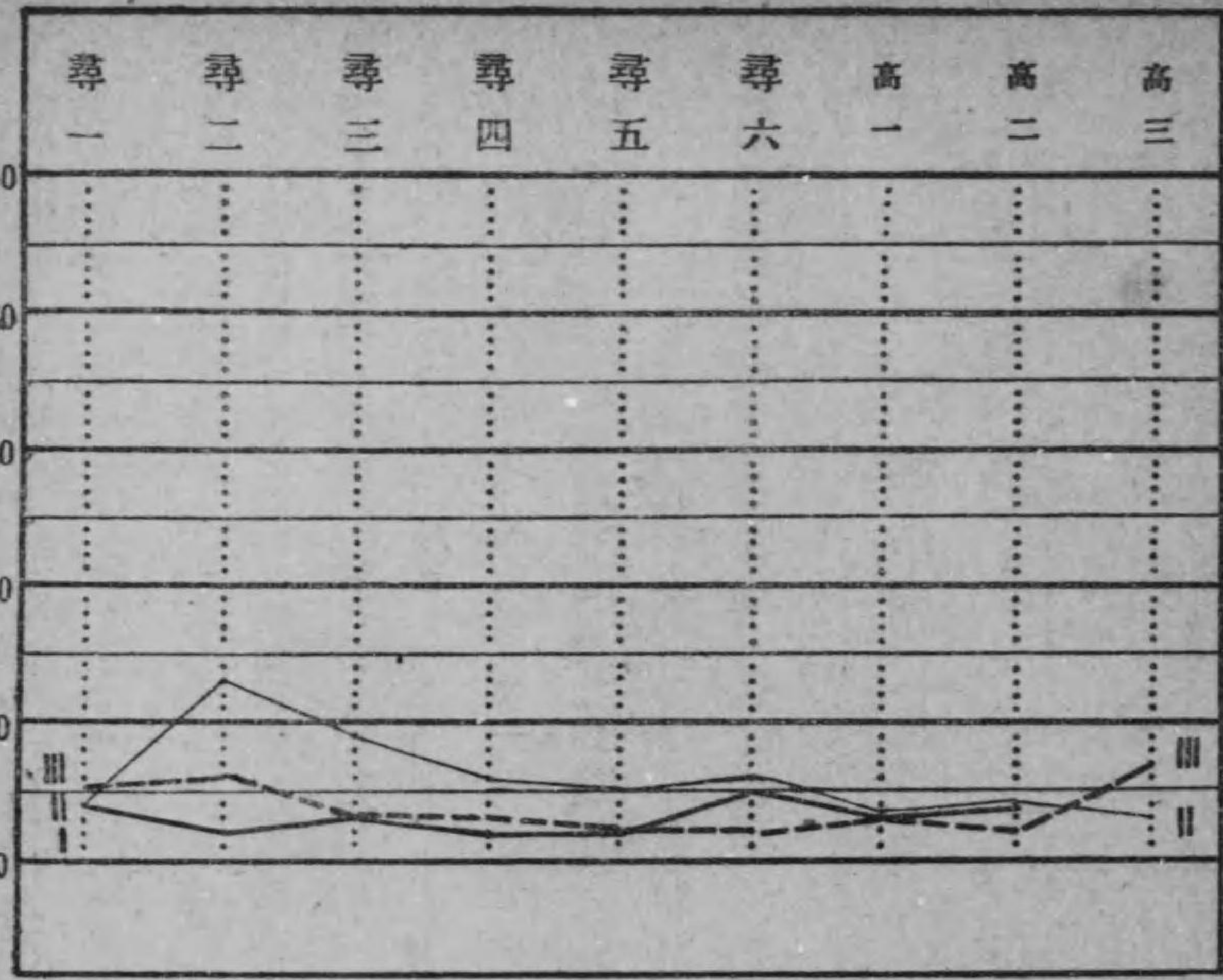
尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一	高二	高三
男	女	男	女	男	女	男	女	男
從順	從順	從順	從順	從順	從順	從順	從順	從順
安心	安心	安心	安心	安心	安心	安心	安心	安心

七 各學年主要小項目

父母の命を守る (父母)	父母の教を守る (父母)	父母に心配を懸ぬ (父母)	勉 強 (自己)	父母の手傳 (父母)	親を安心させる (父母)	親の使をする (父母)	親を大切にす (父母)	兄弟仲よくする (兄弟)
男	女	男	女	男	女	男	女	男
一年	二年	三年	四年	五年	六年	合計	合計	合計
106	106	106	106	106	106	106	106	106

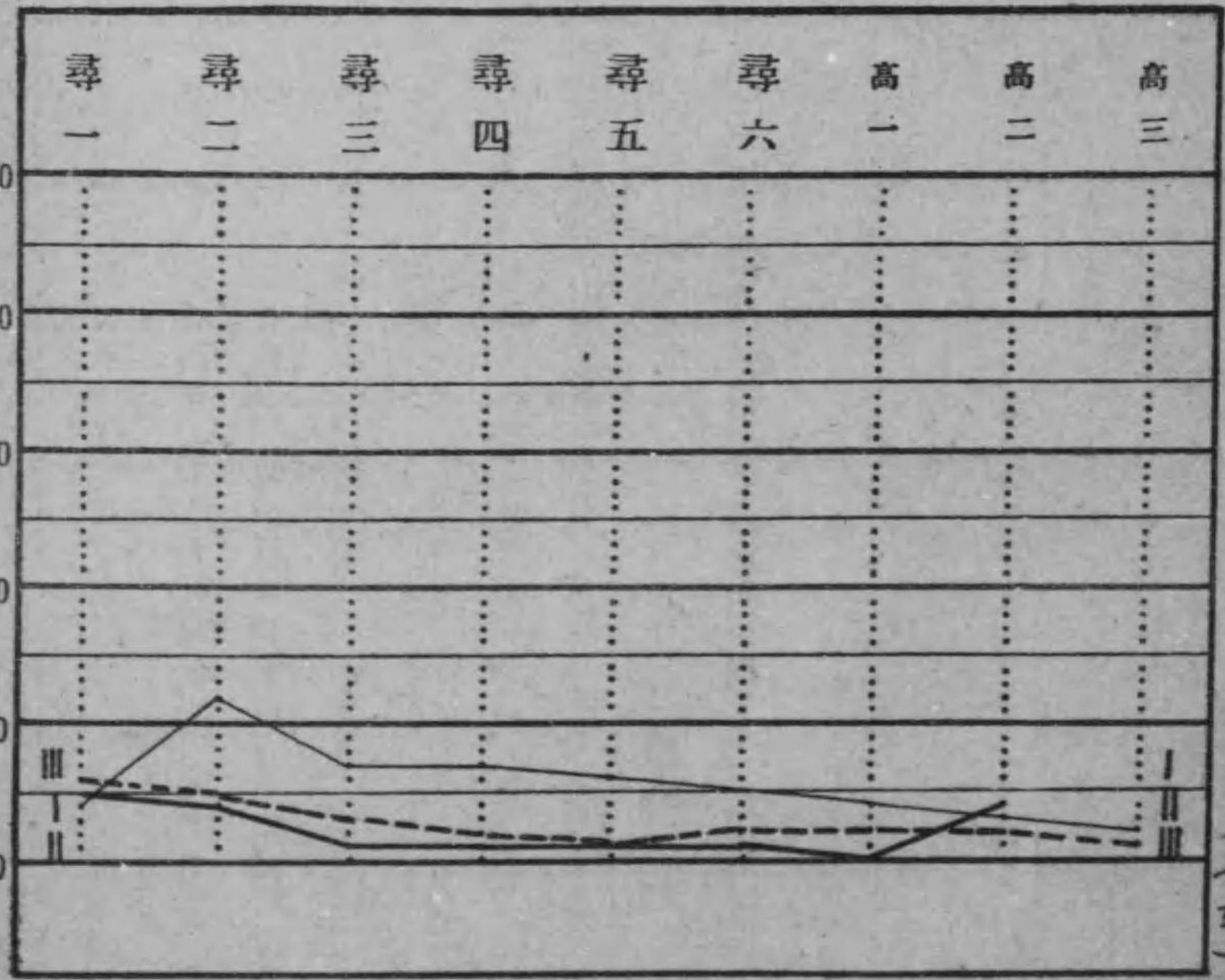
八 同上百分比

父母の命を守る (父母)	父母の教を守る (父母)	父母に心配を懸ぬ (父母)	勉 強 (自己)	父母の手傳 (父母)	親を安心させる (父母)	親の使をする (父母)	親を大切にす (父母)	兄弟仲よくする (兄弟)	父母を悦ばせる (父母)	父母の看病する (父母)	父母の用をする (父母)	先生の教を守る (學校)
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
一年	二年	三年	四年	五年	六年	合計	合計	合計	合計	合計	合計	合計
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100



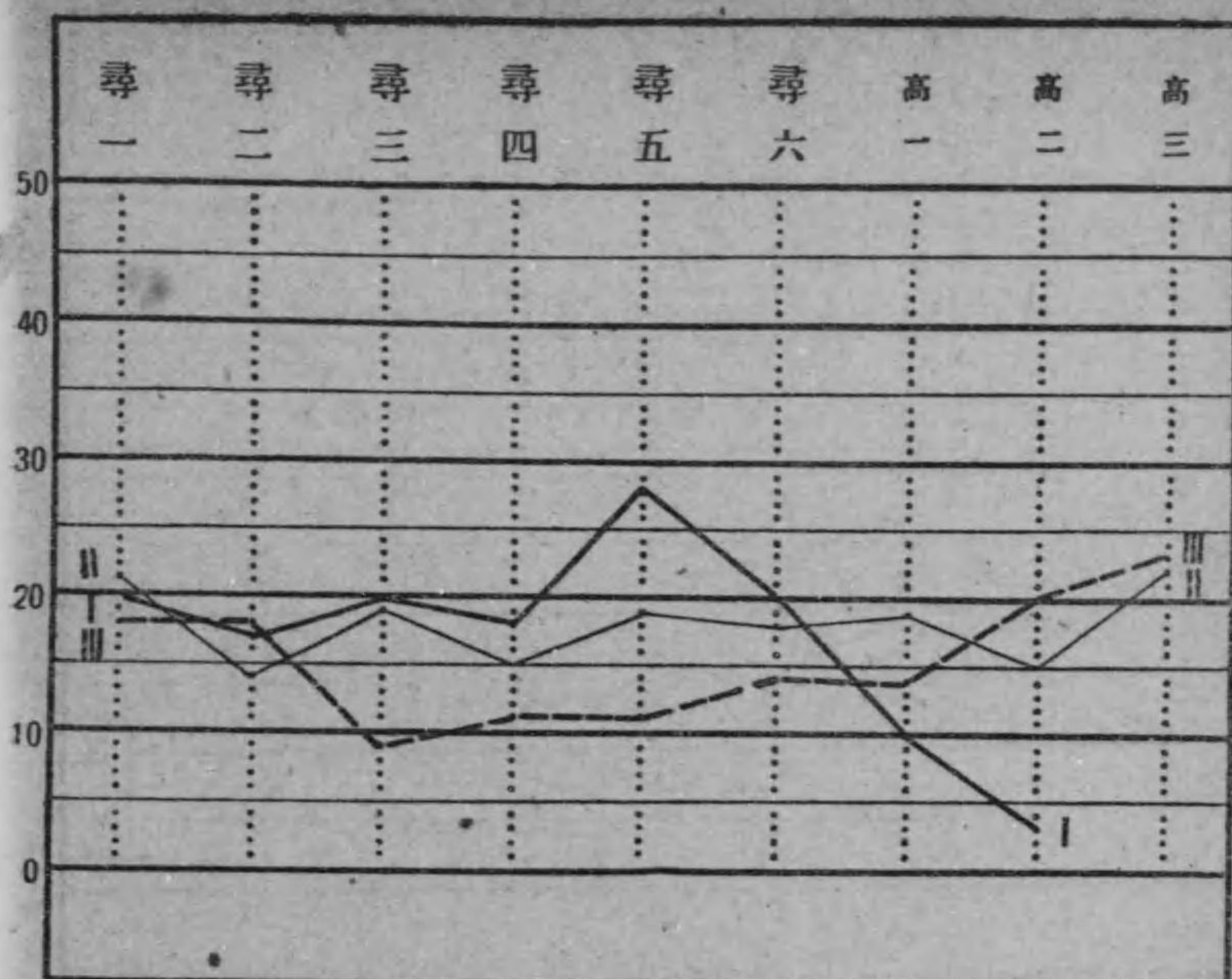
第五圖 (其の五) 家庭

(男)



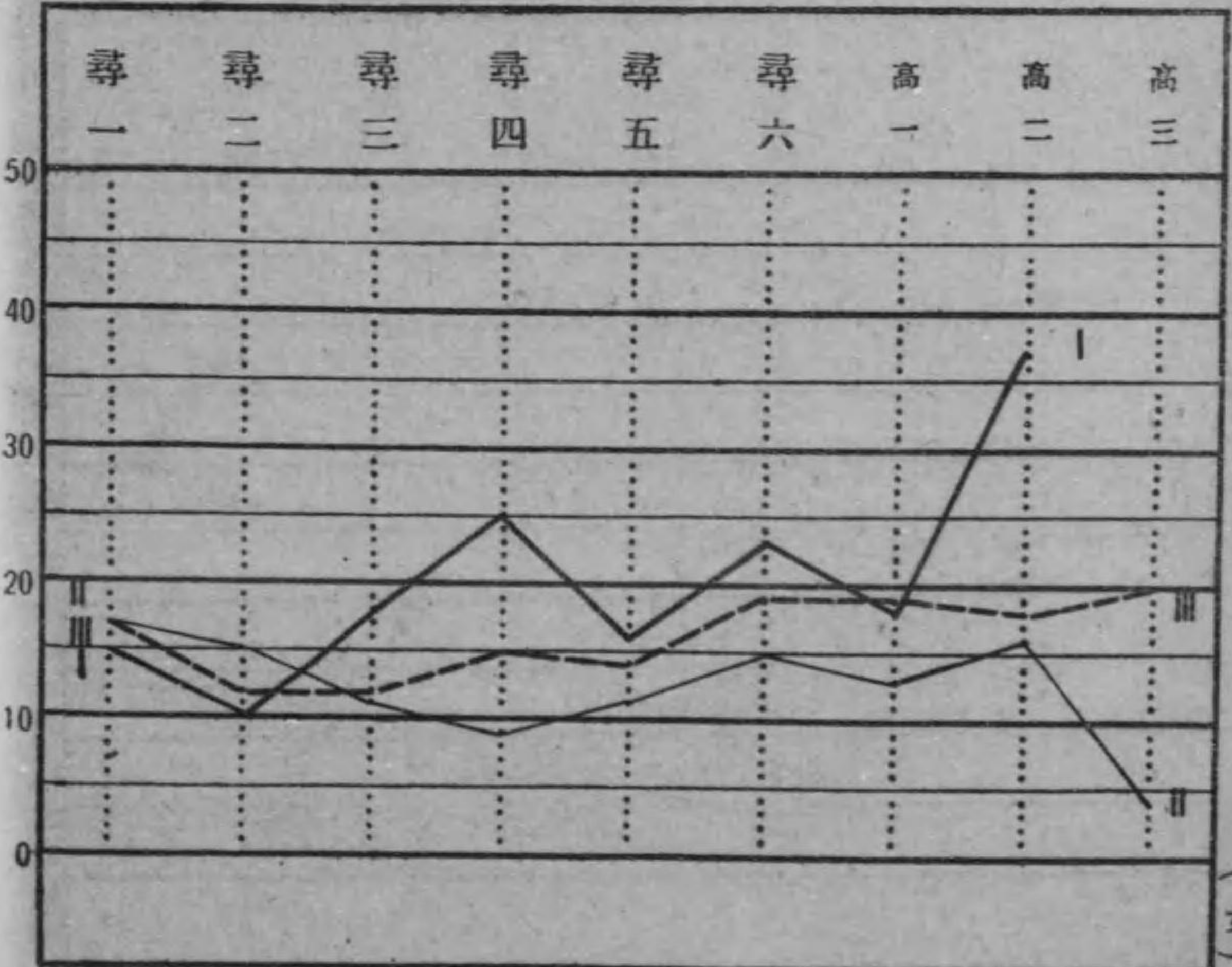
第五圖 (其の六) 家

(女)



第五圖 (其の三) 自己

(男)



第五圖 (其の四) 自己

(女)

各部の主要なる大項目を比較すれば、

父母に就いては、男女共に全體としてその變化が著しいが、先づ尋常科に於ては、男女を通じて、第三部が最も優勢である。次に男子は、第三部に次いで、三年までは第一部、四年以後は第二部が優勢である。又女子は、三年までは各部錯綜して居るが、四年以後は第三部・第二部・第一部の順位である。高等科に於ては、男女共に頗る不規則な傾向を示して居て、特に男子第一部の上昇、第三部三年の下降、女子、第一部一年の上昇、第三部三年の上昇等の急劇な變化は、殆どその意味を見ることが出来ない。(第五圖其の一・二参照)

自己は尋常科にあつては、男女共に第一部が尋常二年以後に於て常に優勢で、第二部これに次ぎ、第三部又これに次いで居る。第一部の優勢の原因は、四年以上の「勉強」理想(中項目)等が重きをなして居るからと見える。

高等科に於ては、男子第一部が急劇に下り、女子第一部二年が急劇に上つて居る。(第五圖其の三・四参照)
家は男女を通じ、尋常・高等を通じて、大體第二部が最も高い。第三部・第一部はこれに次いで居る。(第五圖其の五・六参照)

一〇 各部中項目

男	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
從順	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
心配をかけぬ	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
勉強	五	八	四	六	八	九	二	八	一七	一〇	九	九	九	七

女	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計	
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
父母の手傳	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
安心	七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
父母の用心	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
大切に	五	七	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
家の用事	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
悦ばせる	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
兄弟仲よくする	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
看病	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
理想	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
先生の教を守る	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
勤勞	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
忠義	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
奉養	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
先生の教をよく守りて勉強しお父さんやお母さんの云ひつけをよくきくと孝行になります	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
お父さんやお母さんの用をしたり家の用事をしたりすると孝行になります	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
身體	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
世話をかけぬ	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
先生の教を守り父母の教を守る	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
家の手傳	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
從順	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
心配をかけぬ	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五

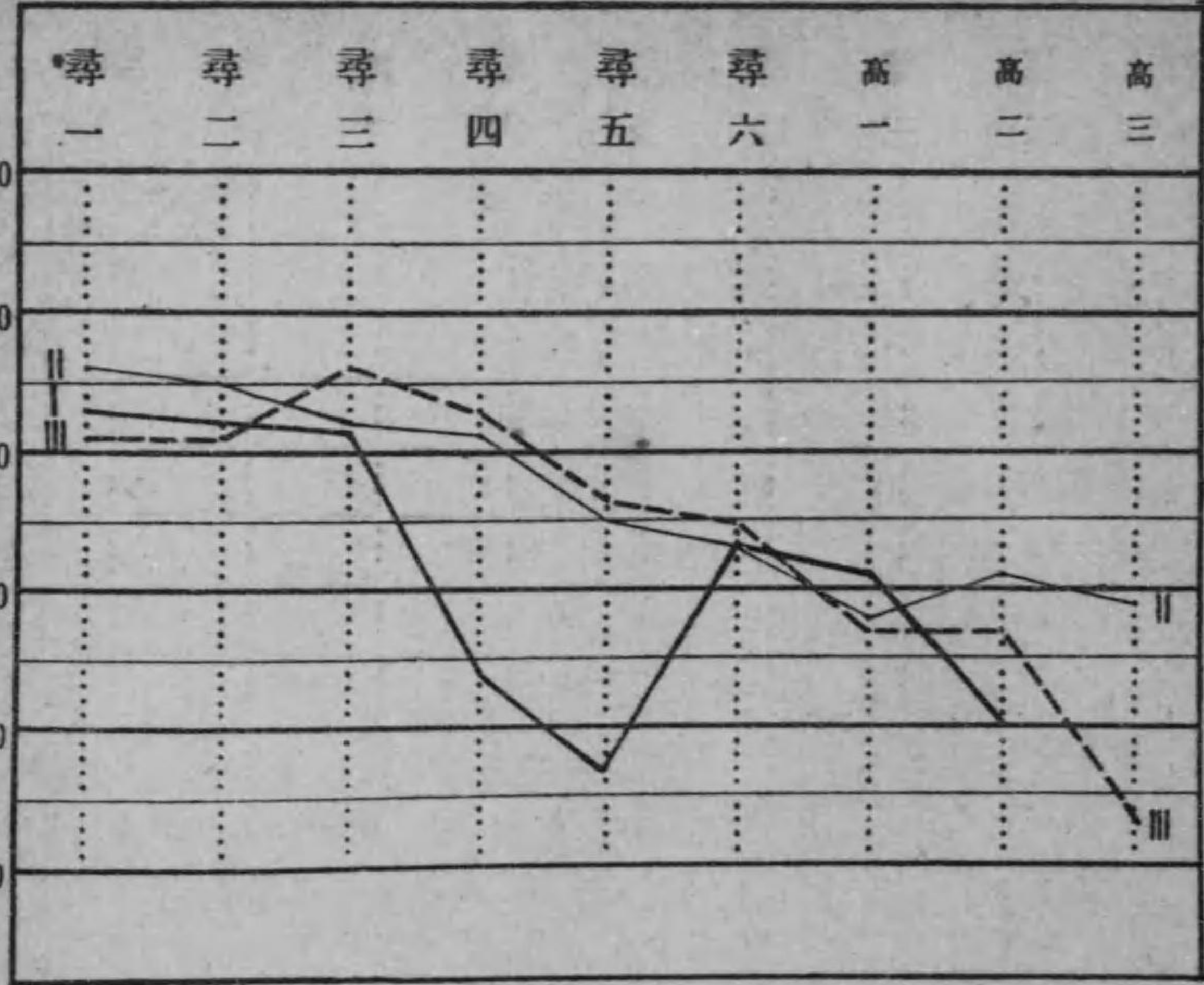
第三問 尋常科全部 中項目

家の手傳 (家)	一年			二年			三年			四年			五年			六年			合計		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III			
一																					
二																					
三																					

五七六

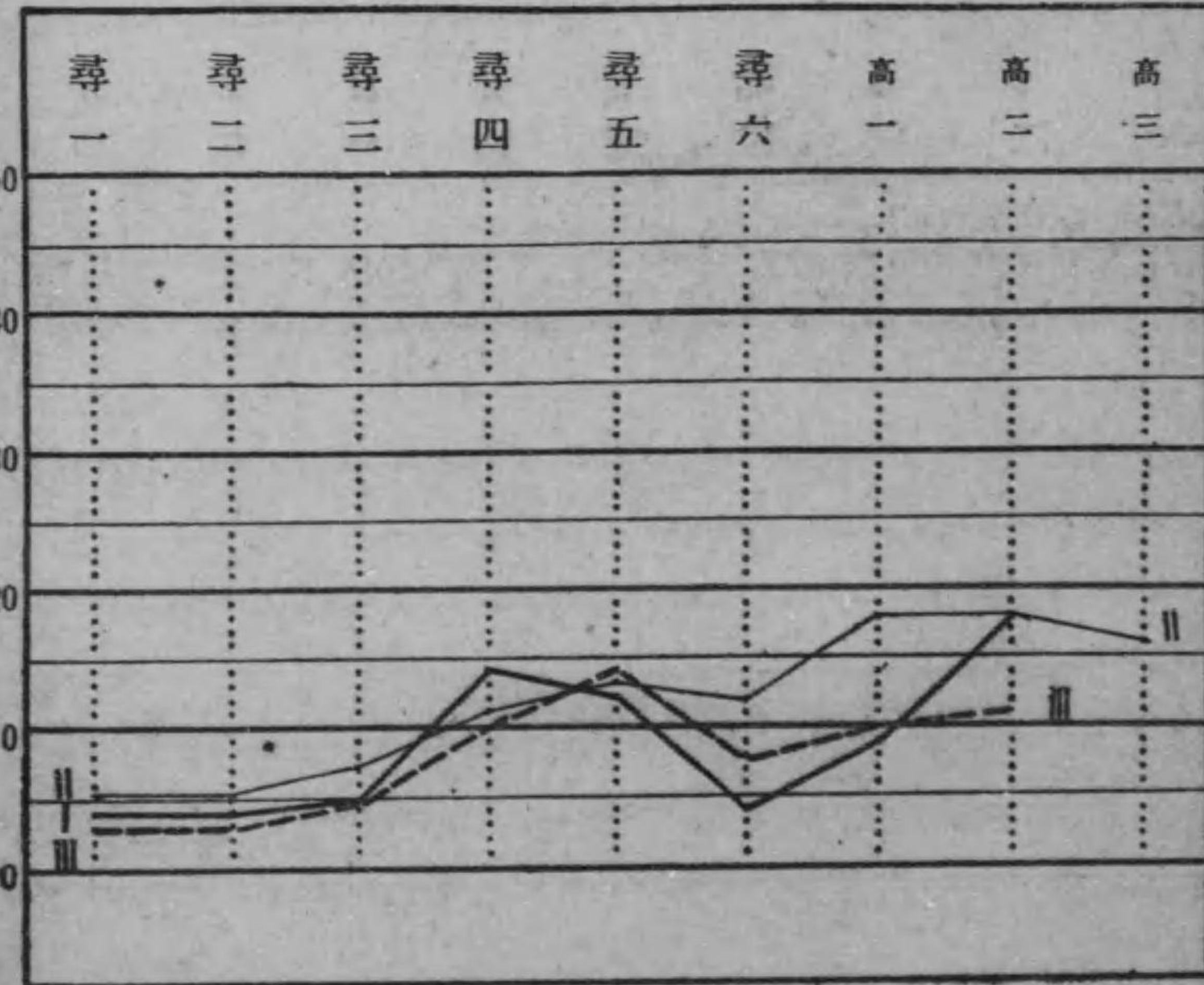
大多數は一種固有の性質を持つて居るけれども、變り易くて無頓着に流れ易い。彼等は簡単に言ひ聞かせ且つ警告してやらなければならぬ。そして屢々これを繰返へす必要がある。又少しの報酬で働く勇氣を興へ、監視はゆるめてはならぬが、充分の信用を置いて備かせなくてはならぬ。仰し難い兒童の級は殊更に努力と注意が大切である、抑制は無秩序を來さない事は確かであるが、精神を一層よくするには無力である。(パツソー)

第六圖 (其の二) 從順



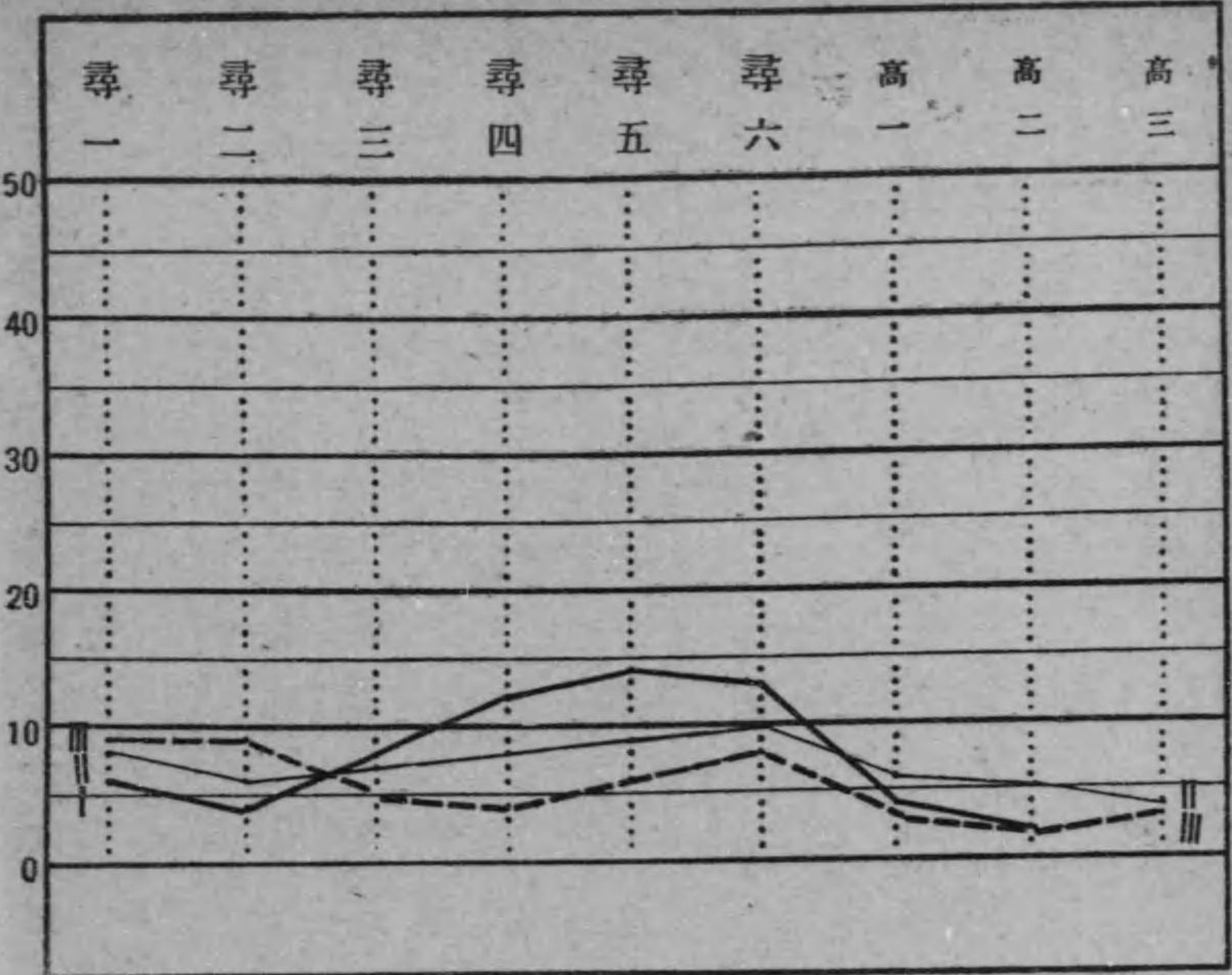
第三問 尋常科全部 中項目

第六圖 (其の二) 心配をかけた

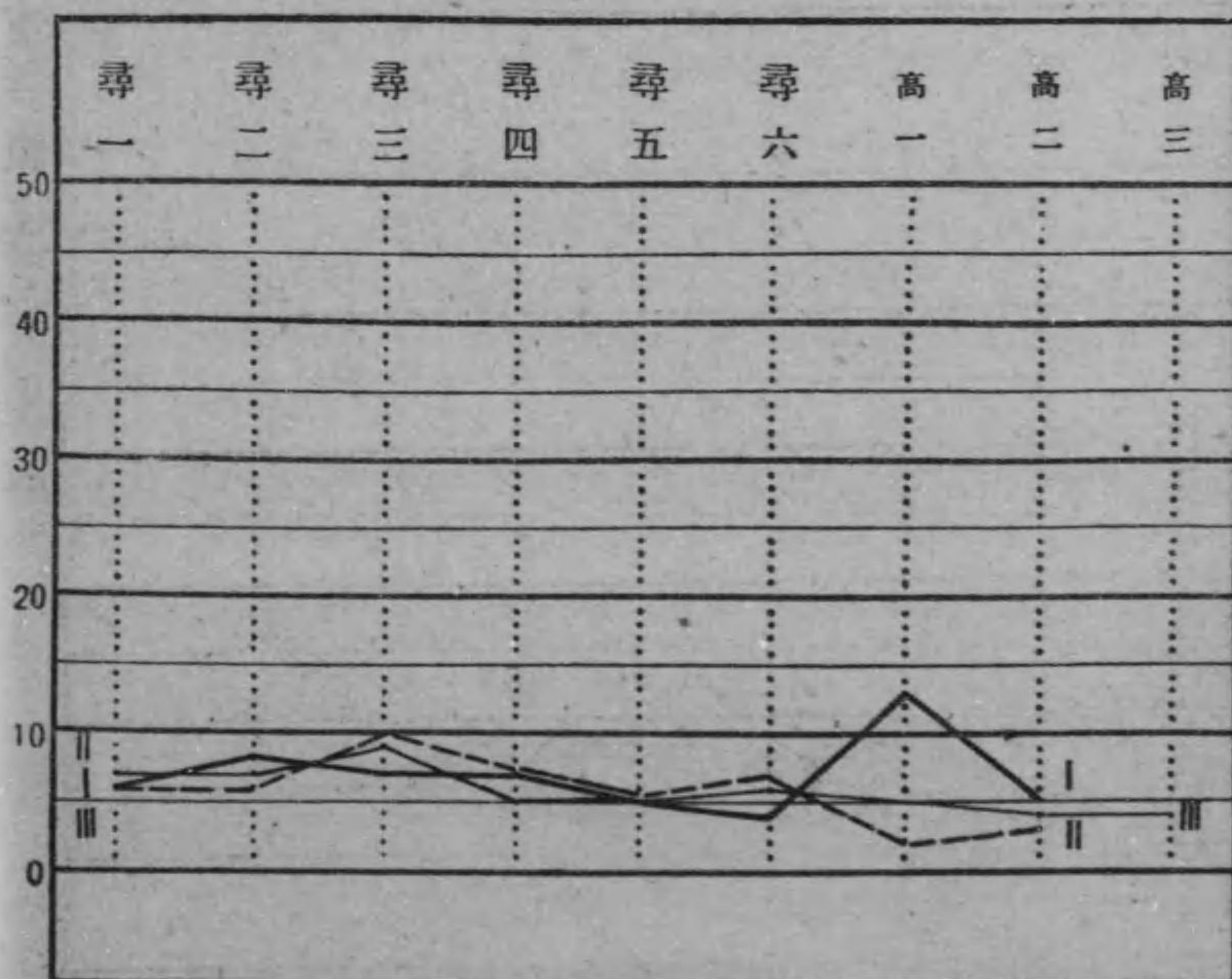


五七七

第六圖(其の三) 勉強



第六圖(其の四) 父母の手傳



主要なる中項目に就いて各部の比較を試みれば、先

づ

從順は尋常科に於ては、第三・第二・第一部と云ふ順位である。唯第三部は尋常一・二年の間は却つて第二・第一部に聊か劣つて居る。又第一部の第四・五年は急劇な下降を示して居る。

高等科も大體下降の傾向である。(第六圖其の一参照)

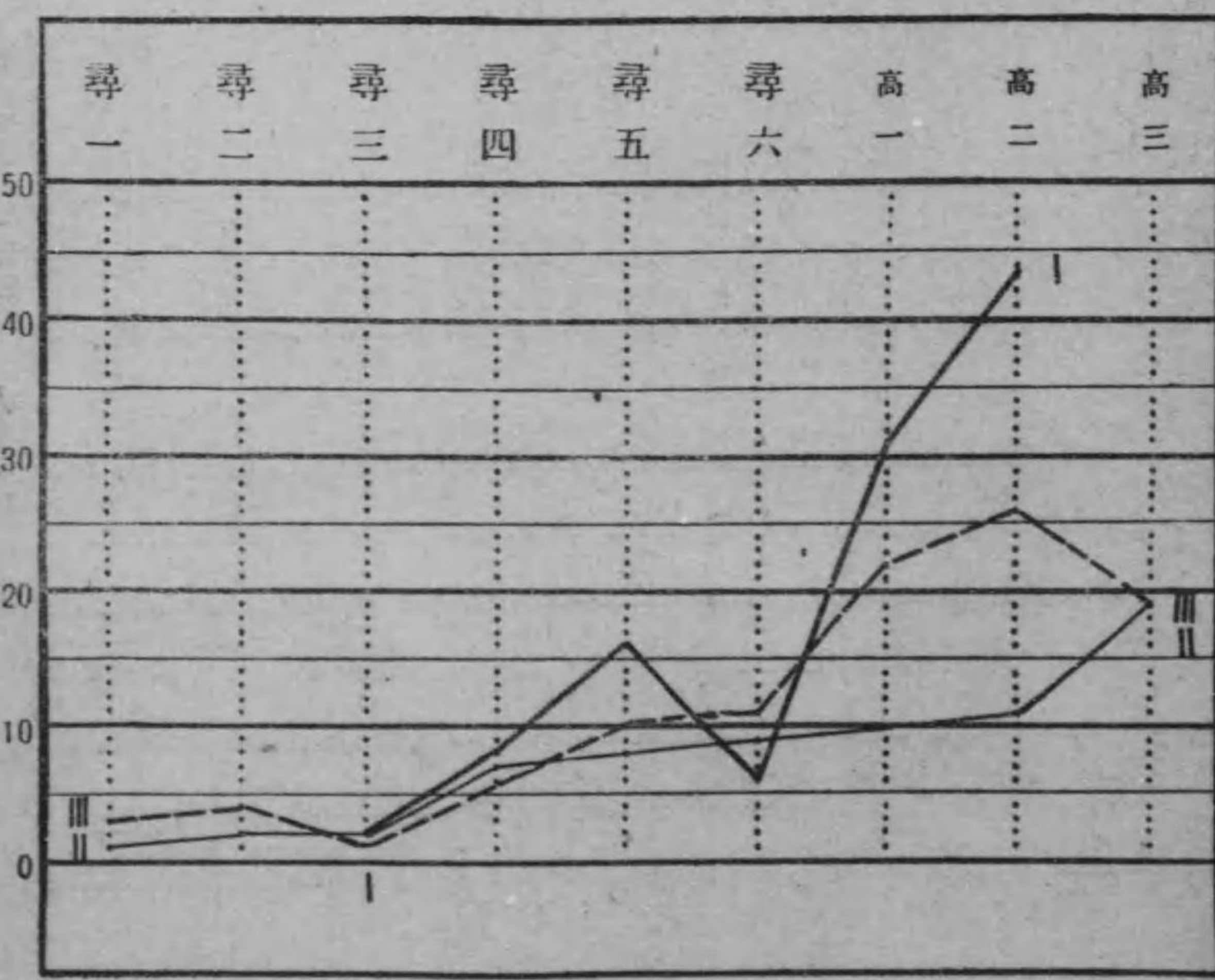
心配をかけぬは略第二・第三・第一部の順であるが、

第一部は僅に尋常四年に於て各部の最高位となり、再び最下位に下つて来る。六年は各部とも降るが、高等科は何れも上る氣配を示して居る。(第六圖其の二参照)

勉強は大體第一・第二・第三部の順であるが、尋常一・二年は第三・第二・第一部の順である。高等科は何れも下つて行く。(第六圖其の三参照)

父母の手傳は尋常三年に第三部が一〇%に上る外大なる變化がない。高等科も大體平凡であるが、唯第一

第六圖(其の五) 安心



部一年は突飛に上つて居る。(第六圖其の四参照)

安心は高等科で優勢であるから尋常科にも比較したが、大體上昇の傾向が現れて居る。尋常科は第二・第三部は平行し、第一部は三年に始まつて五年に最高位に上つて来る。高等科は各部共に上昇の形式を取るが、第一部は著しく急に上つて居る。(第六圖其五の参照)

眞の學問、眞の教育は事實に觸れて初めて行はれる。即ち人間が終日製藥場や工場や娯延や病院等で、眼や耳や鼻で、意識的に或は無意識的に刺激される多くの印象は、遂に新しい結合をた來し統一を來たし、經濟學も發見も發明もそれから生じて来る。是が眞の學問であり教育である。(テーマ)

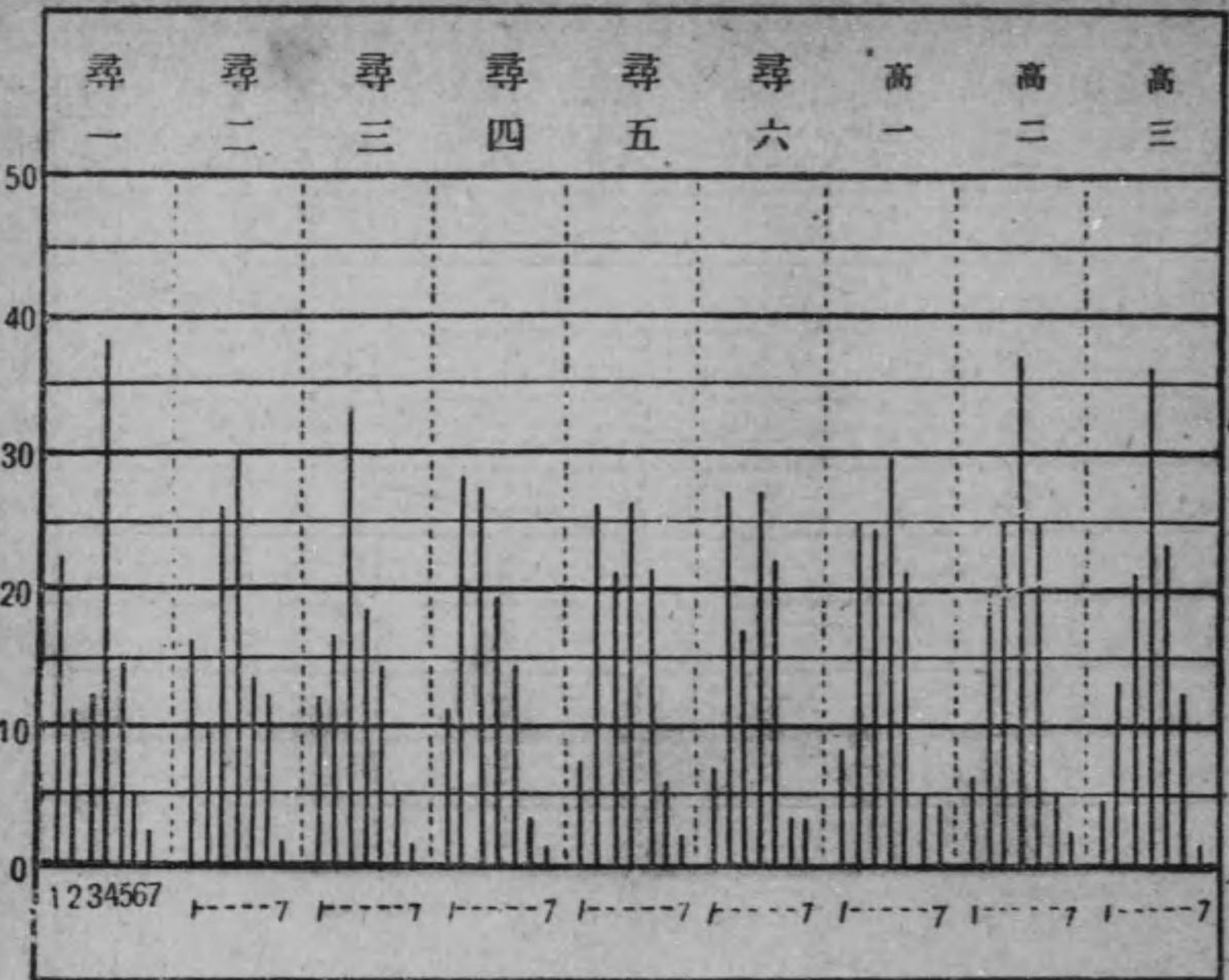
第四問の整理

第四問に關する説明

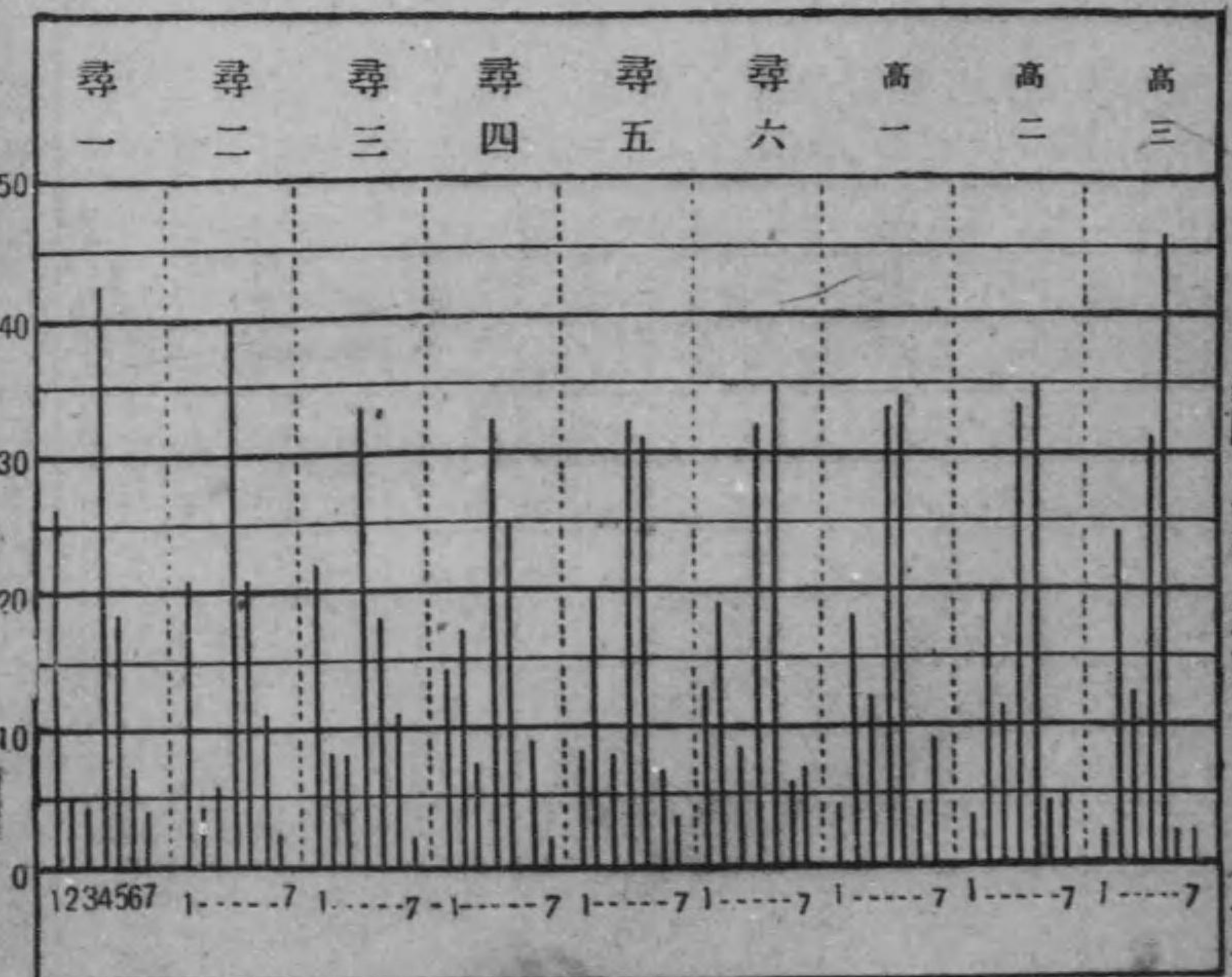
第四問の本文は

ドウシタラ、テンシサマニチュウギニナリマスカ。

と云ふのである。この問は丁度第三問に並ぶもので、小學校の兒童はどんなことをすれば天子様に忠義になると思つて居るか、それを内容的に答へさせようとしたのである。忠義とは何ぞと概念的の答を要求したものでないことは、正に第三問と同様である。即ち忠義と云ふことに就いて、兒童の意識に最も多く往來して居るところを内容的に知らうとしたものである。けれども、この問と第三問との間に頗る注意すべき差異がある。第三問にあつては、その最も多く兒童の意識に往來して居ることは、同時に、最も多く彼等の實際行動に影響を及ぼすことであるが、第四問に於ては、たとひ活潑々地たる思想感情として彼等の意識に往來して居ても、その實際行動に影響する點は極めて少く、殆ど大部分は將來に關し理想に關したことである。これは豫め期して居たところである。而して、この問も亦その答述の範圍は必ずしも狭くはない。先づその制限の方から云へば、天子様と云ふ限定がある。これは第一に忠義と云ふことの最もよく理解せられる爲であり、第二に、單に忠義と云ふ言葉に就いて考へさせる嫌を避けて、寧ろ天子様に對する心情や態度を見ようとした爲である。又第三に、天子様と云ふのは我が國と云ふことを背景に置いて居ることも勿論である。以上の制限あるにも係らず、これに對する答は必ずしも窮屈でない。



第一圖 (其の二) 1 天皇 2 國 3 變時 4 自己 5 家庭 6 學校 7 社會 (男)

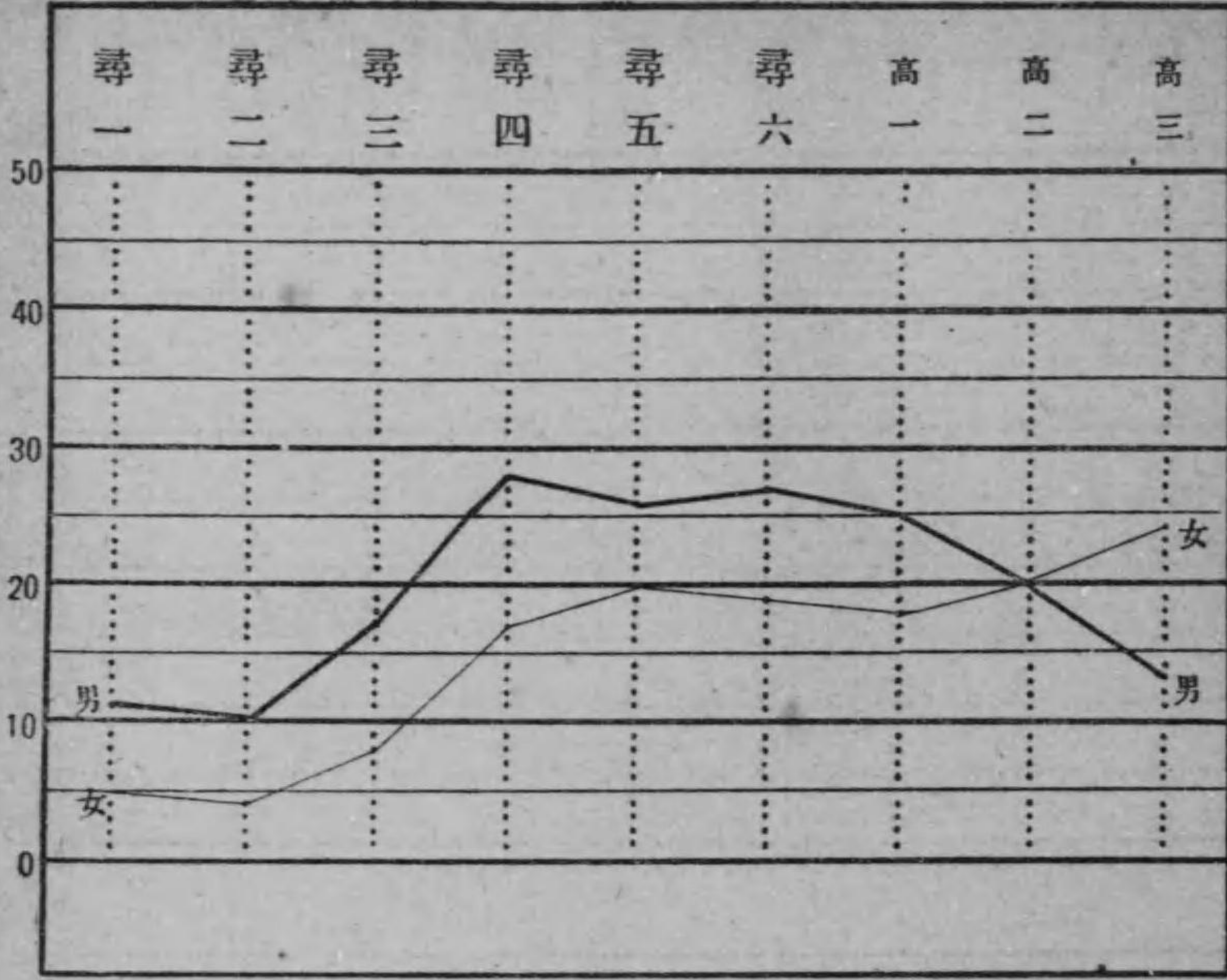


第一圖 (其の二) 1 天皇 2 國 3 變時 4 自己 5 家庭 6 學校 7 社會 (女)

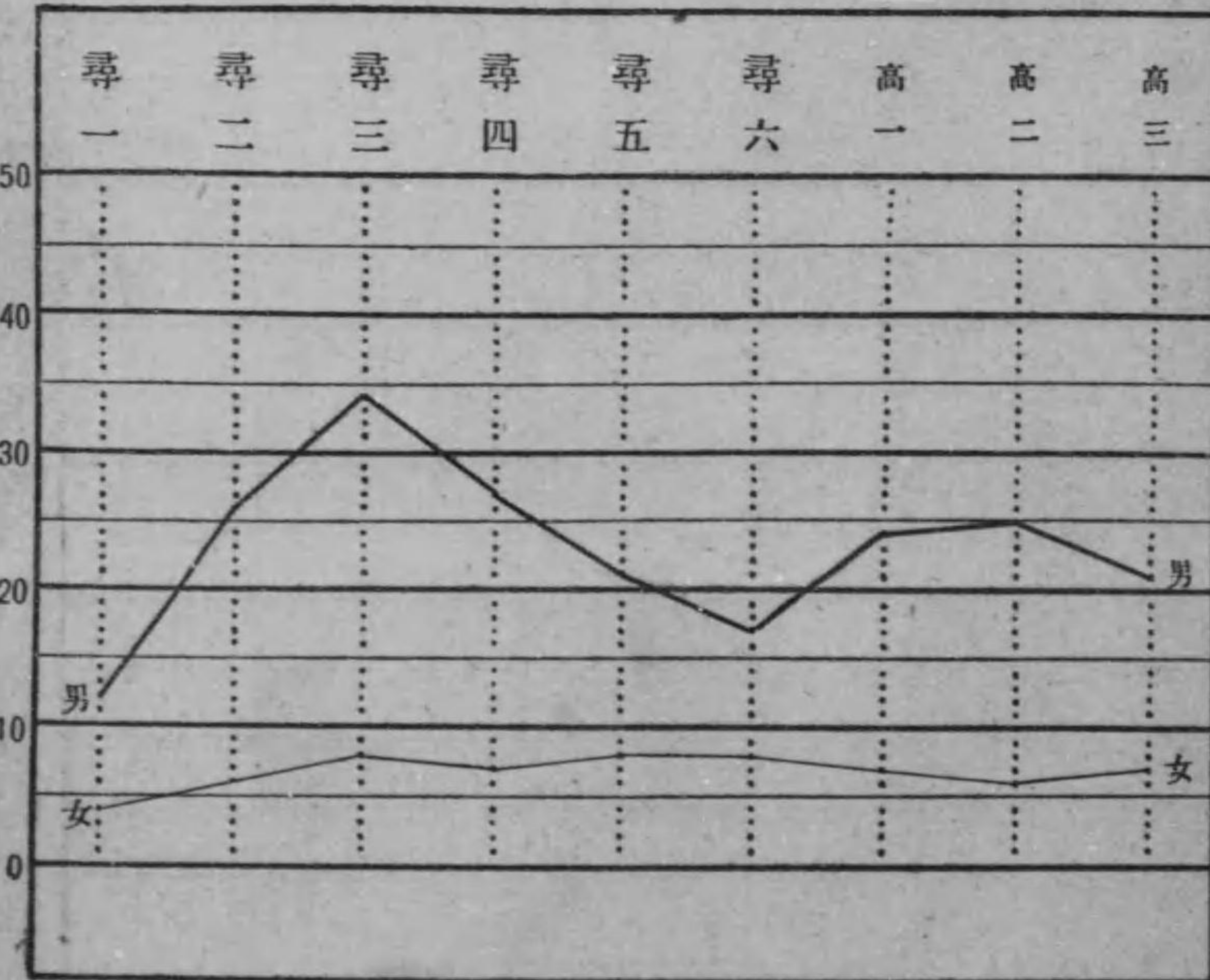
(口) 同上正解數百に對する割合

社學天變國家自	會校皇時庭己	一年	二年	三年	四年	五年	六年	合計
男	二	二	一	二	二	二	三	二
女	四	一	一	一	一	一	一	一
平均	三	一	一	一	一	一	一	一

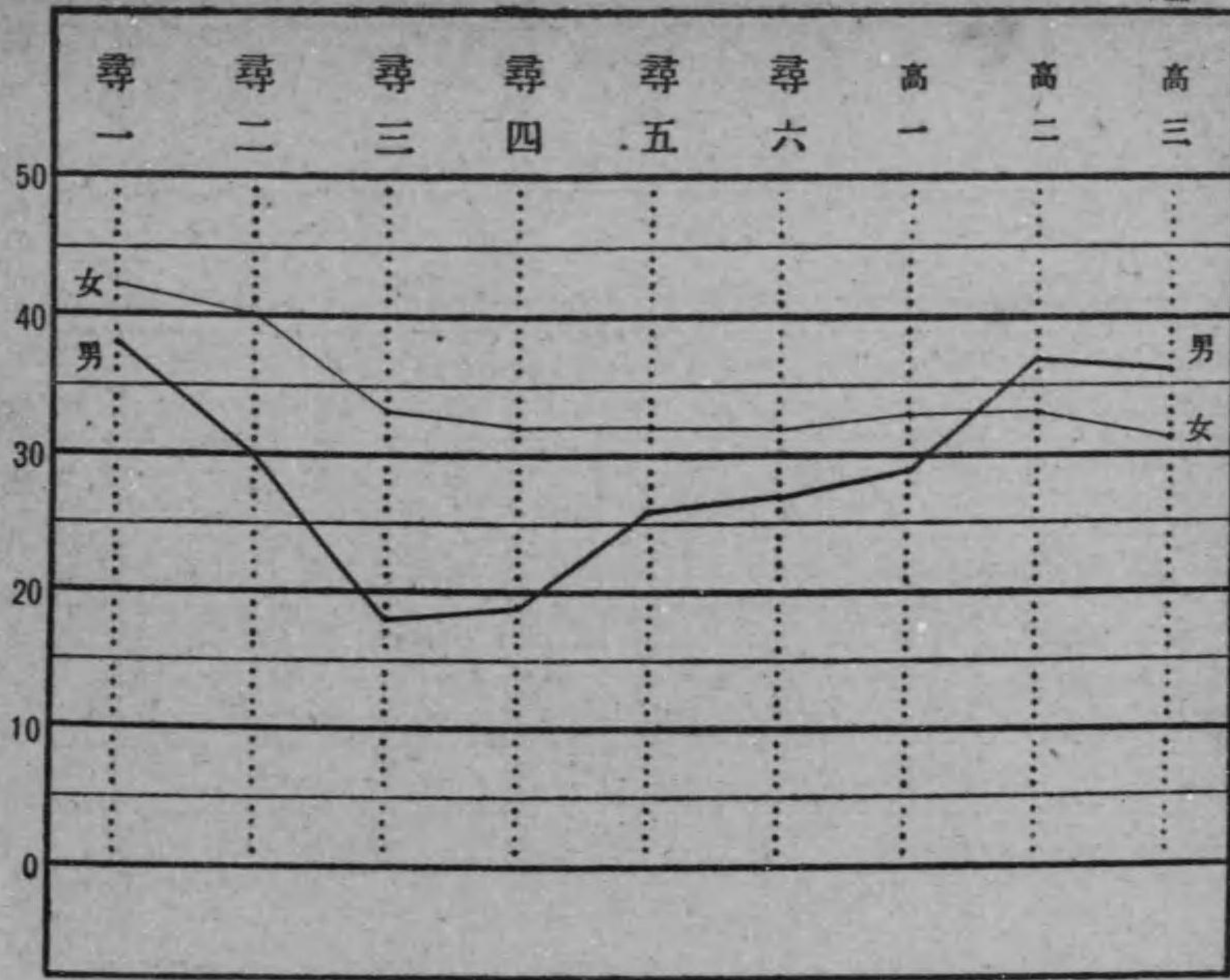
神社學家自變國皇皇天	佛會校庭己時	一年	二年	三年	四年	五年	六年	合計
男	一六	一	一	一	一	一	一	一
女	二	二	二	二	二	二	二	二
平均	三	三	三	三	三	三	三	三



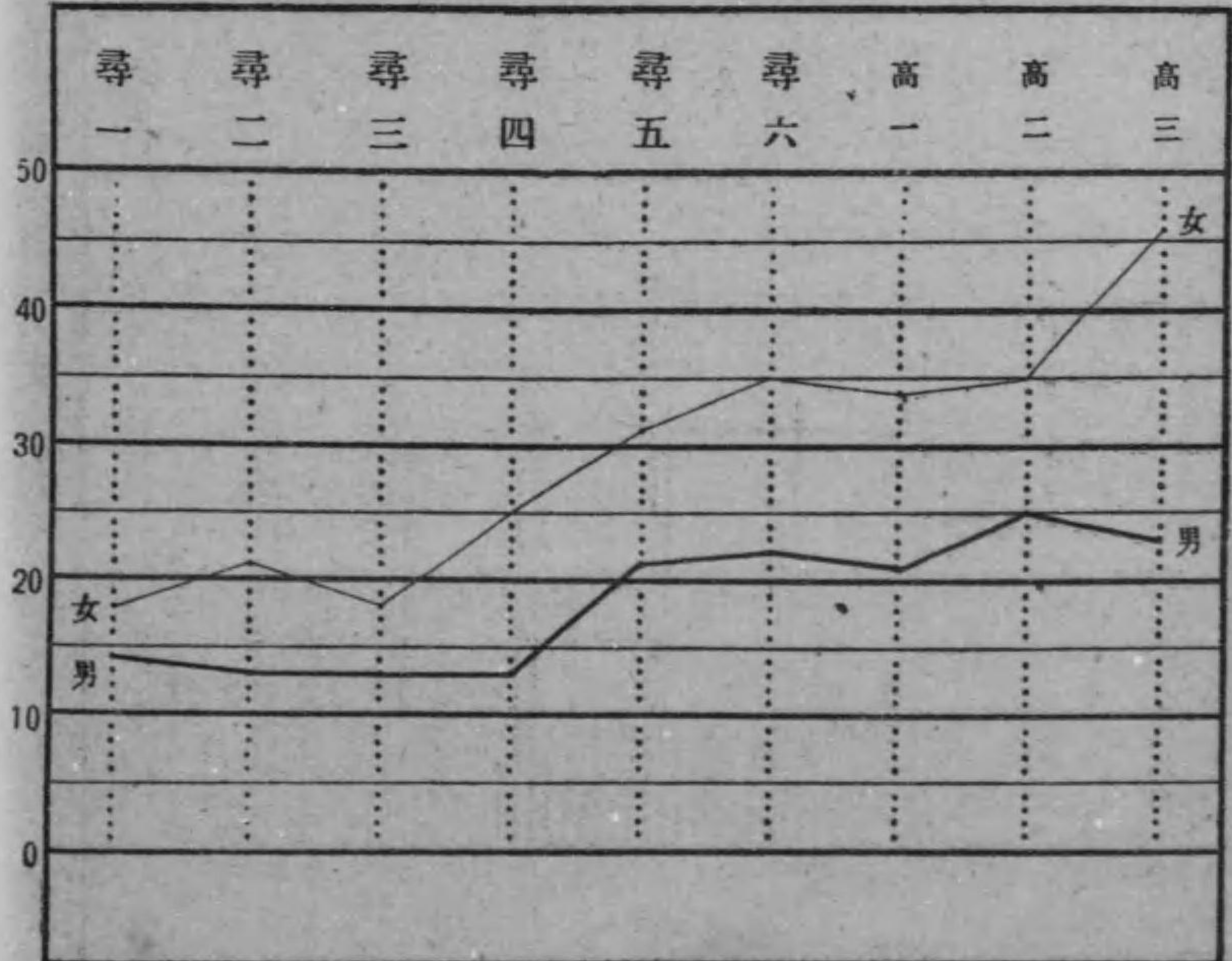
第二圖 (其の三) 國家



第二圖 (其の四) 變時

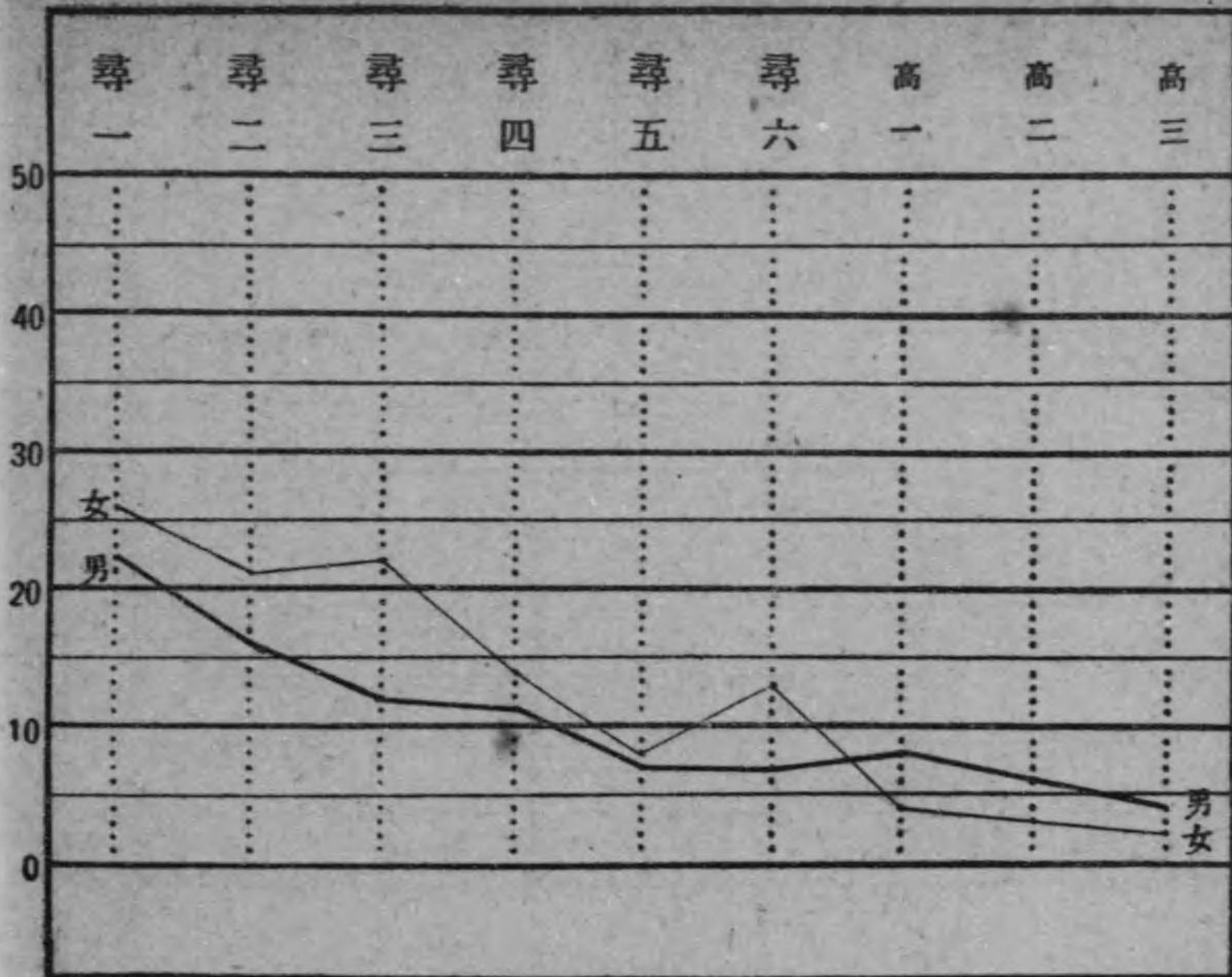


第二圖 (其の二) 自己

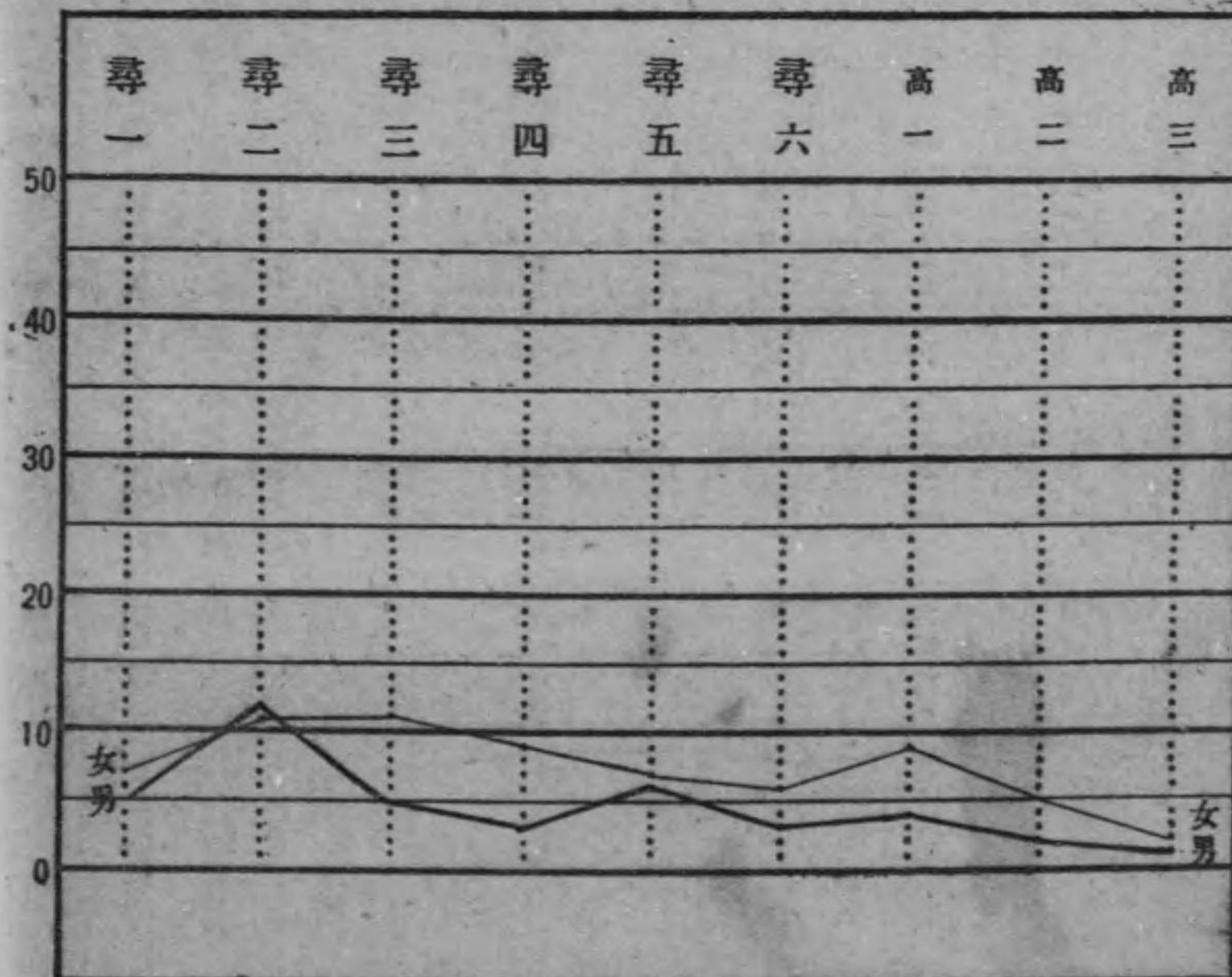


第二圖 (其の二) 家庭

第二圖(其の五) 天皇



第二圖(其の六) 學校



第四問の大項目は、その單獨のものは總て十項であるが、その並列のものを合すれば實に六十項の多き上つて居る。今その單獨の大項目中優勢なものを挙げると、先づ天皇・國・變時・自己・家庭・學校・社會等で、その百分比は自己二九%家庭一七%國一五%變時一四%天皇一三%學校四%等である。けれども既に第三問に於て觀察した如く、並列中に含まるゝ大項目の數をこれ等の單獨の項目に合算すると、その結果、實に

自己 三〇% 家庭 二二% 國 一七% 變時 一六% 天皇 一四%
 學校 七% 社會 二%

となつて來る。即ち自己に一%、家庭に四%、國に二%、變時に二%、天皇に一%、學校に三%を増して居る。今これ等の主要なるものに就いて注意すべき點を挙げると、

自己に關するものは、第一全體として何れの項目よりも優勢である。第二に尋常科に就いて男女の對照を見れば、男子は常に女子に劣つて居り、且つその差も可なり著しいのは注意すべき現象である。第三、男子だけに就いて云へば、尋常一・二年及び五・六年に於ては、總ての他の項目の上位を占めて居るが、その内容となつて居るものは「勉強」「よく働く」「勅語を守る」「偉人になる」等である。第四、男子の學年の變化は尋常一年の三八%から三年の一八%まで急劇に下り、四年以後再び漸く上つて高等科に續いて居る。第五、女子に就いて云へば、何れの學年にも何れの項目にも上位を占め、且つその差も著しいが、尋常五年になれば漸く「家庭」が優勢になり、六年に至つて全く「家庭」が最上位に上り、高等科に至つて益々この傾向を發揮して居る。第六、女子の學年變化の狀況は、尋常一年の四二%は、漸く下つて三年に三三%となり、以後高低なく高等科に續いて居るの

は、男子が一度急劇に下つて再び上つて行くのとは頗るその趣を異にして居る。(第一圖及第二圖其の一参照)
 家庭に就いては、第一、男子が、自己の場合と同じく、常に女子よりも劣つて居て、然かもその差も著しいことは最も鮮明な事實である。而して男女の答述の主なる内容は、孝行即ち「父母の命を守る」「父母の教を守る」(小項目)等である。第二、男子の學年變化は尋常四年まで凡そ一四%で進んで居るが、五年には俄に二一%に上り六、年から高等科にかけて同じ傾向を續けて居る。第三、女子の學年の變化は、女子は男子に比して著しく率が高い上に、その上つて行く可なりも頗る急である。即ち尋常一年の一八%が二年に二一%となり、三年に一頓挫して一七%となるが、四年以後は再び急劇に上つて、六年に三五%に達し、高等科に至つても上らうとする傾向を示して居る。(第二圖其の二参照)

國家は、第一に男子が常に女子より優勢で、その差も六%乃至一〇%の間隔で略平行して居る。第二に、男子の學年變化は、尋常一・二年の一・二%或は一〇%は、三年を経て四年に二八%まで上つて頂點となり、以後略平に進んで行くが、聊か下降の傾向が見える。第三に、女子の變化は男子と略平行して行くが、この頂點は尋常五年の二〇%である。高等科を併せて考へれば、男子が下るに反して女子が上つて居る。(第二圖其の三参照)

變時に處することは、第一、男女の對比が實に著しいものである。即ち男子の平均二三%に對して女子は僅に七%である。然かもその學年變化の方向も、男子が大規模の高低があるに反し、女子は殆ど何等の變化なく低く進んで居る。男子の優勢なのは主として「軍に行つて働く」戦争に行つて手柄をする等である。第二、男子は尋常一年の一・二%が三年の三四%まで急劇に高まつて頂點となつて居るが、それが一度六年の一七%に下り、高等科

に至つて再び上つて二一%乃至二五%になつて居る。第三、然るに女子は尋常一年の四%は三年に八%に上るが、以後は高等科を通じて六%乃至八%の間を往來して居るだけである。(第二圖其の四参照)

天皇は、第一に、男女共に下降の傾向になつて居ることは頗る注意すべき現象である。即ち平均の一四%は、尋常一年から高等三年まで漸次に

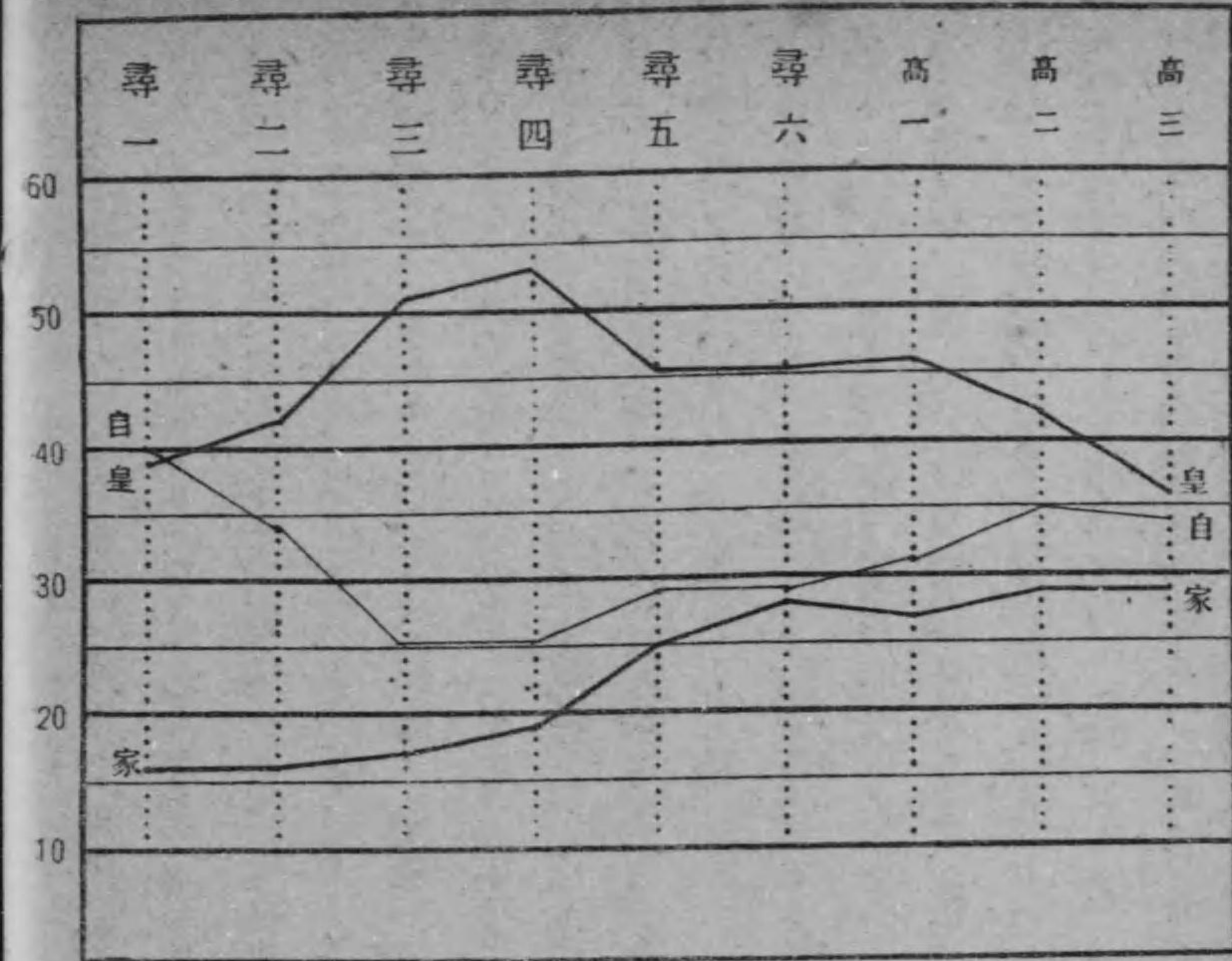
二三%	一八%	一六%	一二%	七%	九%	六%	四%	三%
-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----

となつて居る。又女子は、尋常科に於て常に男子よりも優位になつて居ることも注意すべきことである。第二に、男子の學年變化は、尋常一年の二・二%が單に五・六年の七%まで下るだけで、高等一年には再び上つて僅に八%になり、以下又下つて居る。第三、女子にあつては、尋常一年の二・六%が、二・三年には著しく下らないけれども、四年から五年に急下して八%となり、六年に僅に上るけれども、高等一年の四%以後、續いて下つて居る。殊に高等科は男子よりも下位にある。(第二圖其の五参照)

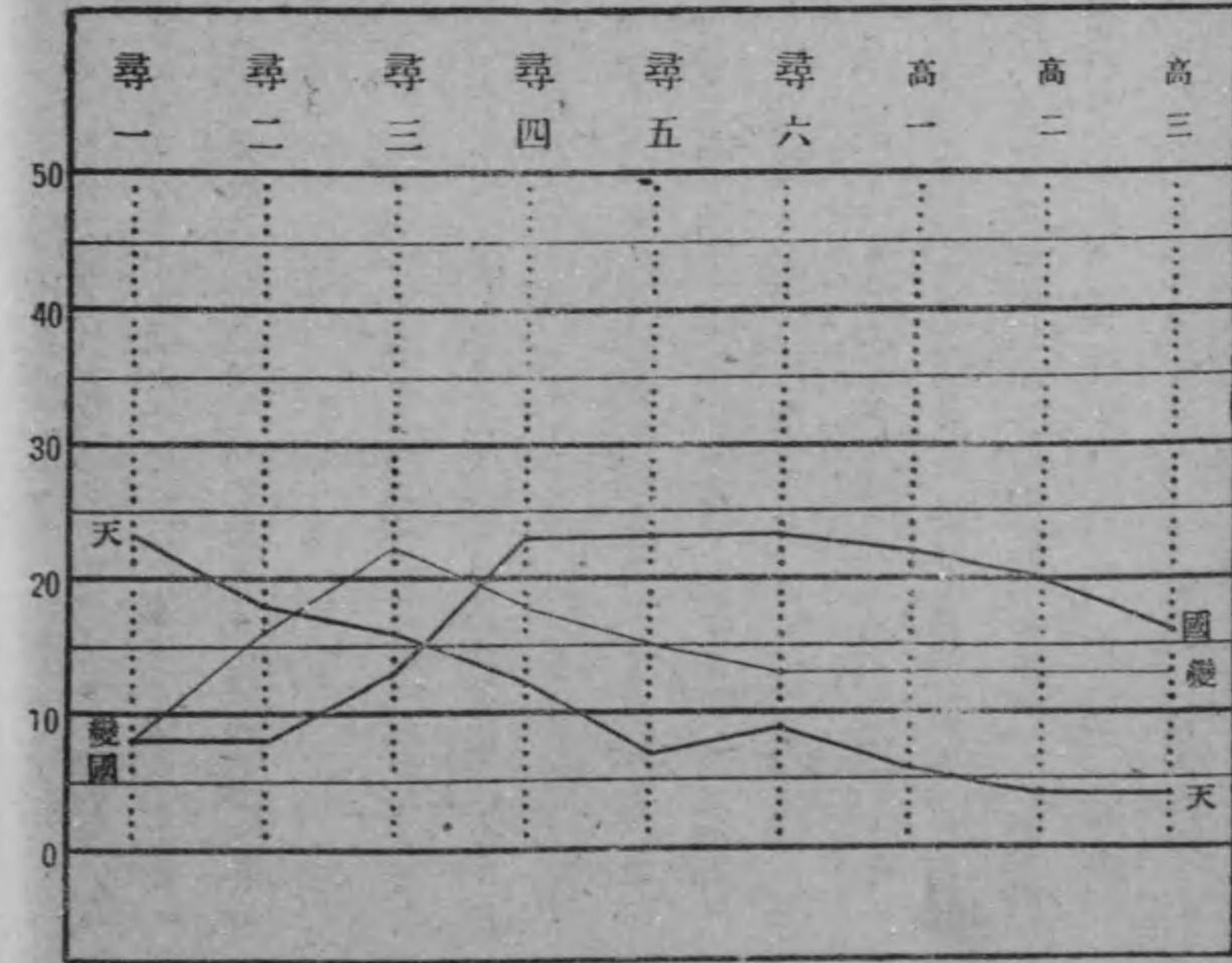
學校は、第一、男女とも小なる高低が多いけれども、概観すれば、漸次に下つて行くこと云ふことが出来る。その百分率も概して低く、平均七%である。第二に、男子は尋常二年の一・二%を頂點として四年の三%に下り、五年の六%から漸次高等科まで再び下つて行く。第三に、女子は、尋常二・三年の一・一%を頂點として、六年の六%まで下り、高等一年の九%から再び下つて行く。(第二圖其の六参照)

社會は平均二%であるが、尋常四年までは一%乃至二%より上らない。五・六年に至つても僅々三%になつて居るばかりである。

第三圖 (其の二) 天皇國變時 自己 家庭 (男)



第三圖 (其の二) 天皇國變時 (女)



以上の大項目中、「天皇」と「變時」、「國家」と「變事」とは、その内容が共通して居るものが頗る多い。次に又「天皇」と「國家」とも共通の點が少くない。結局三者は明確に區別することが出来ない。これ等は普通に「忠義」を盡すと云ふ場合に第一に思ひ浮ぶ對象である。それ故にこれ等關係の密接なるものを合せて、他の大項目と比較することは頗る必要なことである。第三圖は即ちこれである。先づ、

第三圖其の一は(一)「自己」(二)「天皇」と「變時」と「國」を合算したもの及び(三)「家」の對照である。第一に、天皇が著るしく優位で、自己と家庭とは下位にあつてこれに對應して居る觀がある。第二に、天皇が三・四年に上つて居て、五・六年以後に於て下る形は、先づ自己が三・四年に下つて、五・六年以後に於て上つて行くのと正しく對應して居る。又家庭は自己や天皇より著しく下位から出發して、四年まで上つて行く傾向は、遙に天皇の上つて行くのと平行して居る。而して、九・六年以後の遅緩な上り方は、天皇の五・六年以後の下り方とも對應して居る。第三かくしてこれ等の三者は尋常六年以後漸く狭まつて來て、高等三年に至つては、最低二九%から最高三六%の間に集まつて來て、結局同じところ合して行く様にも見える。更に。

第三圖其の二は、「國」「變時」及びこれ等を合算しない「天皇」の對照を見たもので、この全體が即ち第三圖其の一の「天皇」の内譯である。第一に、「天皇」は初めから常に下降の傾向を示して行くに反し、「國」と「變時」は尋常三四年まで共に一度上つて行く。第二に、「國」は尋常四年から六年まで高低なく進んで行くが、高等科に至つて聊か下つて行く氣味がある。第三に、「變時」は尋常三年から六年まで徐々に下り、高等科には高低がない。概観すれば、三者共に中學年以後は下降の傾向を以て居るが。これは恐らく一方に於て「自己」や「家庭」が

この時期に於て高まつて来るからであらう。

三 各學年中項目

項目	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
孝行 (家庭)	140	123	136	122	134	126	139	127	138	128	137	129	135
勉強 (自己)	145	130	142	127	140	125	143	128	141	130	139	131	144
國の爲につくす (國)	78	66	74	61	72	59	75	62	73	60	76	63	80
よく働く (變時)	80	71	78	69	76	67	79	70	77	68	81	72	82
理想 (自己)	257	218	245	206	232	193	240	201	227	188	235	196	248
兵役 (國)	227	204	214	191	208	185	211	188	203	181	206	183	212
勤勞 (自己)	187	164	173	150	168	145	171	148	165	143	169	146	174
御命を守る (天皇)	135	118	124	107	121	104	123	106	119	102	120	103	125
父母に従順 (家庭)	193	178	185	170	182	167	184	169	181	166	183	168	186
教師の教を守る (學校)	70	62	68	60	66	58	64	56	62	54	60	52	67
よく戦ふ (變時)	108	95	102	89	98	85	101	88	96	83	99	86	104
勅語を守る (自己)	124	110	117	103	114	100	111	97	108	94	105	91	112
奉公 (天皇)	26	22	24	20	23	19	25	21	22	18	24	20	26
命を捧げる (變時)	25	21	23	19	22	18	24	20	21	17	23	19	25
忠君愛國 (國)	7	6	7	5	6	4	7	5	6	4	7	5	8
善行 (自己)	18	15	16	13	15	12	16	13	15	11	16	12	17

項目	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
學校にて勉學 (學校)	50	40	45	35	42	32	44	34	41	31	43	33	46
戰死 (變時)	11	9	10	8	11	7	12	6	10	5	11	4	13
身體 (自己)	55	45	50	40	48	38	51	41	49	39	52	42	55
君を大切にす (天皇)	43	33	38	28	35	25	37	27	34	24	36	26	39
父母を大切にす (家庭)	55	45	50	40	48	38	51	41	49	39	52	42	55
節約 (自己)	5	4	5	3	4	3	5	2	4	2	5	1	6
富國 (國)	11	9	10	8	11	7	12	6	10	5	11	4	13
行儀 (自己)	81	69	76	64	73	61	75	63	72	60	74	62	77
尊崇 (天皇)	25	21	23	19	22	18	24	20	21	17	23	19	25
出征 (變時)	27	23	25	21	24	20	26	22	23	19	25	21	27
愛國 (國)	6	5	6	4	5	4	6	3	5	3	6	2	7
家の仕事 (家庭)	24	20	22	18	21	17	23	19	20	16	22	18	24
兄弟 (自己)	27	23	25	21	24	20	26	22	23	19	25	21	27
國産 (家庭)	4	3	4	2	3	2	4	1	3	1	4	0	5
奉仕 (天皇)	23	19	21	17	20	16	22	18	19	15	21	17	23
奉納 (天皇)	33	27	30	24	28	22	31	25	29	23	32	26	34
神佛 (神佛)	26	22	24	20	23	19	25	21	22	18	24	20	26
公益 (社會)	18	15	16	13	15	12	16	13	15	11	16	12	17
御教を守る (天皇)	21	17	19	15	18	14	20	16	17	13	19	15	21
國運 (國)	4	3	4	2	3	2	4	1	3	1	4	0	5
安慮 (天皇)	2	1	2	1	2	1	2	1	2	0	2	0	3
國法 (國)	2	1	2	1	2	1	2	1	2	0	2	0	3
御満足 (天皇)	25	19	22	16	20	14	23	17	21	15	24	18	26
殺傷 (變時)	39	33	36	30	34	28	37	31	35	29	38	32	40
正直 (社會)	8	7	8	6	7	5	8	6	7	5	8	6	9

第四問 尋常科全部 中項目

職業	(自己)	一年	二年	三年	四年	五年	六年	合計
心配をかけぬ	九一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八
皇恩	七六	七三	七〇	六七	六四	六一	五八	五五
守護	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九
蓄財	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六
恤兵献金	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六
立身出世	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五
手傳	一三	一二	一一	一〇	〇九	〇八	〇七	〇六
傷病者を助く	八	七	六	五	四	三	二	一
護國	九	八	七	六	五	四	三	二
校則を守る	五	四	三	二	一	〇	〇	〇
金儲け	三	二	一	〇	〇	〇	〇	〇
人に従順	三	二	一	〇	〇	〇	〇	〇
誼憤	七	六	五	四	三	二	一	〇
友達	一〇	九	八	七	六	五	四	三
女子の務	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
分捕	三	二	一	〇	〇	〇	〇	〇
皇室を尊ぶ	三	二	一	〇	〇	〇	〇	〇
國利	三	二	一	〇	〇	〇	〇	〇
父母先生の教を守る	五	四	三	二	一	〇	〇	〇
家を興す	二	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
發明	二	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
規律	二	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
救助	八	七	六	五	四	三	二	一

六〇〇

第四問 尋常科全部 中項目

勇氣	(自己)	一年	二年	三年	四年	五年	六年	合計
忠孝	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇
安心させる	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九
祭祀	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八
國威	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九
博愛	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八
祝賀	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	九九
道徳を守る	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
皇室につくす	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
人に親切	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
修身の教を守る	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
自治	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
物を大切にす	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
父母を悦ばせる	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
禮儀	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
家を守る	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
喧嘩せぬ	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
祖先を敬ぶ	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
家を齊へる	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
盗みをせぬ	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
修養	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
出征兵士の慰問	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
攻略	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
納税	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
敵を苦しむ	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
皇居	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇

六〇一

中項目	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
褒賞														
國體														
夫婦和合														
皇室の繁榮														
世話かけぬ														

四 同上百分比

中項目	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
孝行	46	56	48	58	48	58	48	58	48	58	48	58	48	58
勉強	27	36	28	37	28	37	28	37	28	37	28	37	28	37
國の爲につくす	22	31	22	31	22	31	22	31	22	31	22	31	22	31
よく働く	22	31	22	31	22	31	22	31	22	31	22	31	22	31
理想	7	11	7	11	7	11	7	11	7	11	7	11	7	11
兵役	6	8	6	8	6	8	6	8	6	8	6	8	6	8
勤勞	5	7	5	7	5	7	5	7	5	7	5	7	5	7
御命を守る	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4
父母に従順	5	6	5	6	5	6	5	6	5	6	5	6	5	6
教師の教を守る	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3
禮拜	9	13	9	13	9	13	9	13	9	13	9	13	9	13
よく戦ふ	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3
勅語を守る	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4

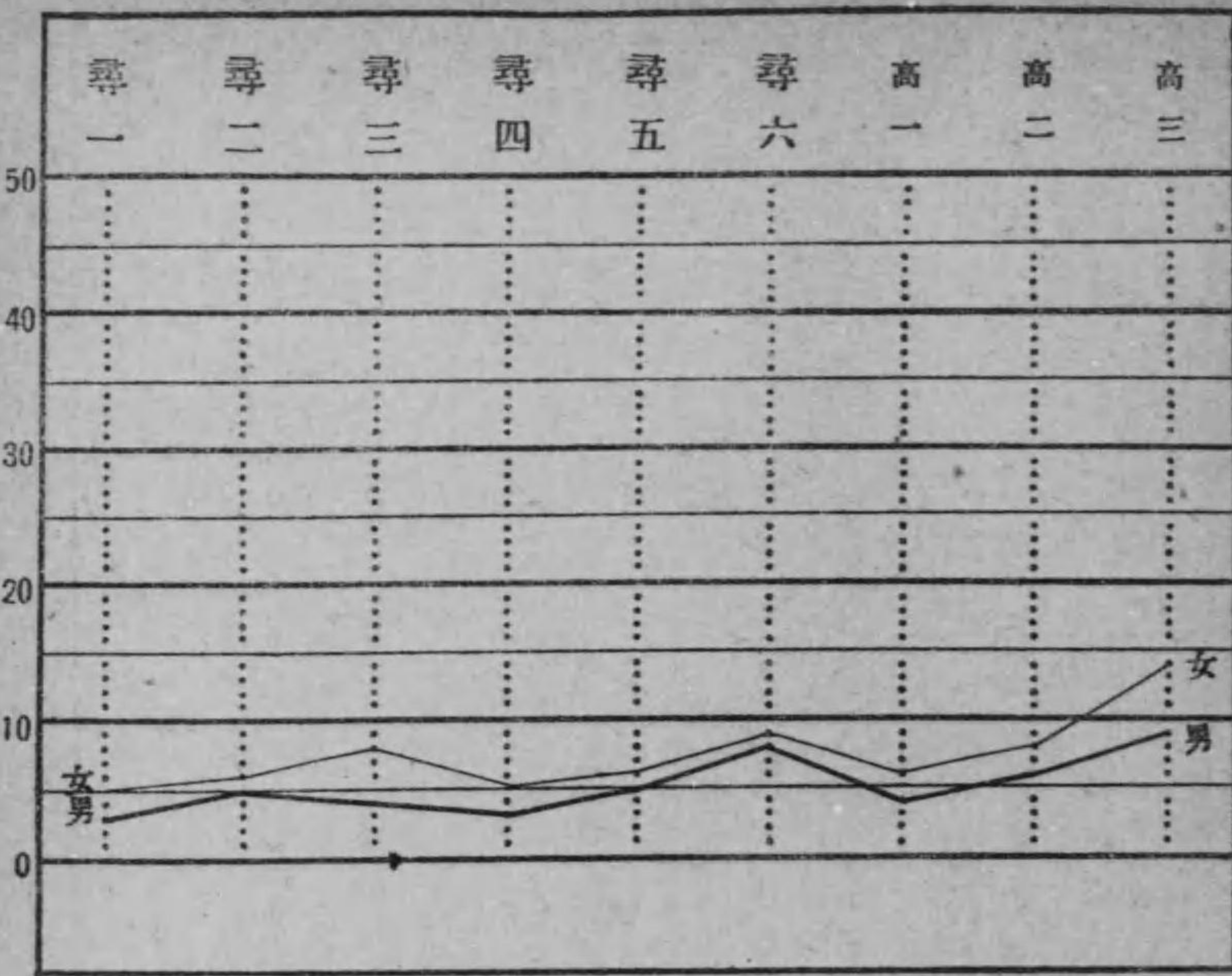
中項目	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
奉公														
命を捧げる														
勳功														
忠君愛國														
飛捷														
善行														
學校にて勉學														

第四問の中項目は、各問の中で最も多く、その數總て百四十九である。今その中最も優勢なものを擧げるならば、「孝行」(家庭)及び「勉強」(自己)の二つで、平均何れも一一%である。

これに次げものは「國の爲に盡す」(國)の六%、「よく働く」(變時)の五%等であるが、これ等國・變時及び天皇に關する答述を合算したものの大勢は、固より最大優勢のものであることは言ふまでもないのは既に示した通りである。依つてこゝには孝行及び勉強等に關して觀察して見る。

孝行を以て忠義と思つて居るもの、傾向は頗る鮮明である。第一に、男女共に學年に伴うて平行して上つて行く傾がある。即ち尋常一年に於ては男四%・女六%で、それが漸次に上つて尋常五年には男一六%・女二四%となり、六年には少しく下つて男一二%・女二%となり、高等科に至つて再び上つて行く傾向がある。第二、女子は常に男子より優勢である。然かもその差は學年と共に大きくなつて行く傾向が見える。(第四圖其の一参照)

勉強は第一に男女共に小なる高低があるけれども、大體に於て學年の進むにつれて下つて居る。即ち尋常一年の男一五%・女一七%は、六年に男七%・女九%となり、且つ高等科まで續いて下つて行く。第二に女子は概して男



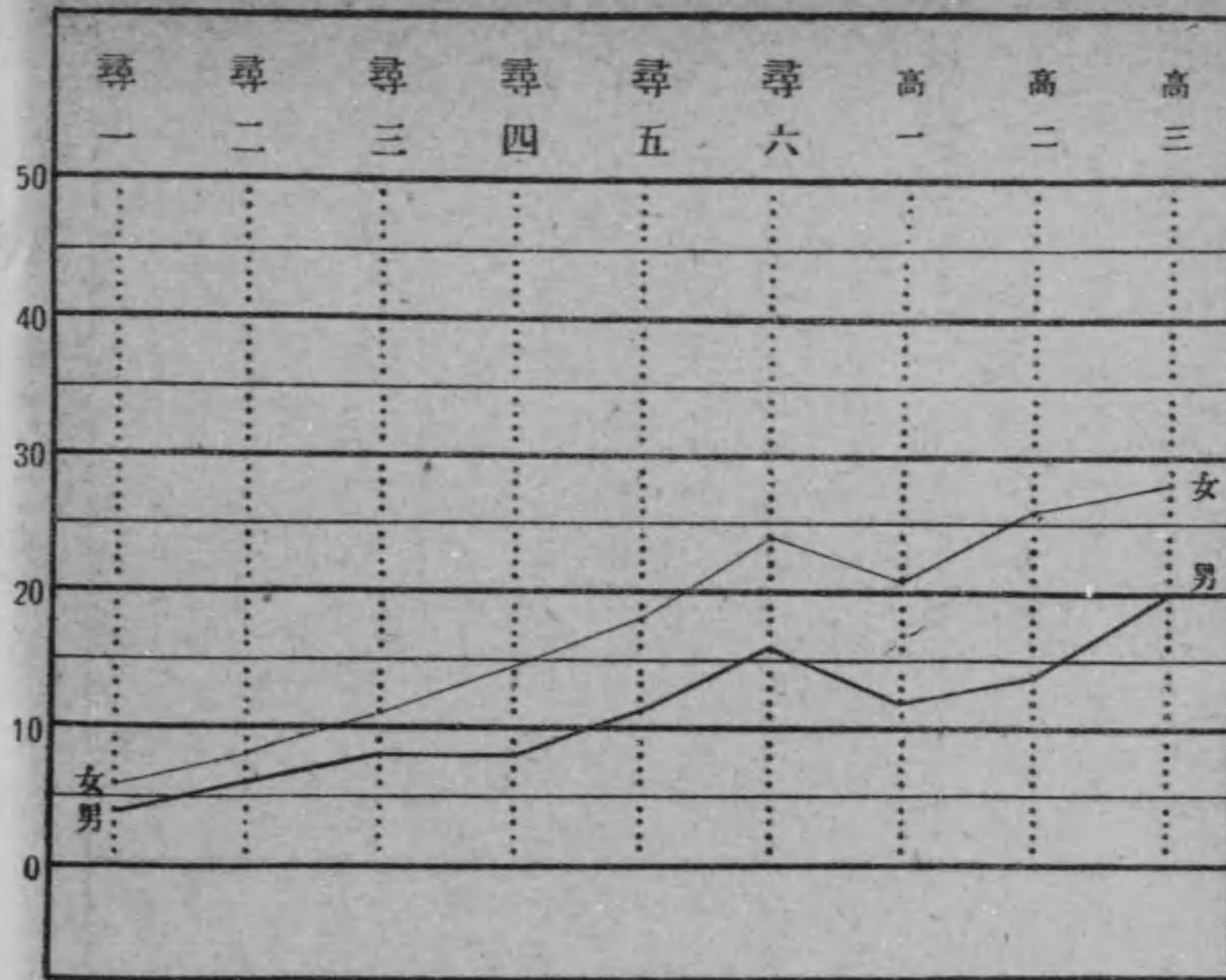
第四圖 (其の三)

御命に従ふ御教を守る
勅語を守る

事君可責可賤。可富可貧。
可生可殺。而不可使爲亂。
(禮記)

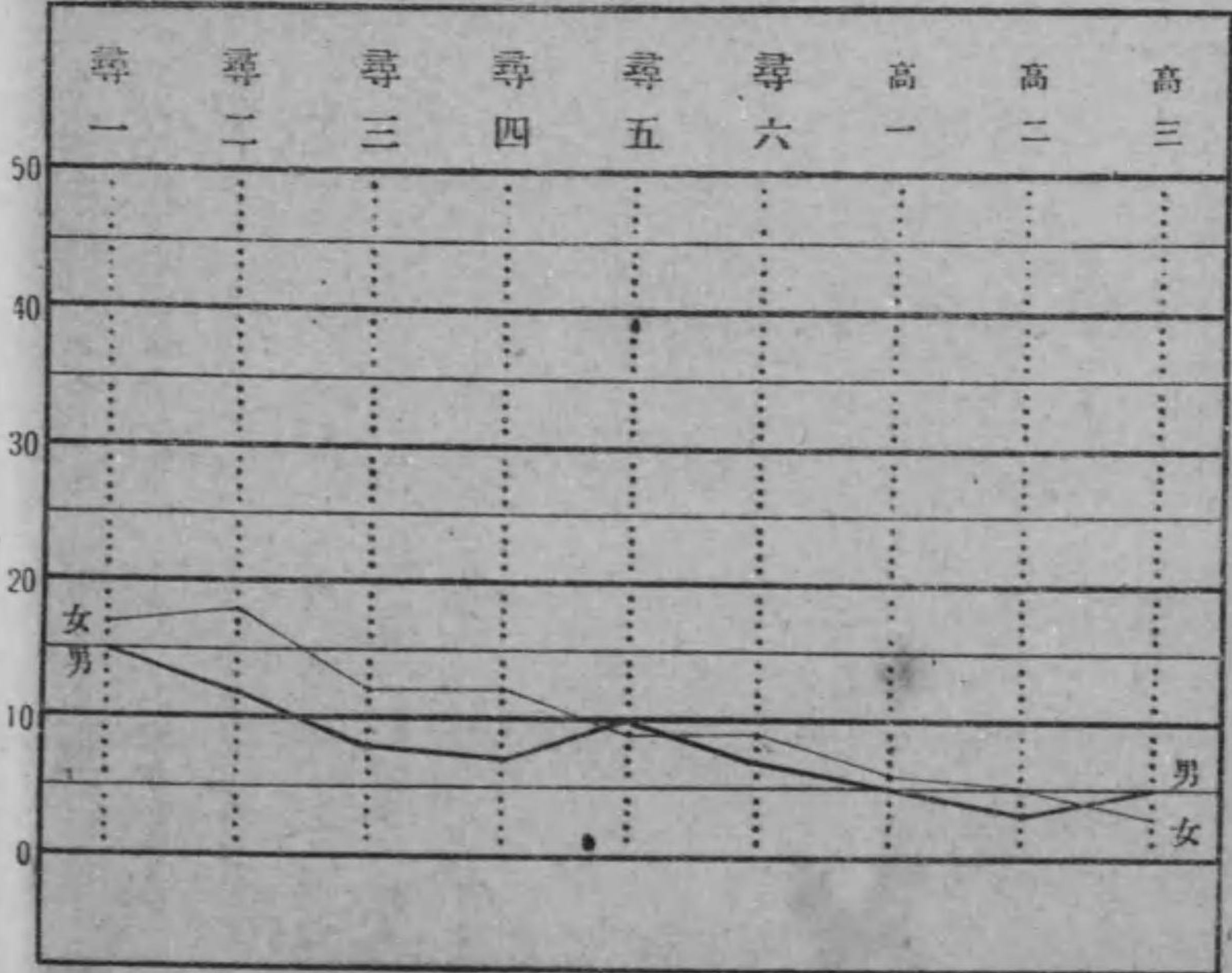
責難於君。謂之恭。陳美閉
邪謂之敬。
(孟子)

子より聊か優勢である。(第四圖其の二参照)
次に直接天皇に關するものの中で、「御命を守る」
「御教を守る」及び「勅語を守る」の三者を合算して
その傾向を見ると、第一、男女共に略々平行して僅に
上つて行く氣味がある。殊に高等科に於てさうである
第二に、女子が常に男子よりも優勢である。(第四圖
其の三参照)



第四圖 (其の二)

孝行



第四圖 (其の一)

勉強

五 學年別主要中項目

項目	一年		二年		三年	
	児童数	百分比	児童数	百分比	児童数	百分比
勉強 (自己)	五三〇	五二	五七三	三二	六四八	八三
禮拜 (天皇)	三〇八	三〇	三三三	一六	三九九	八二
理想 (自己)	二九一	二八	三二七	一五	三九七	八二
父母に従順 (家庭)	二二七	二二	二七五	一三	三三三	八二
勤勞 (自己)	一八七	一八	二二二	一〇	二八三	七二
孝行 (家)	一四四	一四	一七三	八	二二二	五八
御命を守る (天皇)	一三二	一三	一六二	七	二〇二	五二
善行 (自己)	一〇九	一〇	一三九	六	一七九	四六
兵役 (國)	二七	二	三六	一	四六	一
行儀 (自己)	一〇九	一〇	一三九	六	一七九	四六
教師の教を守る (學校)	七四	七	九三	四	一二二	三
よく戦ふ (變時)	一四	一	一八	一	二四	一
國の爲に盡す (國)	七	一	九	一	一二	一
父母を大切にす (家庭)	六	一	八	一	一二	一
献納 (天皇)	四	一	五	一	七	一
學校で勉學 (學校)	五	一	六	一	八	一
よく働く (變時)	三	一	四	一	五	一
君を大切にす (天皇)	三	一	四	一	五	一
戦捷 (變時)	八	一	一〇	一	一三	一
身體 (自己)	六	一	八	一	一〇	一
奉仕 (天皇)	三	一	四	一	五	一

項目	四年		五年		六年	
	児童数	百分比	児童数	百分比	児童数	百分比
國の爲に盡す (國)	五三〇	五二	五七三	三二	六四八	八三
孝行 (家庭)	三〇八	三〇	三三三	一六	三九九	八二
勉強 (自己)	二九一	二八	三二七	一五	三九七	八二
よく働く (變時)	二二七	二二	二七五	一三	三三三	八二
兵役 (國)	一八七	一八	二二二	一〇	二八三	七二
理想 (自己)	一四四	一四	一七三	八	二二二	五八
勤勞 (自己)	一三二	一三	一六二	七	二〇二	五二
御命を守る (天皇)	一〇九	一〇	一三九	六	一七九	四六
教師の教を守る (學校)	七四	七	九三	四	一二二	三
父母に従順 (家庭)	二七	二	三六	一	四六	一
命を捧げる (變時)	一〇九	一〇	一三九	六	一七九	四六
奉公 (天皇)	七四	七	九三	四	一二二	三
忠君愛國 (國)	二七	二	三六	一	四六	一
よく戦ふ (變時)	一〇九	一〇	一三九	六	一七九	四六
戦捷 (變時)	七四	七	九三	四	一二二	三
勅語を守る (自己)	二七	二	三六	一	四六	一
君を大切にす (天皇)	二七	二	三六	一	四六	一
戦死 (變時)	一〇九	一〇	一三九	六	一七九	四六
尊崇 (天皇)	七四	七	九三	四	一二二	三

平均	女									
	皇	神	天	家	社	學	變	天	國	家
	室	佛	皇	庭	會	校	時	皇	庭	己
一										
二										
三										
四										
五										
六										

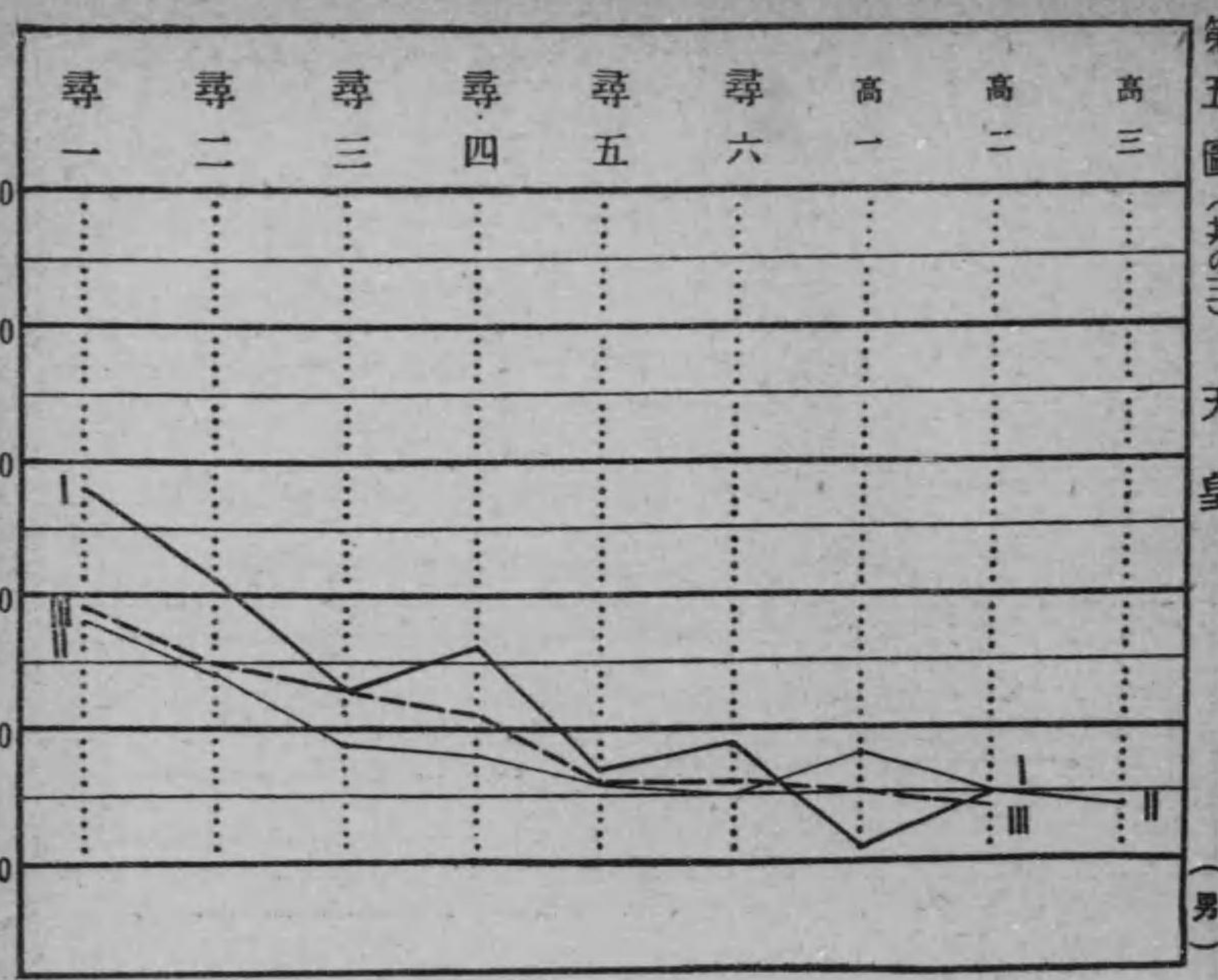
平均	男									
	皇	神	天	家	社	學	變	天	國	家
	室	佛	皇	庭	會	校	時	皇	庭	己
一										
二										
三										
四										
五										
六										

各部大項目の比較については、第四問は男女の對比が頗る著しく、殊に變時に關するものは殆ど女子にはない。それ故に主なる大項目に就いて男女の比較を見ることにした。先づ

●國に就いては、男子は、第一、各部とも大體尋常四・五・六年に於て高い。第二、第一一部は尋常六年に於て最も高く、第二部は四年に於て最も高い。而して第三部は常に中位にある。第三、第一・二部は變化が多く、第三部は少い。次に女子は、第一、全體として學年につれて率が上つて居る。第二、第一部は他の二部よりかなり著しく優勢で、次は第二部第三部の順位である。第三、第二部と第三部とは殆ど平行して居るが、第三部高等三年は突飛な上方をして居る。(第五圖其の一・二参照)次に

●天皇に就いては、男子は、第一、各部とも下降の傾向であるが、第二、第一部が優勢である。唯高等一年が他の二部より下つて居る。次は第三部第二部の順である。(第五圖其の三参照)

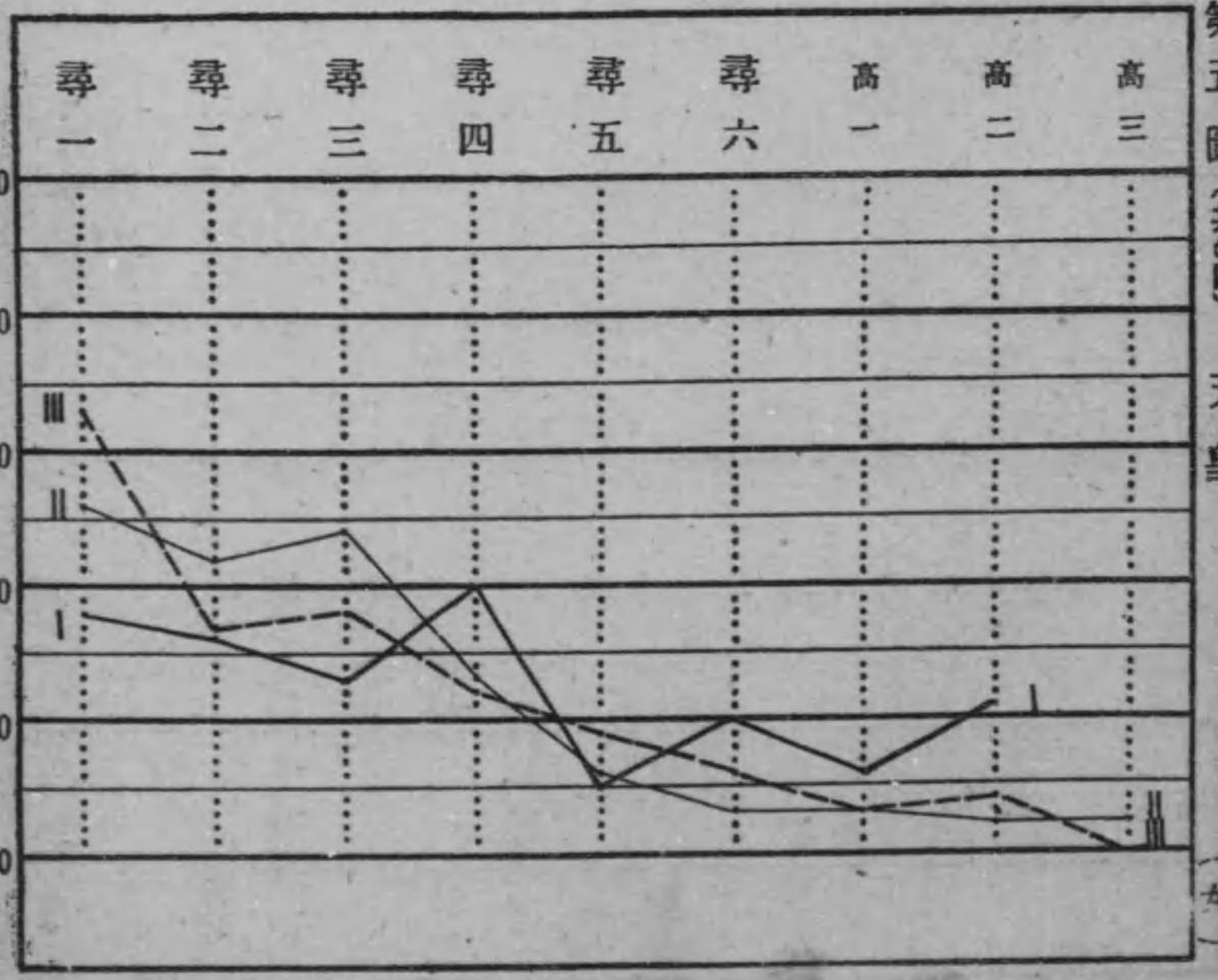
第四問 尋常科全部 大項目



第五圖 (其の三) 天皇

(男)

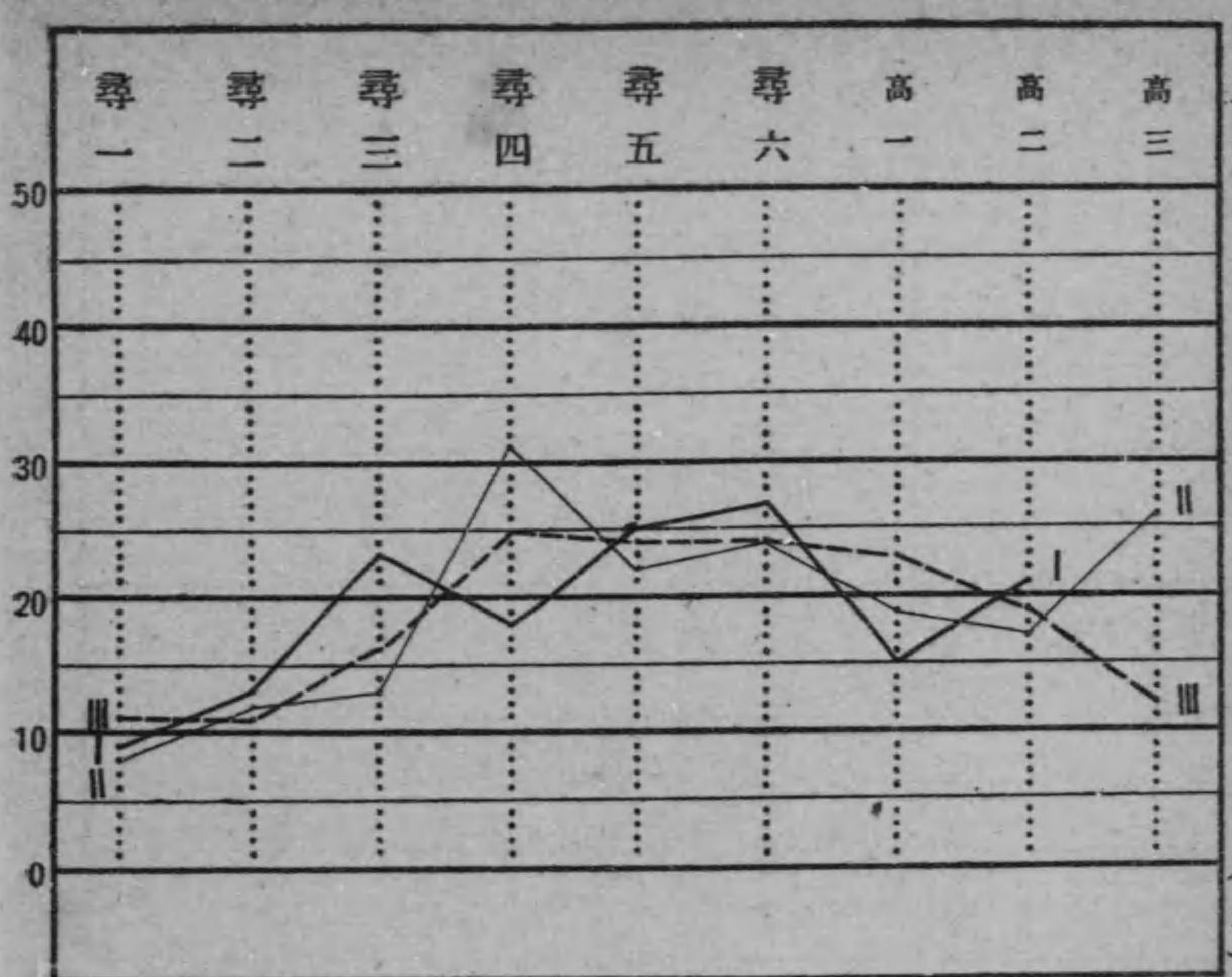
六一五



第五圖 (其の四) 天皇

(女)

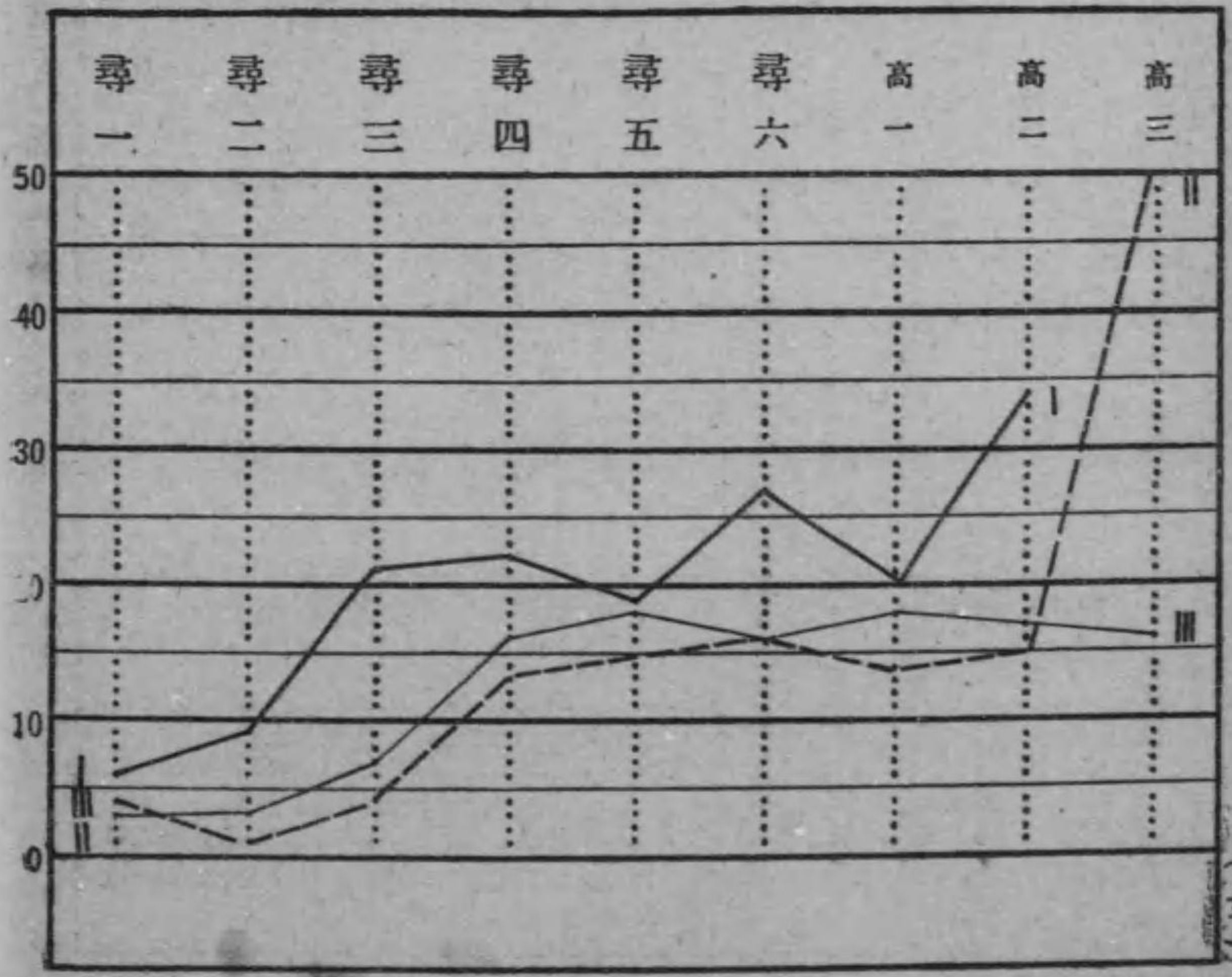
第四問 尋常科全部 大項目



第五圖 (其の一) 國

(男)

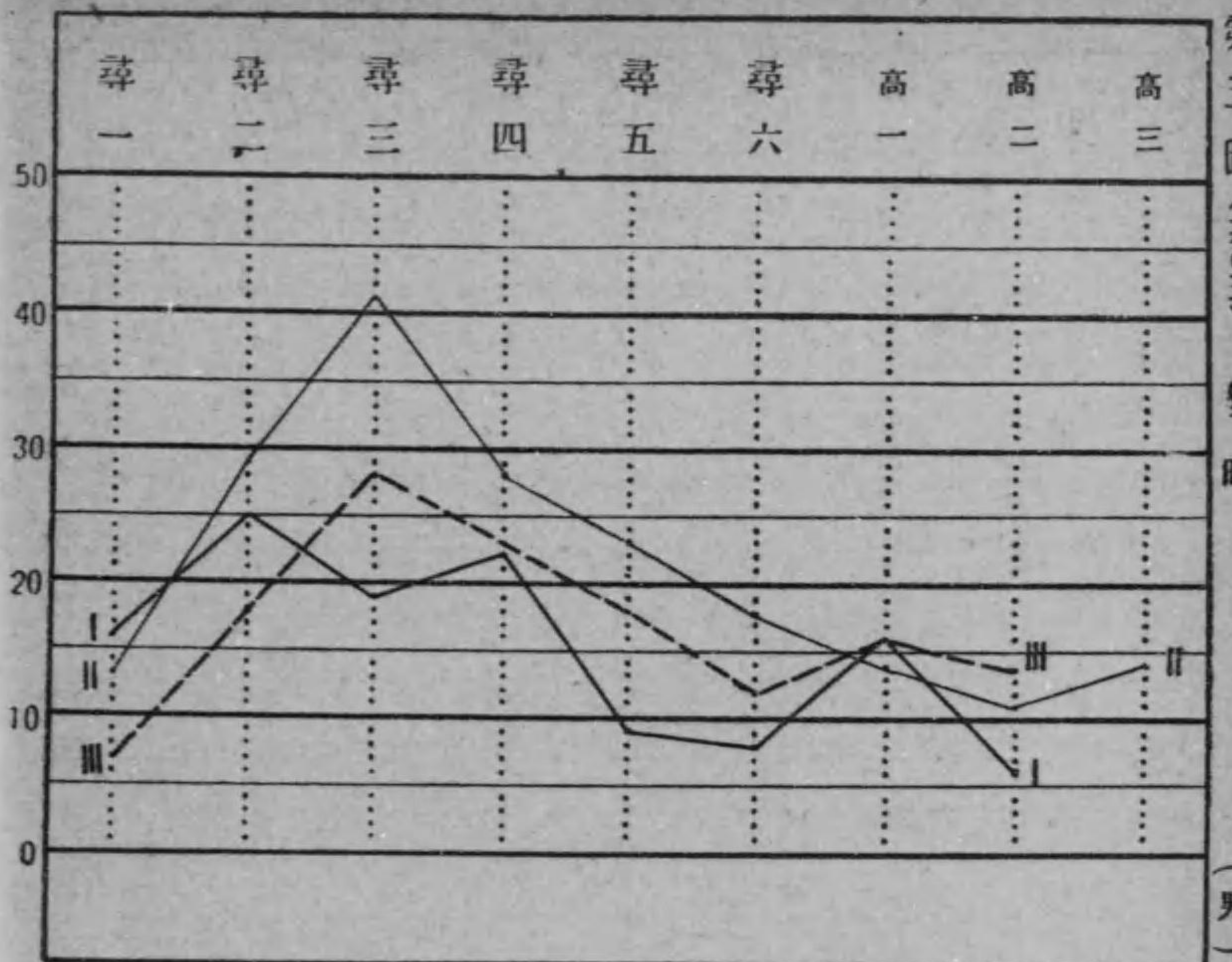
第六四



第五圖 (其の二) 國

(女)

第四回 尋常科全部 大項目
第五圖 (其の五) 變時



女子にあつては、第一、各部とも下降の傾向は男子と同様である。第二、第一部は四年以後に於て先づ優勢である。(第五圖其の四参照) 最後に變時の男に就いては、第一、第二・三部は、尋常三年に於て最も高い。第二、第二部が最も優勢で、第三部に於て次ぎ、第一部が最も低い。猶ほ以上の外、第一部は男女とも何れも著しく屈折が多いのは注意すべきことであらう。(第五圖其の五参照)

大君は千年にまさん白雲も
三船の山にたゆる日あらめや

(萬葉集卷三)

九各部中項目比較

第四回 尋常科全部 中項目	男																				
	尊 (天皇)	奉 (天皇)	戰 (變時)	學校にて勉學 (學校)	善 (自己)	忠君愛國 (國家)	勤 (變時)	禮 (天皇)	勅語を守る (自己)	よく戦ふ (變時)	從 (家庭)	兵 (國)	命を捧げる (天皇)	教師の教を守る (學校)	御命を守る (天皇)	勤 (自己)	理 (自己)	よく働く (變時)	國の爲につくす (國)	孝 (家庭)	勉 (自己)
一年	二						二				五	六	二		二	九	五	三	四	三	I
	一			四			七		四	六	四	一	三	三	五	六	三	二	三	六	II
			一	二	三		〇		二	四	八	一	三	六	七		二	五	四	III	
二年	五						三				二	九	一	七	五	六	三	二	五	二	I
				二			四				七	三	八	一	二	五	七	四	九	三	II
			一	一			四		三	三	八	二	四	七	六	五		八	三	III	
三年	六						一				五	二	三	二	四	五	二	二	六	〇	I
				二			九				八	四	五	六	三	五	三	三	四	五	II
			一	一			二		七	二	二	三	四	三	三	三	三	三	三	八	III
四年				八			四				二	一	三	一	三	二	四	二	四	二	IO
	一			二			一		三	三	〇	六	一	二	四	三	〇	一	四	七	II
				二			一		二	一	一	一	一	一	二	三	七	八	八	III	
五年				五			二				三	三	三	三	三	三	三	三	三	一五	I
				二			二		三	三	四	七	三	二	二	三	三	七	一〇	一〇	II
				二			一		一	九	一	一	二	三	三	三	一〇	七	九	九	III
六年				二			二		九		二	一	一	一	二	二	二	一五	一〇	一〇	I
				三			一		七	三	二	三	六	一	一	三	二	五	九	七	II
				二			一		四	一	九	二	一	一	一	一	七	五	七	七	III

御教を守る	戦捷	出征	女	勉強	孝行	國の爲につくす	よく働く	理想	勤勞	御命を守る	教師の教を守る	命を捧げる	兵役	従順	よく戦ふ	勳語を守る	禮拜	忠君愛國	善行	學校にて勉學	戦死	奉公	
(天皇)	(變時)	(變時)	(自己)	(家庭)	(國)	(變時)	(自己)	(自己)	(天皇)	(天皇)	(學校)	(變時)	(國)	(家庭)	(變時)	(自己)	(天皇)	(變時)	(國)	(自己)	(學校)	(變時)	(天皇)
三	二	四	I	三	二	四	一	二	四	六	五	三	二	四	一	二	四	六	五	三	二	四	一
二	一	三	II	二	一	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
一	二	三	III	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
二	一	三	I	二	一	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
一	二	三	II	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
三	二	四	III	三	二	四	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
二	一	三	I	二	一	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
一	二	三	II	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
三	二	四	III	三	二	四	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
二	一	三	I	二	一	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
一	二	三	II	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
三	二	四	III	三	二	四	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七

御教を守る	戦捷	出征	平	勉強	孝行	國の爲につくす	よく働く	理想	勤勞	御命を守る	教師の教を守る	命を捧げる	兵役	従順	よく戦ふ	勳語を守る	禮拜	忠君愛國	善行	學校にて勉學	戦死	奉公	
(天皇)	(變時)	(變時)	(自己)	(家庭)	(國)	(變時)	(自己)	(自己)	(天皇)	(天皇)	(學校)	(變時)	(國)	(家庭)	(變時)	(自己)	(天皇)	(變時)	(國)	(自己)	(學校)	(變時)	(天皇)
二	一	三	I	二	一	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
一	二	三	II	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
三	二	四	III	三	二	四	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
二	一	三	I	二	一	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
一	二	三	II	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
三	二	四	III	三	二	四	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
二	一	三	I	二	一	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
一	二	三	II	一	二	三	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
三	二	四	III	三	二	四	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七

尊 崇 (天皇)	御 教 を 守 る (天皇)	戰 捷 (變時)	出 征 (變時)
I	二	二	二
II	二		
III		一	
I	一	三	三
II	一		
III		一	三
I	二	三	一
II	二		
III		二	三
I	一	一	三
II	一		
III		二	
I	一		
II			
III			一
I	二		
II			
III			一

諸君は學校を信じて、兩親に代つて學校で子女を教育してもらつて居る。又諸君は家族で出来ない徳育を學校に任して居る。家庭は學校を信じ學校は家庭に第一責任を負はせ、兩々相俟つて、要するに何ごとをも成就して居ない(チヨリ)。

第五問の整理

第五問に關する説明

第五問の本文は

オナジクミノトモダチトイツシヨニアソソデキタトキ、ソノトモダチガ、アヤマツテ、ガクカウノマドガラス
ヲコハシテシマヒマシタ。ソノトキアナタハドウシヨウトオモヒマスカ。

と云ふのである。この問に依つて吾人の知らうとしたところは、かくの如き事實に出遇つたら、兒童は如何なる態度を取るものであるかである。その態度はやがて道德心の發達を示すものと見られるからである。この問は、一見、かかる際の兒童の判断を知らうとするもの様にも見えるが、吾人の主なる目的は必ずしも判断でない。勿論判断も伴つて居ることは言ふまでもない。けれども、それよりも寧ろ彼等の實行的態度を見ようとしたのである。即ち問は「ドウシヨウト思ヒマスカ」で、「ドウスルノガヨイカ」と云ふのではない。前者の答は實行的になり、後者の答は判断になるべき譯である。勿論兒童の道德的判断は大方感情的で又實行的であるから、二者の間には明に區別を立てることが出来ないかも知れぬ。けれども、吾人の所期は、前述のところにあつた。

然るに、判断を見るときも、殊に實行的態度と見るときも、こゝに種々の困難が伴はれて居る。第一、事實が想定であるから、實際の場合に於て取る態度が果してよく兒童の答に表はれて来るか否かである。即ち、若し實際その場合に居合せて、その過失者が、己の友人であれば、多くはその顔色や態度或は過失者の負傷等を見て、直に感情を動かすに相違ない。それが言葉の上で、これ／＼の場合としてあるから、この事實に對する態度に

著しく差異があることである。即ちかかる假想の場合は、多くは理性的になり、實際の場合は感情的になり勝てあらうと思ふ。けれども兒童の答を見ればかなり感情的のものもある。第二、この態度の相異は、主としてその事實を理解する程度に基くのである。然るに「同じ組の友達」と云つても、親しきがあり疎きがあり、硝子を破つた程度にも大小があり、又或は「過つて」とことわつてあつても、この語を強く取るものと軽く看過して行くものとがあらうと思ふ。第三、過去の経験が著しくかかる場合の處置の先例となることである。即ち全くかかる場合に出遭つたことのない兒童と、或は己の學校に於て事實経験したことであるのとて、その取る態度に大なる差異を來たすことになる。又同じ経験した事實でも、この時の處置は必ずしも甲の學校と乙の學校とが同一でない。これ等は何れも先入主となつて、かかる問題に接する時に直に出て來るものである。即ち兒童は實際的になればなるほど過去の経験に支配されるものであらうと思ふ。

要するに、これ等の諸困難は、兒童をしてその取るところの態度を區々にさせたことは言ふまでもあるまいと思ふ。

自己の單位は意志なり。

心理學上より云へば意志は人なり。(ヂュキール)

尋常科全部

第一 解答兒童數

一 第五問尋常科解答兒童數

正解總數	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
四七七	四〇六	八七五	五六五	四六六	四六八	四〇九	四三二	三七九	四三三	三六三	四〇三	三六九	二六九七	二五〇三
四二六	三三三	七七三	四八〇	四七五	四六〇	三八七	四三二	三六三	四三二	三五〇	三七九	四二八	三九三	三二七四
三〇二	一九〇	五九三	二九七	二六〇	三〇二	一六三	三三三	九六	九一	五五	一四六	三	九六	八一
三三五	二〇四	四四九	二四三	二四九	六七	八八	一五五	四九	五	一〇三	三	三	六三	六四三
一九	五	二六〇	四	二	四	一七	二	一	三	四	七	三	一六	七
不能總數														

二 同上百分比

正解總數	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
四七七	八八	八七	八九	八九	九四	九四	九七	九七	九六	九六	九六	九六	九四	九四
四二六	四五	四五	五六	五六	五五	五五	五三	五三	五二	五二	五二	五二	五三	五三
三〇二	四五	四五	五六	五六	五五	五五	五三	五三	五二	五二	五二	五二	五三	五三
三三五	四五	四五	五六	五六	五五	五五	五三	五三	五二	五二	五二	五二	五三	五三
一九	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
不能總數														

第五問の児童總數は五萬、一千六百二名で、その正解者は四萬八千三百七名である。その百分比を見れば、平均九四%で、第二・三・四問に比らると聊か劣つて居る。その不當も三%で、不明二%・不能一%である。けれどもその學年の變化は大體に於て規則正し。

尋常科——(尋一)八九 (尋二)八九 (尋三)九九 (尋四)九六 (尋五)九七 (尋六)九八 (平均)四九
 高等科——(高一)一〇〇 (高二)一〇〇 (高三)一〇〇 (平均)一〇〇

従つて不當、不明の率が學年の進ひにつれて少くなつて居る。

兒童の道徳的判斷は必ずしも理性的でない、彼等は多く感情或は習慣——即ち信仰に依つて判斷する。

第二 解答(正解)の整理

一 各學年大項目

兒童總數	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
正解總數	四七〇	四八〇	四七五	四六五	四六六	四九九	四六八	四七四	四七五	四六三	四八一	四七〇	四七〇
對過失者	四六〇	四六三	四八三	四六〇	四七五	四八三	四八二	四七三	四七三	四六三	四八一	四七〇	四七〇
對先生	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對他人	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對自己	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對學校	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對過失者・先生	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對過失者・自己	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對過失者・學校	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對先生・自己	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對先生・他人	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對先生・學校	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對自己・學校	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對過失者・先生・自己	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對過失者・先生・學校	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
對過失者・他人・自己	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
雜	一〇六	一〇〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九

二 同上百分比

對過失者	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
對過失者	四	三	一	一	一	一	二	二	四	二	七	六	二
對先生	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對他人	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對自己	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對學校	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對過失者・先生	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對過失者・自己	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對過失者・學校	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對先生・自己	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對先生・他人	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對先生・學校	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對自己・學校	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對過失者・先生・自己	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對過失者・先生・學校	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
對過失者・他人・自己	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

(イ) 并列中のものを合算したる大項目

對過失者	對先生	對自己	對學校	對他人
男	1075	191	400	267
女	1000	267	267	507
計	2075	464	667	774
男	1511	365	189	154
女	1151	100	471	353
計	2662	465	660	507
男	1311	273	177	136
女	1100	184	161	106
計	2411	457	338	242
男	1251	366	161	126
女	1100	100	161	106
計	2351	466	322	232
男	1151	273	177	136
女	1000	184	161	106
計	2151	457	338	242
男	1075	191	400	267
女	1000	267	267	507
計	2075	464	667	774
男	1511	365	189	154
女	1151	100	471	353
計	2662	465	660	507
男	1311	273	177	136
女	1100	184	161	106
計	2411	457	338	242
男	1251	366	161	126
女	1100	100	161	106
計	2351	466	322	232
男	1151	273	177	136
女	1000	184	161	106
計	2151	457	338	242
男	1075	191	400	267
女	1000	267	267	507
計	2075	464	667	774
男	1511	365	189	154
女	1151	100	471	353
計	2662	465	660	507
男	1311	273	177	136
女	1100	184	161	106
計	2411	457	338	242
男	1251	366	161	126
女	1100	100	161	106
計	2351	466	322	232
男	1151	273	177	136
女	1000	184	161	106
計	2151	457	338	242

(ロ) 同上正解數百に對する割合

對過失者	對先生	對自己	對學校	對他人
男	1075	191	400	267
女	1000	267	267	507
計	2075	464	667	774
男	1511	365	189	154
女	1151	100	471	353
計	2662	465	660	507
男	1311	273	177	136
女	1100	184	161	106
計	2411	457	338	242
男	1251	366	161	126
女	1100	100	161	106
計	2351	466	322	232
男	1151	273	177	136
女	1000	184	161	106
計	2151	457	338	242
男	1075	191	400	267
女	1000	267	267	507
計	2075	464	667	774
男	1511	365	189	154
女	1151	100	471	353
計	2662	465	660	507
男	1311	273	177	136
女	1100	184	161	106
計	2411	457	338	242
男	1251	366	161	126
女	1100	100	161	106
計	2351	466	322	232
男	1151	273	177	136
女	1000	184	161	106
計	2151	457	338	242

第五問の大項目は總べて十五で、その優勢なものは、「對過失者」以下次の

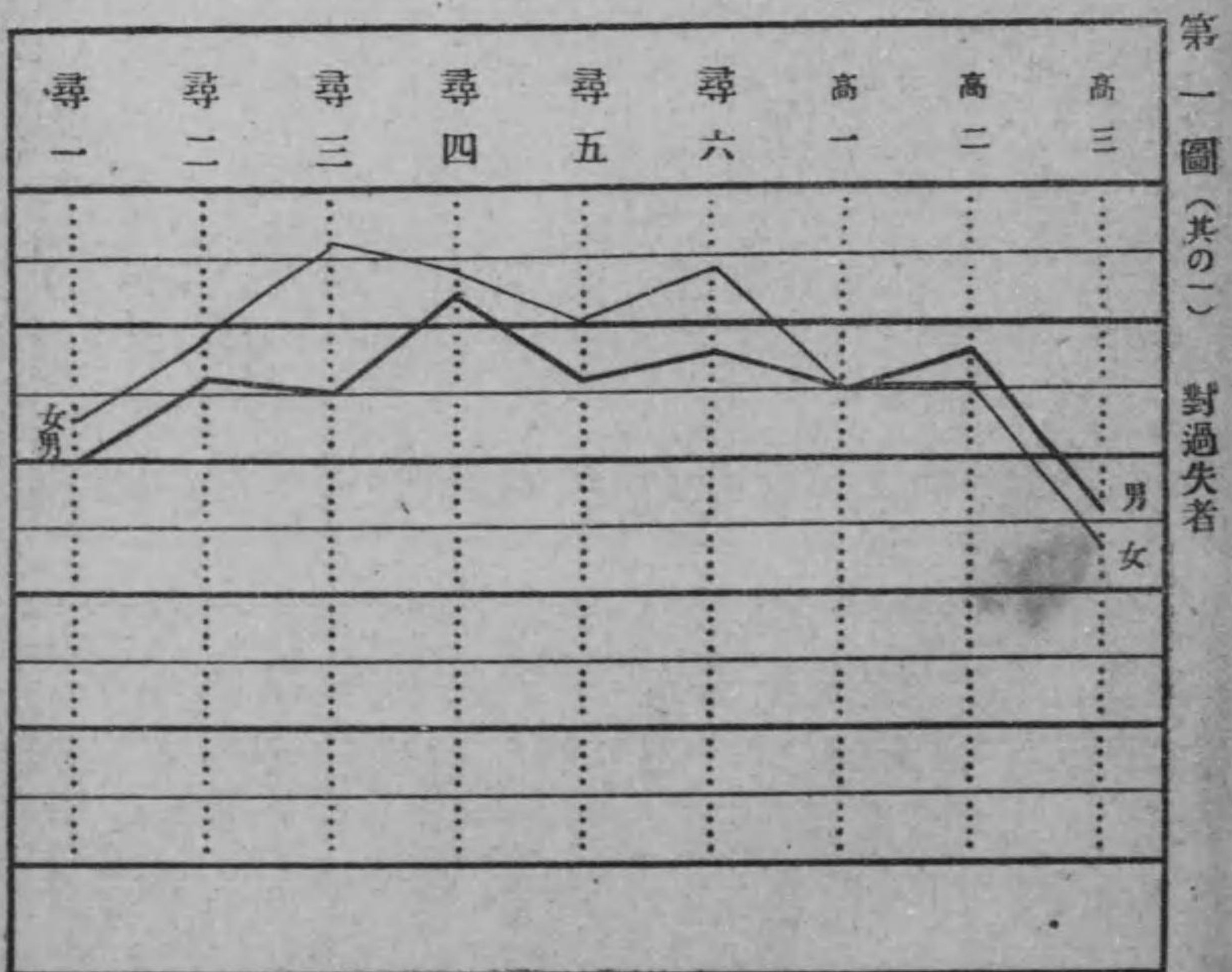
等である。然るに若し並列中ものを加算すると、前の表(イ)(ロ)に於て見るが如く、

對過失者五(八%) 對先生三(八%) 對自己(五%) 對學校(二%)

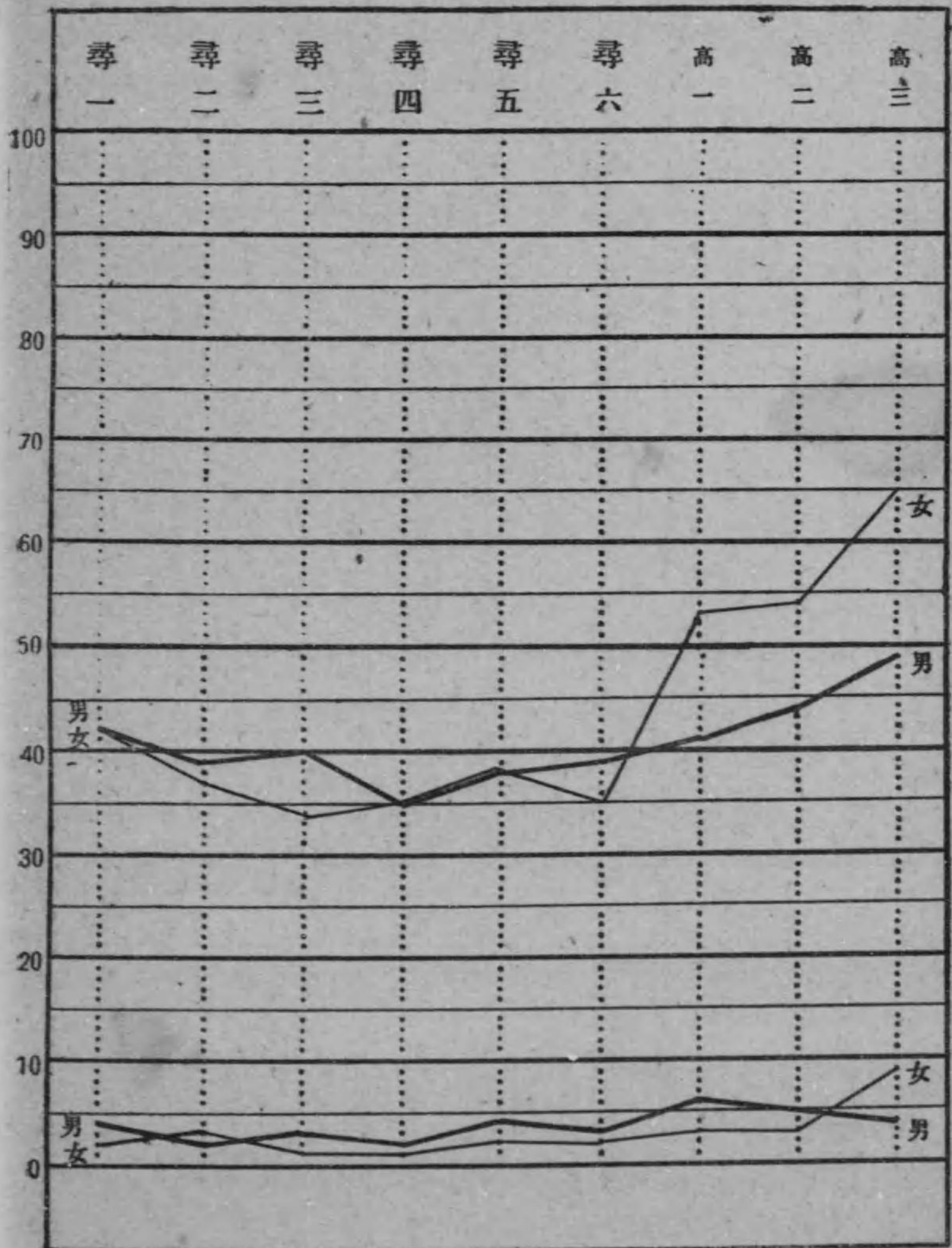
で、「對過失者」に1%を増し、對先生に4%、對自己に1%を増して居る。即ち過失者に對する態度は最も優勢で、これに次いで先生に對する態度である。

然るにこの問題に對して兒童の執り得る態度は、若し對象を主として考へれば、第一に學校や校則を主とした學校本位の態度があり、第二に教師本位の態度がある。第三に又過失者本位、第四に自己本位、第五に他人即ち父母・小使・他級生殊に幼兒等を本位として執る態度があり、或は第六に、全く物を主とした態度も有り得ると思ふ。今これ等の中その優勢なものに就いて觀察すると、第一圖がこれである。

對過失者の態度は、全體に於て最も優勢であることは極めて自然的事としてあるが、その男女の對比・學年の變化は、第一圖其の一に於て見ることが出来る。



第一圖(其の二) 對先生 對學校



これに依れば、第一、この態度は、男女共に尋常一年に於て五〇%以上から出發して漸く高く、男子は四年、女子は三年に於て頂點を作り、五年に於て共に降り、六年に再び少しく昇つて五五%になつて居るが、高等科に於ては、大體下降の傾向を示して居る。第二、男子は常に女子の下位にあつて尋常六年に及び、高等一年に於ては同じ高さとなり、二年以後は反對になつて居る。第三に、男子の頂點は尋常四年、女子の頂點は尋常三年である。

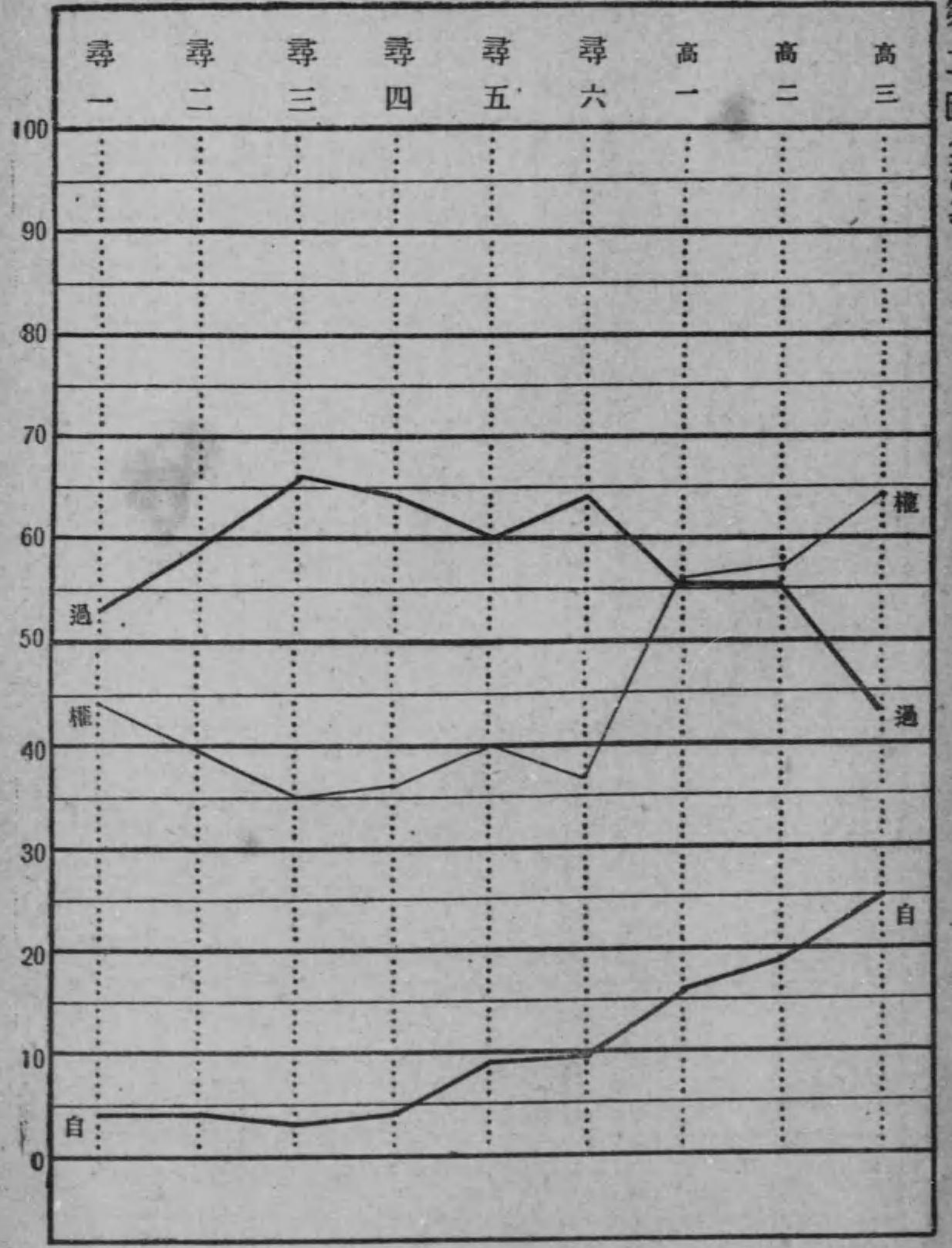
(第一圖其の一参照)

對先生の態度も對過失者の態度に次いで頗る優勢なもので、第一圖其の二がこれを示して居る。最も低い尋常四年も三五%である。第一、男女は著しい差異がなく、尋常三年までは共に僅に下り、四年以後に共に漸く上つて行き、尋常六年から高等科にかけて女子は俄に高まり、男子は徐々に高まつて行く。次に又

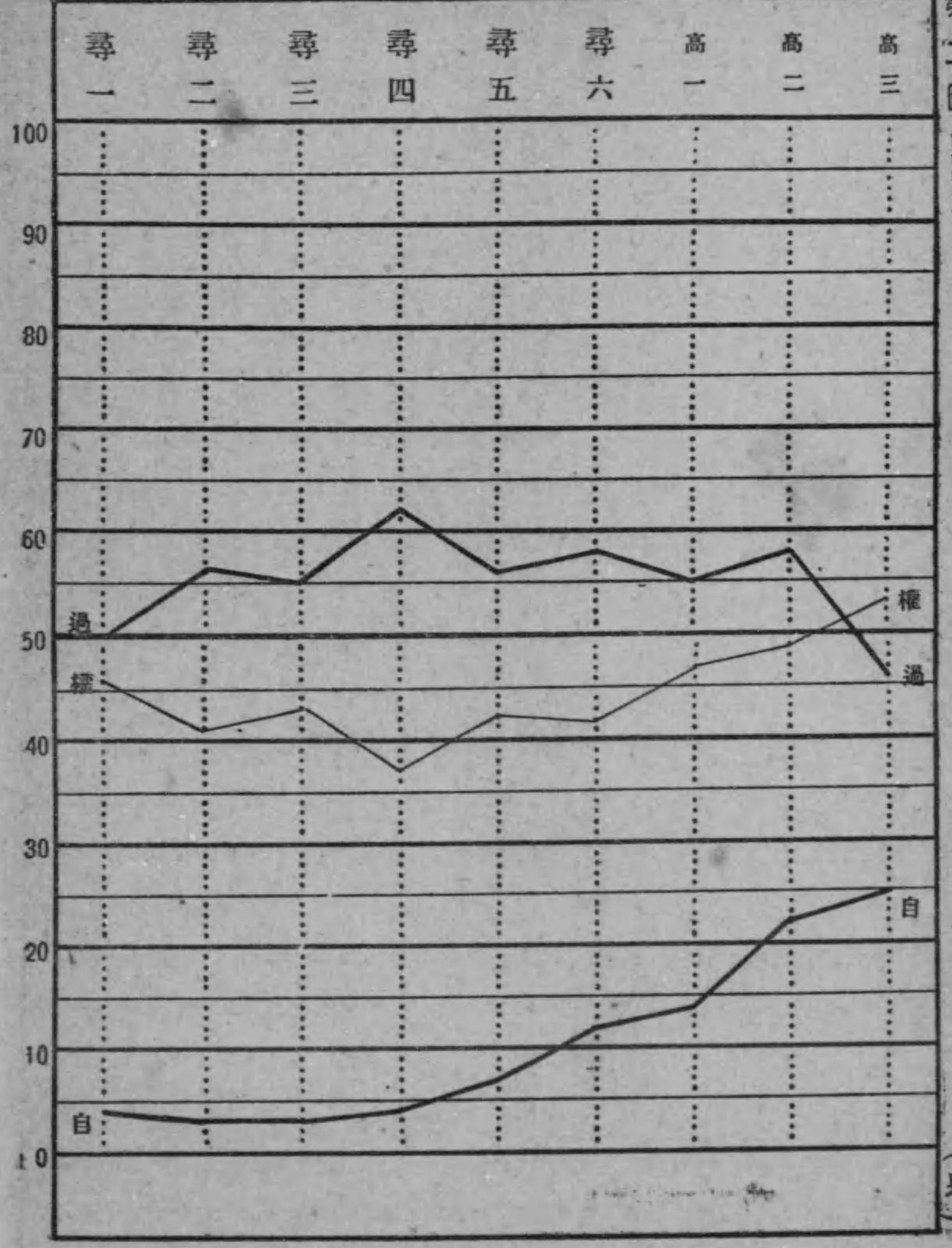
對學校の態度は、第一、男女共に尋常科に於ては一%乃至四%の間を往來して居る。高等科に於てもこの傾向が變らない。第二男女は殆ど平行して居るが、男子が概して僅に女子より優勢である。(第一圖其の二参照)

然るに、對學校・對先生は、要するに先生に對する態度で、即ち權威者に對する態度である。それ故にこの二者を合算して他の「對過失者」「對自己」の態度に對照すると、その關係は第二圖に於て見ることが出来る。先づ

男子の場合にあつては、第一、「對過失者」の態度は、前にも示した如く、尋常四年を頂點として上つたのが、五年に就て少しく下つて、六年以後は高等二年まで殆ど大なる變化なく進んで行き、高等三年に於て降つて居る。第二、然るに「對自己」の態度は、高さに於て到底「對過失者」に及ばないが、尋常四年以後は漸く昇つ行つて、遂にそれに對應し、高等科を併せて觀れば、上昇の傾向は頗る鮮明に表れて居る。第三、「對權威者」の態度は、



第一圖 (其の1)



第二圖 (其の2)

「對過失者」に次いで優勢であるが、その尋常四年を谷として一年乃至三年及び五年乃至六年の兩端の高さは、殆ど正しく「對過失者」に對應して居る。而して高等一年以後は漸く昇つて居る。(第二圖其の一参照)

次に女子の場合にあつては、第一、「對過失者」の態度は尋常三年を頂點として五年まで降り、六年以後高等科に下降の傾向が男子よりも鮮明に現はれて居て、従つて男子と略同様な「對自己」の態度との對應關係は益々鮮明現はれて居る。第二に、「對權威者」の態度は尋常科に於ては男子の場合と同じく、「對過失者」と對應して居て彼は四年に於て下り、後漸く昇るに反し、此は三・四年に於て下つて居る。而して高等科に至つては、一・二年に於て殆ど相合し、三年に於て全く上下の位置を轉倒して居る。

要之、第五問の如き場合に於ては、「對過失者」の態度は、男女共に最も優勢であることは鮮明な事實で、これに次いで「對權威者」の態度である。而して「對自己」の態度は最も少い。けれども「對過失者」の態度は漸く降つて行くに反して、「對自己」の態度は渾緩ながら漸く昇つて行く氣味がある。又「對權威者」の態度は、これを尋常科に就いて見れば、その方向に著しい高低はないが、高等科を併せて見れば、大體昇つて行く様に見える。

三 各學年中項目

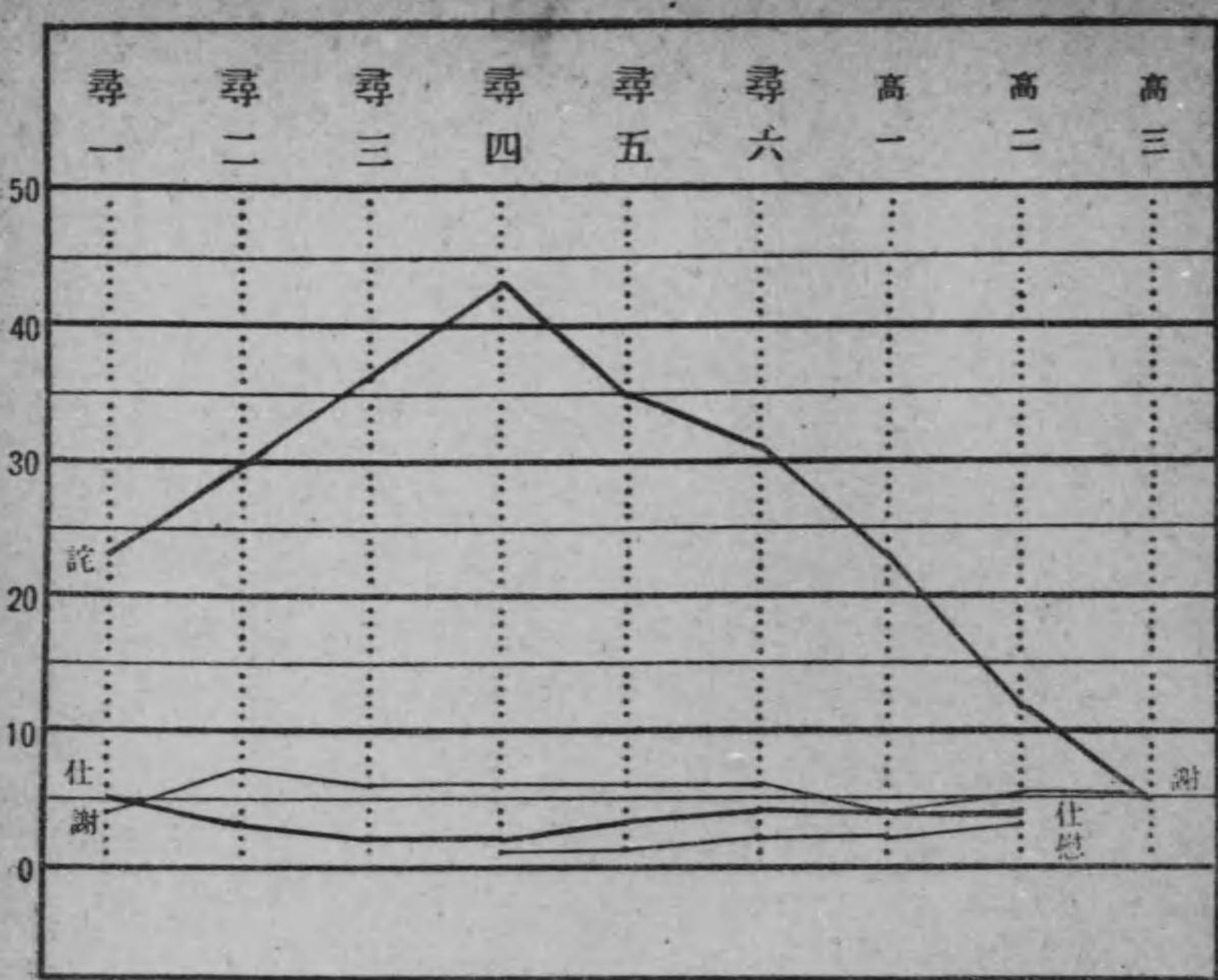
	一年		二年		三年		四年		五年		六年		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
詫びてやる (對過失者)	九四一	八四三	一七三	三六五	一七三	二六五	一八七	三六五	一四七	二六五	一四七	三六五	一四七
先生にあやまる (對先生)	七〇三	四八八	一〇九	一〇九	八六	一九五	一三〇	七九	一九五	一〇九	九〇	一九五	一〇九
先生に云ふ (對先生)	一〇四	一〇六	一〇九	七七	六七	一三〇	一〇七	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
謝罪せよとい (對過失者)	一八一	二二	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
仕末してやる (對過失者)	三〇七	一八〇	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
あやまつて仕末する (對先生・自己)	六	四	一〇	五	六	一	七	六	六	六	六	六	六
なぐさめる (對過失者)	三	三	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
辨償する (對學校)	一〇一	二六	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
今後を戒む (對過失者)	八三	九二	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
謝罪せしむ (對過失者)	五	五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
仕末する (對自己)	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
辨償してやる (對過失者)	八七	四三	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
免す (對過失者)	二五	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七	一七
忠告 (對過失者)	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八
身代りになる (對過失者)	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
自分で氣を附る (對自己)	二四	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一五
助ける (對過失者)	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
悪いといふ (對過失者)	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
なぐさめて先生に詫びる (對過失者・先生)	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
とめる (對過失者)	七〇	六三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
先生に云つて仕末する (對先生・自己)	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
直してやる (對過失者)	四三	四三	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六

		なくさめる (對過失者)		辨償する (對學校)		今後を戒しむ (對過失者)		謝罪せしむ (對過失者)		仕末する (對自己)		辨償してやる (對過失者)	
一	男	二	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
	女平均	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
二	男	二	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
	女平均	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	男	二	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
	女平均	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
四	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	女平均	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	女平均	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	女平均	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	女平均	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

先づ「對過失者」の態度を示した中項目を尋ねると、その最も優勢なものは「詫びてやる」の平均三四%で、その他、「謝罪せよと云ふ」の七%の外、「仕末してやる」「慰める」等がある。又「對先生」の態度を示したものを見れば、「先生にあやまる」の二二%や「先生に云ふ」の一%等がある。今「對過失者」の態度から觀察すると、第三圖は即ちこれである。先づ

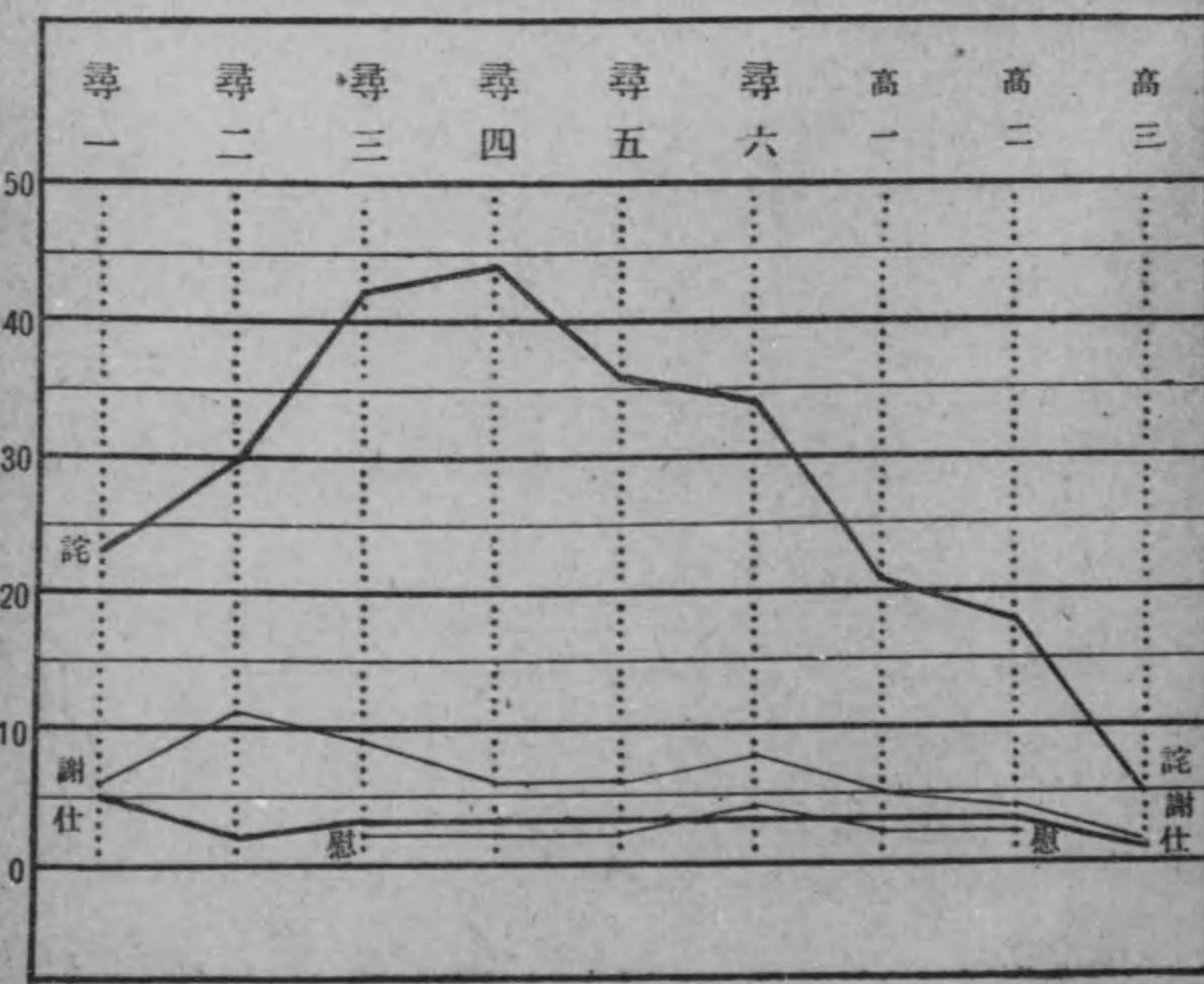
詫びてやるは第一、男女共に著しく優勢で、尋常一年の二四%はかなり急劇に上つて、四年に四六%に達し、以後は高等三年の五%まで下つて居る。第二に、男女の差は、その頂點は共に四年であるけれども、女子は三年から著しく高まつて居る。又下降の状態も大體差異がない。次に謝せよと云ふは、第一、男子にあつては僅に四%から七%の間を變化なく進んで居るが、第二に女子は、尋常一年の六%から二年に一一%に上り、以後漸く下つて僅に一%に至つて居る。仕末してやるは、第一男女共に五%から二%の間を進んで居るだけで、特に注意すべきものはない。

第三圖 (其の一)

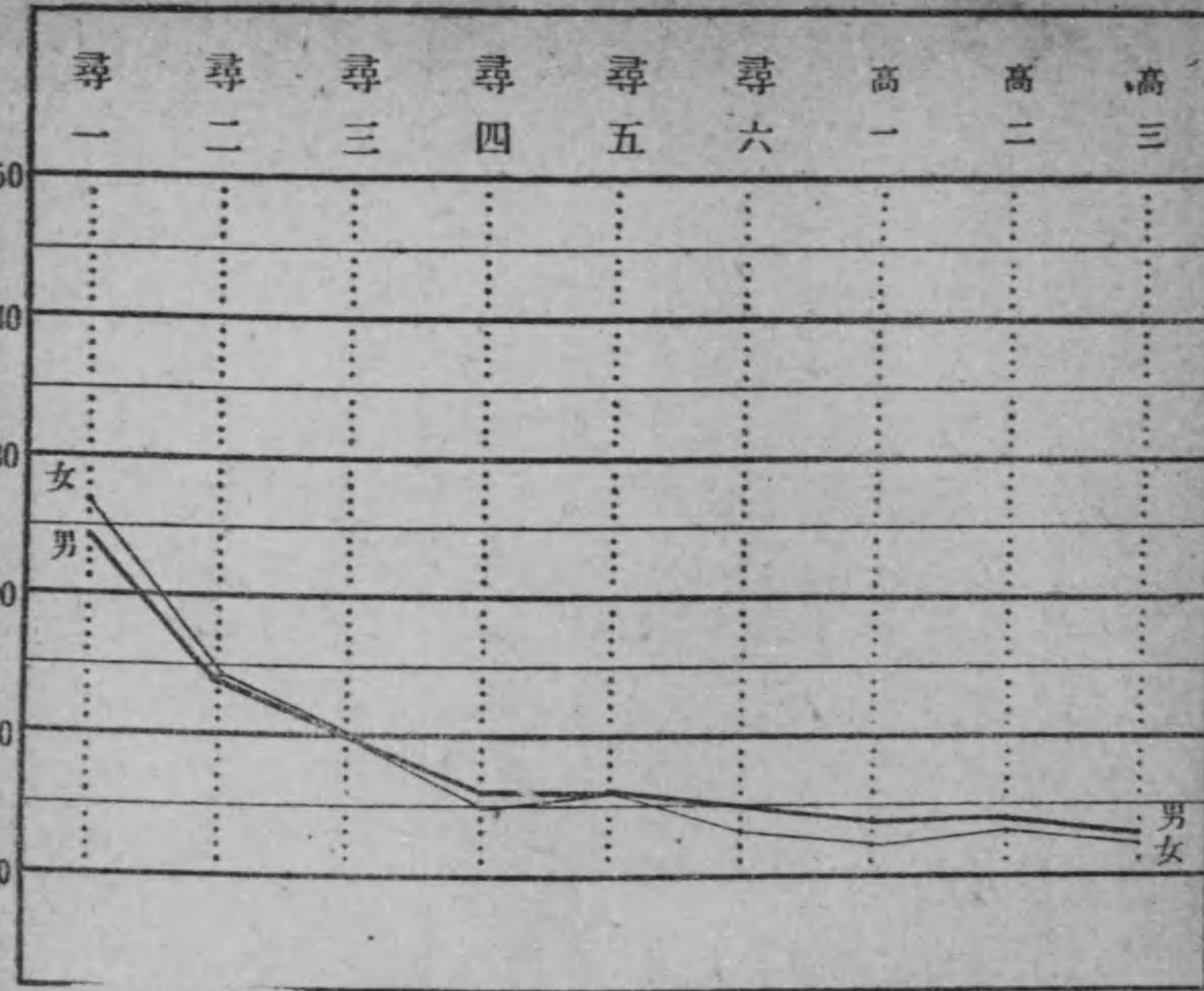


(男)

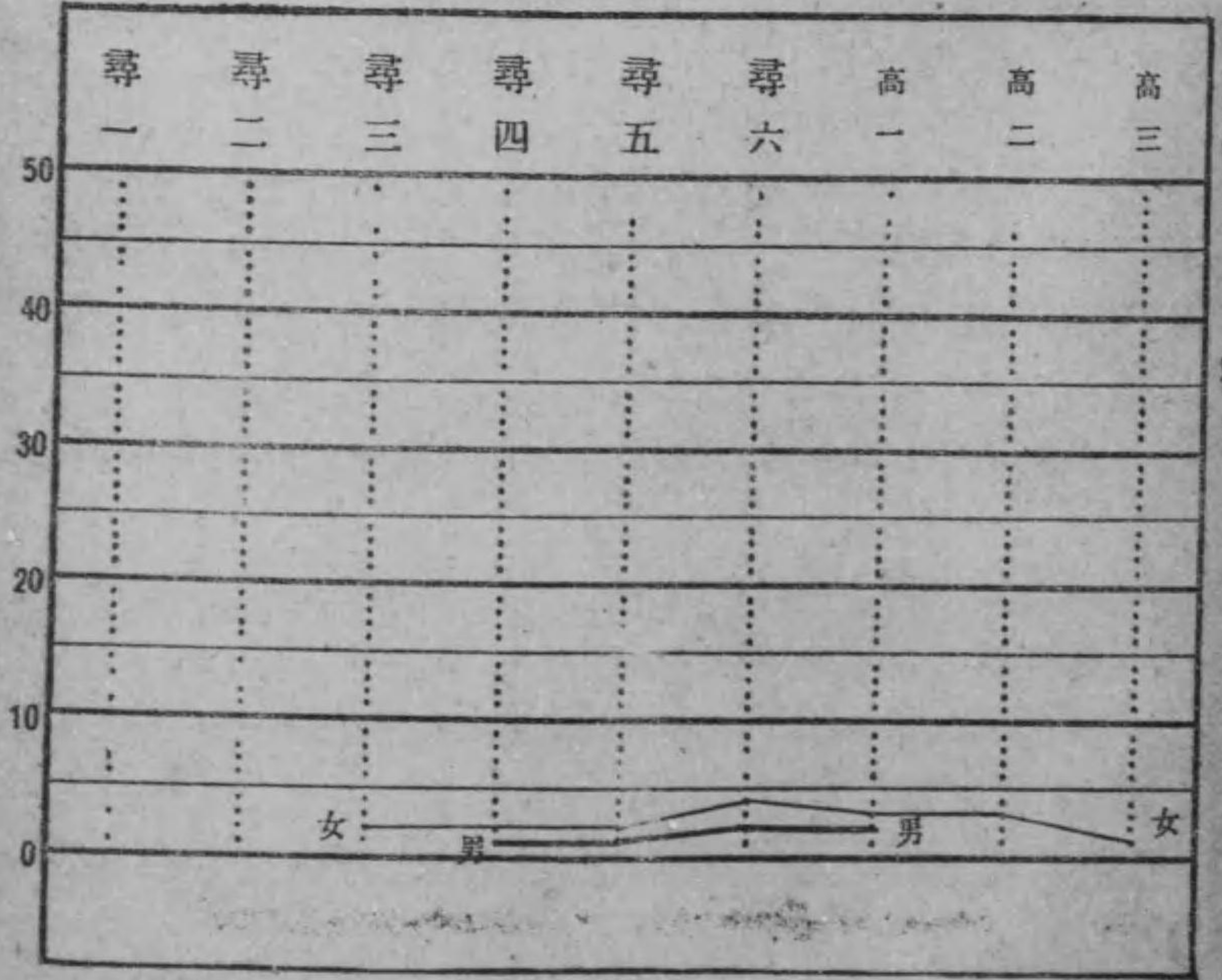
第三圖 (其の二)



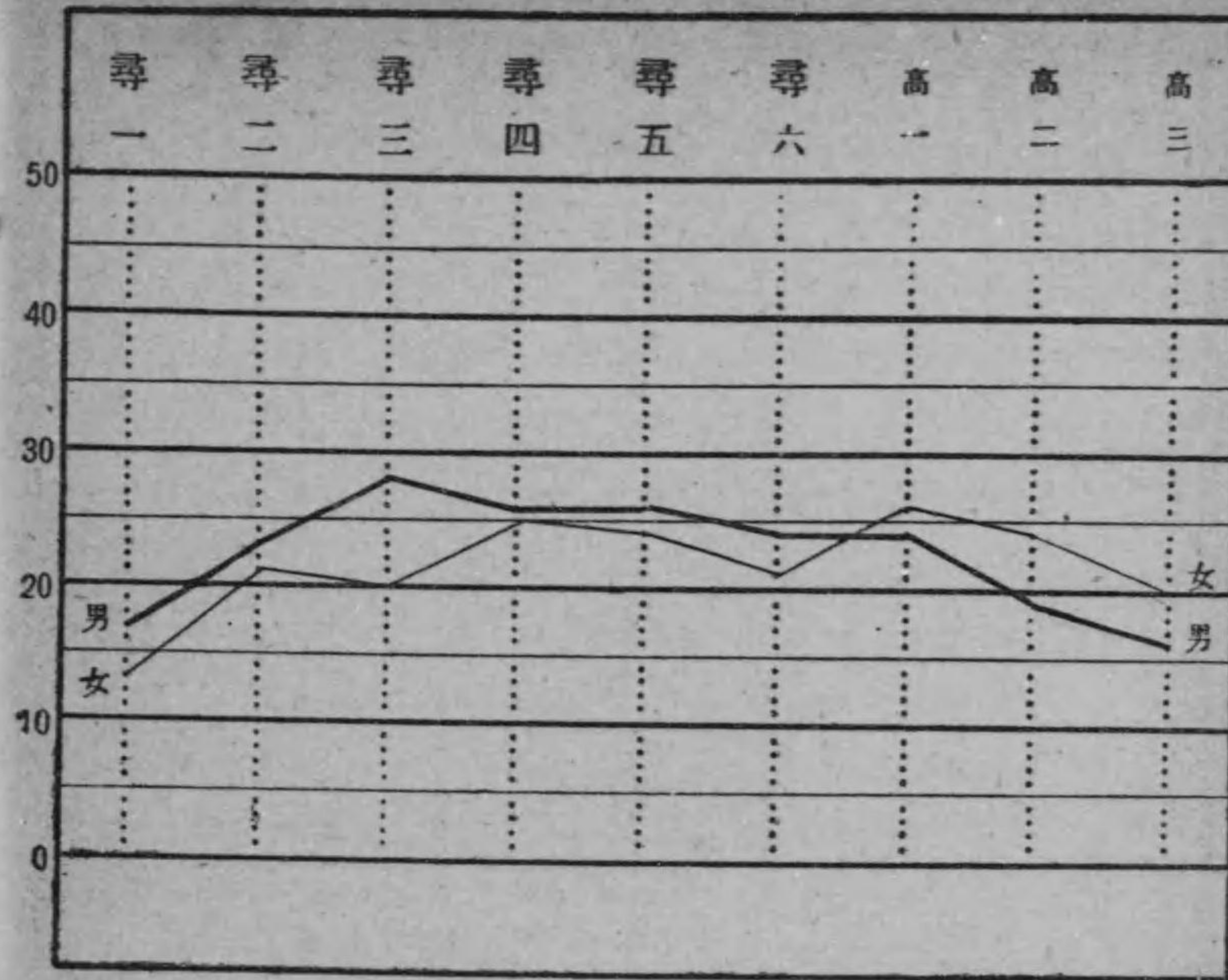
(女)



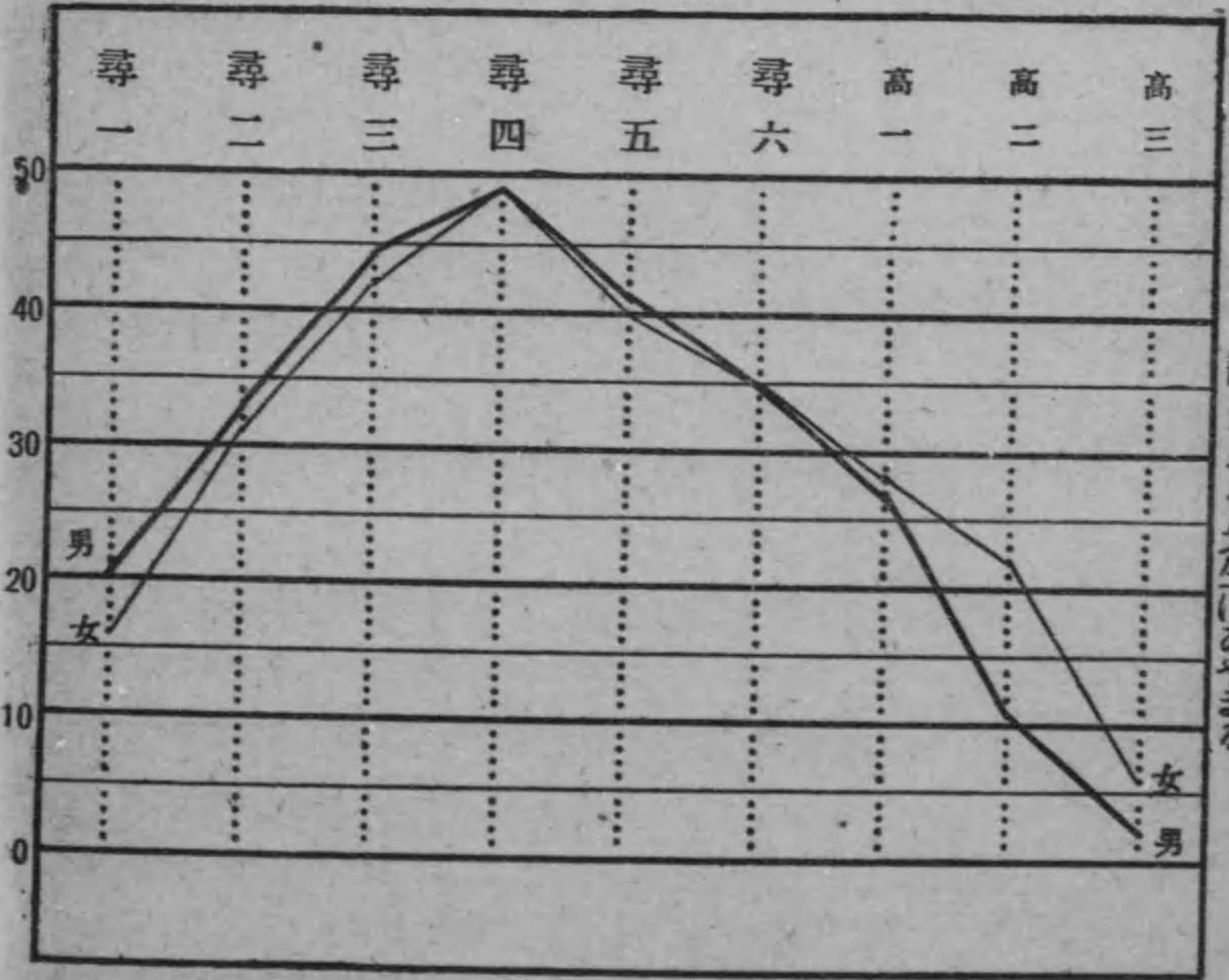
第四圖 (其の三) 先生に言ふ



第四圖 (其の四) 慰める



第四圖 (其の一) 先生にあやまる



第四圖 (其の二) 詫びてゐる先生にあやまる

慰めてやるは、男子には尋常四年から現れるが、女子には三年から現れて来て、殊に男子より聊か優勢であるのは興味あることである。(第三圖其の一・其の二参照)

次に「對先生」の態度の中で主要なものは、「先生にあやまる」の二二%と「先生にいふ」の一%の二項である。然るに、

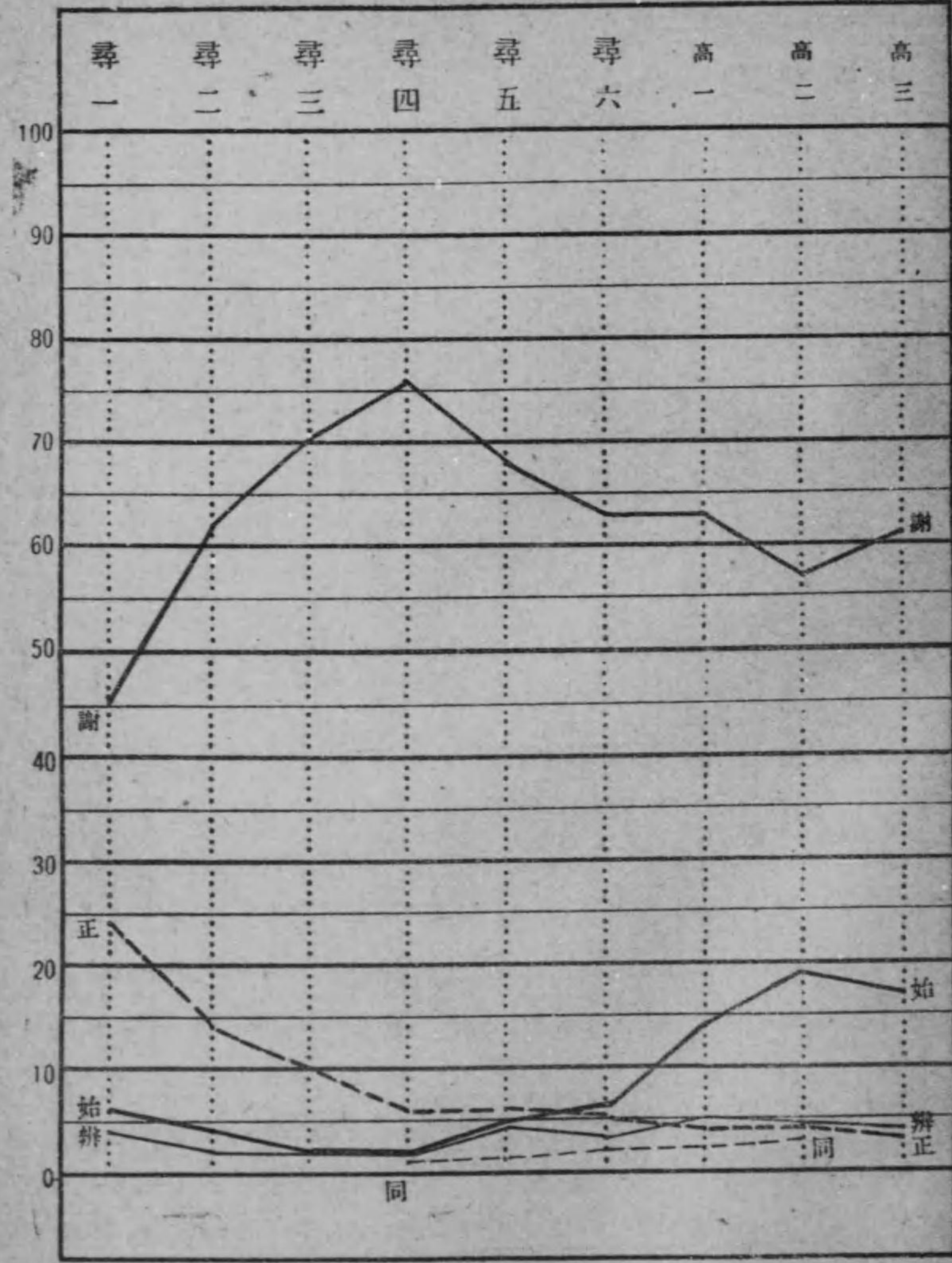
先生にあやまるの男女を對照すれば、第四圖其の一となる。これに依れば、第一、男子は概して優勢である。但し高等一年から女子が優勢になる。第二、男子は尋常一年の一七%から漸次三年の二八%まで高まつて、以後は徐々に下つて行く。第三、女子は概して男子より屈曲が多く、男子が三年で頂點になつて居るに反し、女子は三年には二年と變化がなく、四年及び高等一年に二回高まつて、以後下つて居るが、この時には男子よりは高い。(第四圖其の一参照)。然るに「先生にあやまる」は、特に先生にと云ふ語があるから、先生に對する心情が、單に「詫びてやる」と云ふより強いことを示して居る様に思はれる。けれども、結局のところ「詫びてやる」と同じだから、これを合算してその傾向を見れば、第四圖の二が出来る。

これは一見して明瞭である如く、第一、尋常一年は、男にあつては四〇%、女にあつては三六%から起つて、殆ど平行して急劇に高まり、四年には忽ち六九%となり、これを頂點として下り、六年に至りて、共に五五%とて居る。高等科になつても多少の差を以て更に下つて、二二%、乃至二五%になつて居る。第二、四年までは男子が僅に優勢で、五・六年は男女の差がなく、高等一年以後は女子が優勢である。とにかく「詫びてやる」とにかく「先生にあやまる」と云ふ二者の結合は著しき特徴を示すものと云つて宜しい。(第四圖其の二参照)

次に、單に「先生にいふ」と云ふ一項を取れば第四圖其の三の通りである。第一、男女共に初學年に高く、四年まで急下し、以後は徐々に高等科まで下つて行く。即ち一年には男女二四%或は二七%のものが、二年には共に一五%になり、三年には一〇%、四年には五%で、以下高等科に至つて三%或は二%に下つて居る。第二、男女は殆ど同一で、六年から高等科にかけて男子が少しく優勢なだけである。抑もこゝに所謂「先生にいふ」は、必ずしも悪意があると云ふ意味でもない。唯細大漏さず先生に告げて行くと云ふ心持から来て居るらしい。

最後に「慰める」は、男子にあつては、尋常四年に一%として現れ、高等一年に二%で消え、女子にあつては、三年から二%として現はれ、六年に四%となり、高等科に再び下つて居る。即ち女子は常に男子より優勢にあることは注意すべきものである。(第四圖其の四参照)

ところでこれ等の三者即ち「詫びてやる」「先生にあやまる」「先生にいふ」を組合せて對照すれば、第五圖が出来る。先づ男子に就いて觀察すると、第一「詫てやる」が優勢で、その四年を頂點とした山形は、「先生にいふ」の四年までの下降と略對應して居る。次に二者の五年以下の下降は、前者は急劇であるに反し、後者は頗る遅緩である。第二、「先生にあやまる」はその間に立つて、三年まで漸く高まり、以後は殆ど平に進み、僅に下つて行く傾向を示して高等科まで續いて居る。要之、等しく先生に對して取る態度も、それ／＼その意味を異にして居る。(第五圖其の一参照)。次に女子にあつては、第一、男子の場合に於けるこれ等の傾向が一層屈折を有することを特徴と見るべきである。第二、「先生にあやまる」の方向は、その出發も低いが、男子の場合に比して多少高い様である。第三、「詫びてやる」と「先生にいふ」の對應の形も、男子の場合よりも著しい様に見える。(第五圖其の二参照)

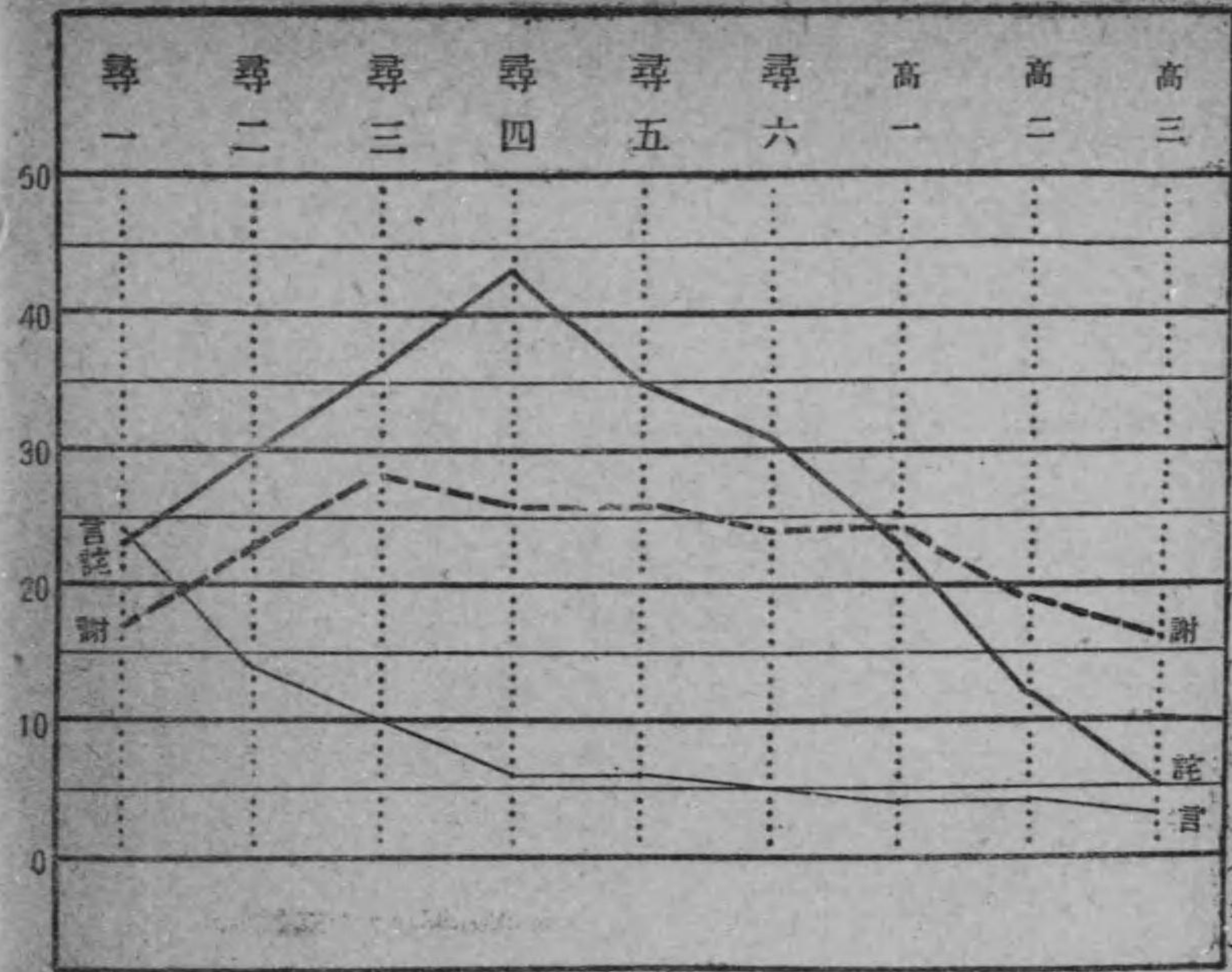


第六圖 (其の一) 1 謝 2 正 3 同 4 始 5 辨 價

(男)

第五圖 (其の一)

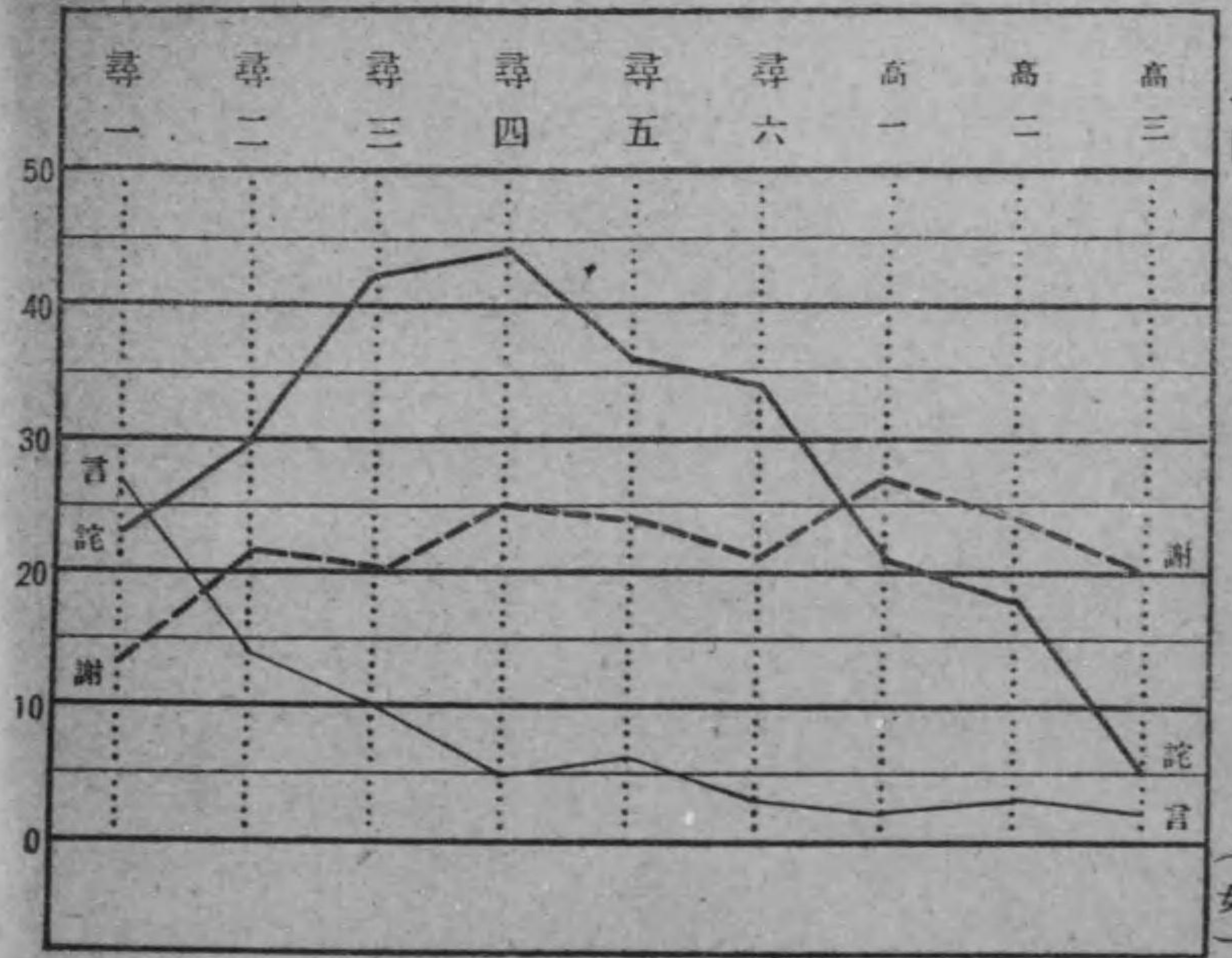
第五回 尋常科全部 中項目



(男)

第五圖 (其の二)

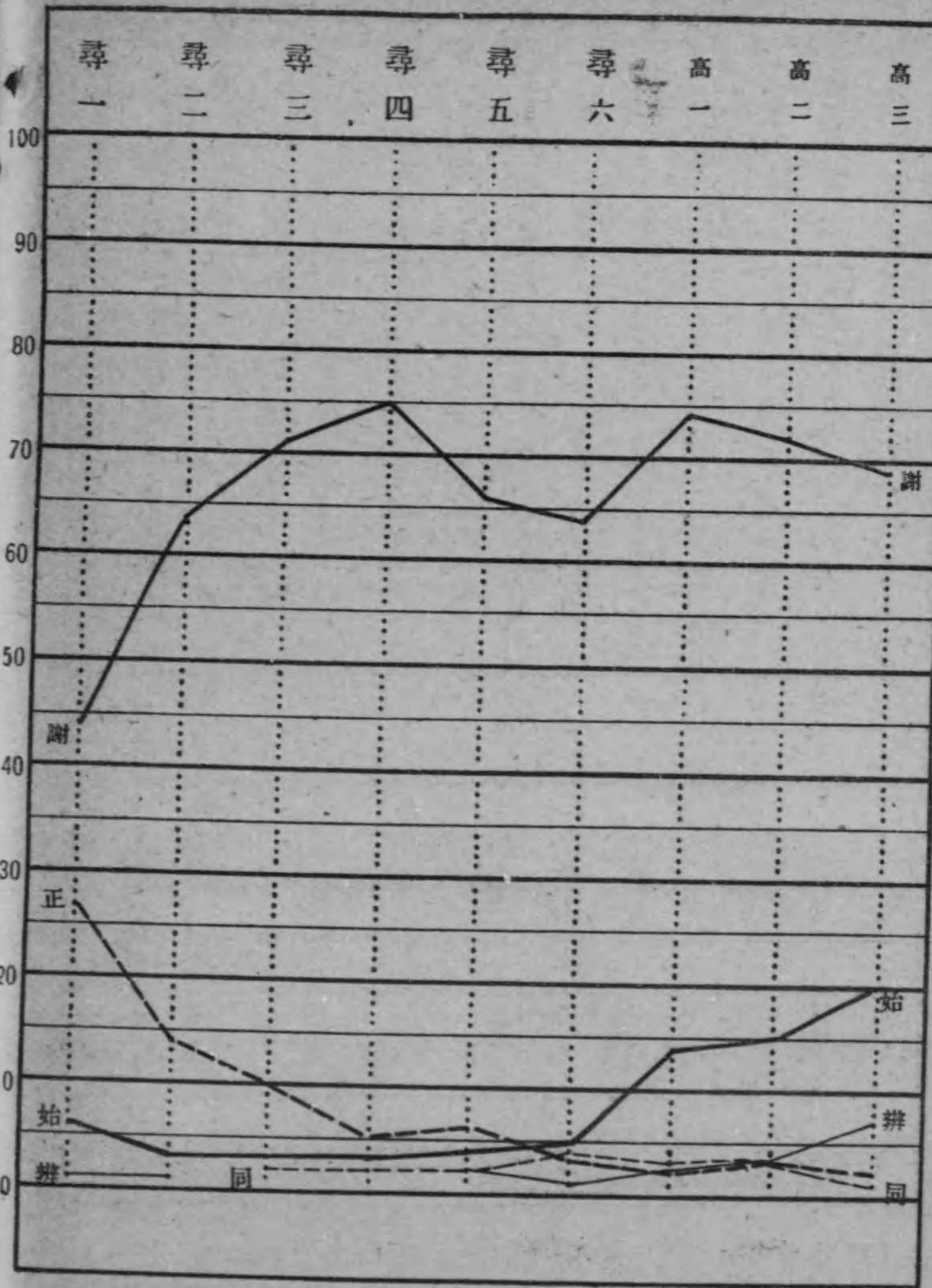
六四四



(女)

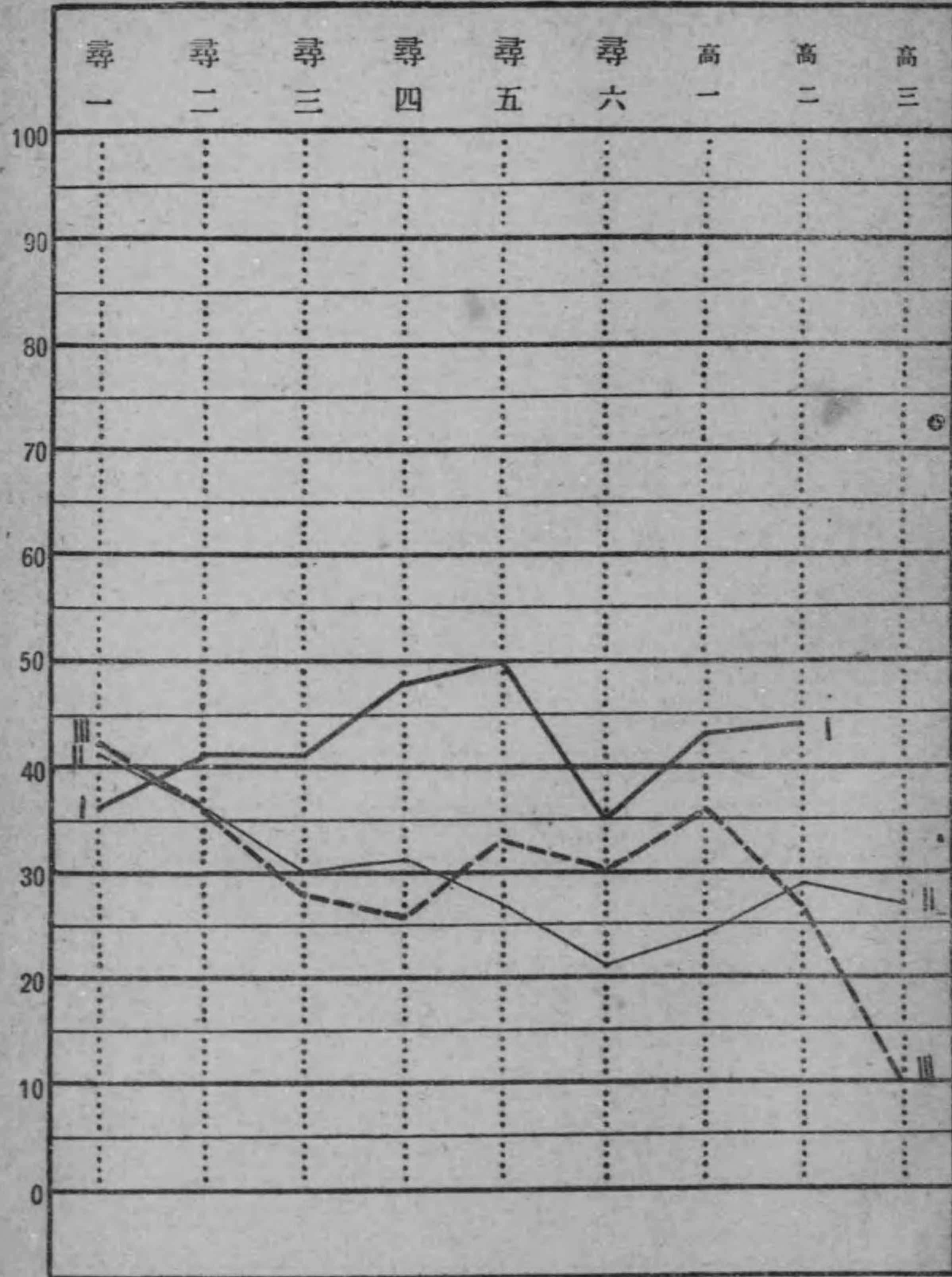
第六圖 (其の二)

1 謝罪 2 正義 3 同情
4 始末 5 辨償



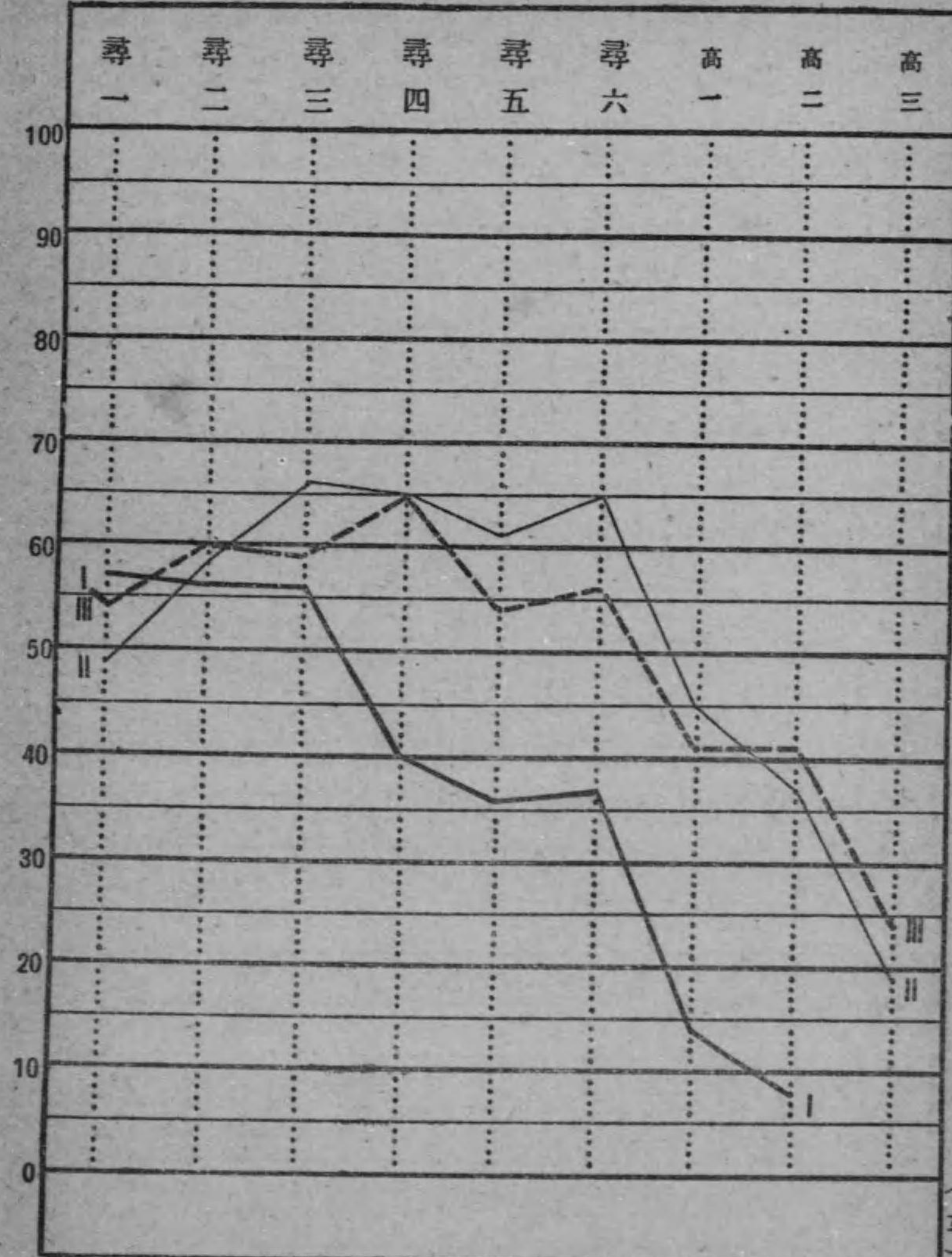
第五問に於ける兒童の態度は、前に試みた様に、對象に依つて觀察することも出来るが、更にこれを概括して考へれば、その對象の如何に係らず、(一)理性的に正義の觀念を主とした態度に出ることも出来、(二)感情的に仁愛の情を基礎とした態度に出ることも出来る。或は又(三)全く無頓着の状態にあることも出来る。今前出の中項目について、かゝる見方から類同の答案を一括すれば、「謝罪せよと云ふ」「謝罪せしむ」「詫びてやる」「あやまる」等の謝罪に關するもの、「先生にいふ」「悪」と云ふ等の正義の態度に出るもの「免す」「身代になる」「助け」等の同情的態度に出るもの、及びその他始末するとするもの、辨償するとするものなどがある。今これ等に關する中項目を各類に依つて分けると、第六圖が得られる。即ち男女共に

謝罪に關するもの、優越は實に著しい事實であるが、今男子に就いて見れば、第一尋常一年に於て既に四五%から起つて急劇に高まり、二年に六二%、三年に七〇%、四年に七六%となつて、この曲線の頂をなして居るが、以後は殆ど全く一・二年に上つた時と同じ形で下降し、五年に六八%、六年に六二%になつて、高等科は更に急劇に低下して居る。第二に、これに對して、正義の態度は、尋常一年に於て一度二四%の多きを示して居るけれども、二・三・四年まで漸次に下つて、四年には僅に六%になり、以後は六%乃至五%で進んで、高等科には更に少くなつて居る。第三、同情的態度は、尋常四年に於て僅に一%として初めて現れ、六年以後は二%乃至三%になつて高等科まで進んで居る。第四、始末に關するものは、尋常一年の六%が、二年に四%、三年は二%と漸次に減じて行くが、五・六年には五%・六%となつて再び僅に上つて来る。第五、辨償に關するものも、始末に關するものに似て居る。(第六圖其の一参照)



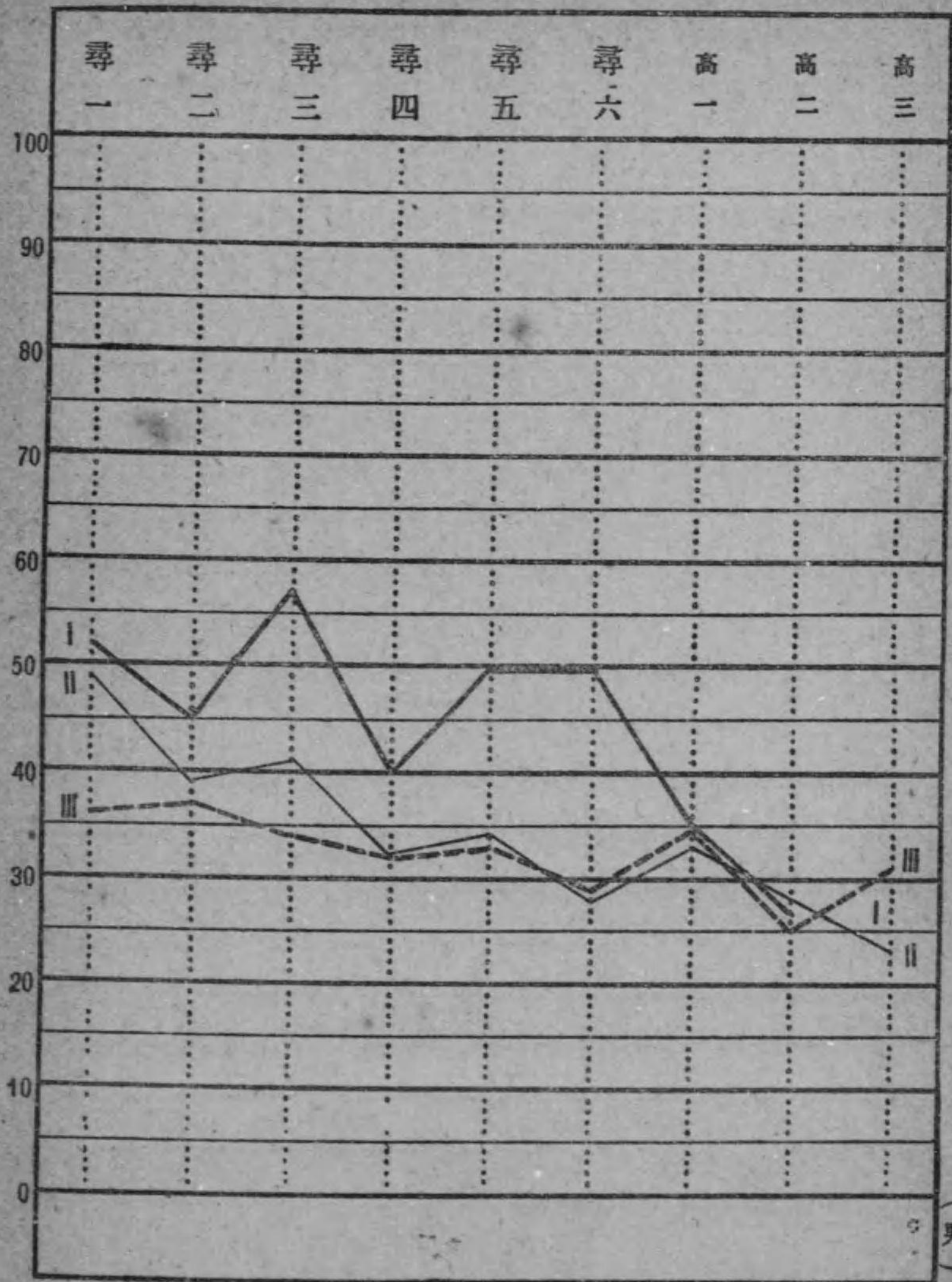
第七圖 (其の三) 對學校先生

(女)



(女)

第七圖 (其の四) 對學校 先生



五年に少しく下つて、六年に聊か回復し、高等科に至つては再び急下する。けれども第三部は、尋常四年から急下し、五・六年に聊か持ちなほして、高等科に至つて再び急下する。(第七圖其の二参照)

對學校及先生の態度に就いて、先づ男子を見れば、第一に、第一部は著しく優勢である。第二に、第二部は尋常三年までは第三部に比して可なり優勢であるが、四年以後は殆ど一致して居る。第三、全體の傾向は漸く下降の趣がある。第一部はその變化實に著しいけれども、漸く降つて行く。第三部は最も變化に乏しく然かも漸く下て行く。高等一・二年には各部が殆ど同じである。(第七圖其の三参照)

次に女子に就いて見れば、第一、第一部が最も優勢であることは男子と同じである。又第二・三部にあつては四年までは第二部は聊か第三部に優つて居るけれども、その以後は第三部は頗る優勢である。第二、全體の傾向は各部共に變化多く、主なる方向を認むることが困難である。唯各部の出發點は略同じであるが、尋常六年には、何れも出發點よりも低い。(第七圖其の四参照)

九 各部中項目

項目	男					
	一	二	三	四	五	六
詫びてやる	三五	三三	三三	二九	二六	二二
先生に詫びる	二六	二三	二〇	一六	一四	一三
先生に告げる	一六	一三	一〇	〇七	〇五	〇四
謝せよといふ	三七	三三	三三	二九	二六	二二

第五問 尋常科全部 中項目

始末してやる	謝せしむ	今後を戒しむ	始末する	先生に詫びて仕末する	慰める	辨償する	先生に云て仕末してやる	免す
I	II	III	I	II	III	I	II	III
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42	43	44	45
46	47	48	49	50	51	52	53	54
55	56	57	58	59	60	61	62	63
64	65	66	67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78	79	80	81
82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99
100	101	102	103	104	105	106	107	108
109	110	111	112	113	114	115	116	117
118	119	120	121	122	123	124	125	126
127	128	129	130	131	132	133	134	135
136	137	138	139	140	141	142	143	144
145	146	147	148	149	150	151	152	153
154	155	156	157	158	159	160	161	162
163	164	165	166	167	168	169	170	171
172	173	174	175	176	177	178	179	180
181	182	183	184	185	186	187	188	189
190	191	192	193	194	195	196	197	198
199	200	201	202	203	204	205	206	207
208	209	210	211	212	213	214	215	216
217	218	219	220	221	222	223	224	225
226	227	228	229	230	231	232	233	234
235	236	237	238	239	240	241	242	243
244	245	246	247	248	249	250	251	252
253	254	255	256	257	258	259	260	261
262	263	264	265	266	267	268	269	270
271	272	273	274	275	276	277	278	279
280	281	282	283	284	285	286	287	288
289	290	291	292	293	294	295	296	297
298	299	300	301	302	303	304	305	306
307	308	309	310	311	312	313	314	315
316	317	318	319	320	321	322	323	324
325	326	327	328	329	330	331	332	333
334	335	336	337	338	339	340	341	342
343	344	345	346	347	348	349	350	351
352	353	354	355	356	357	358	359	360
361	362	363	364	365	366	367	368	369
370	371	372	373	374	375	376	377	378
379	380	381	382	383	384	385	386	387
388	389	390	391	392	393	394	395	396
397	398	399	400	401	402	403	404	405
406	407	408	409	410	411	412	413	414
415	416	417	418	419	420	421	422	423
424	425	426	427	428	429	430	431	432
433	434	435	436	437	438	439	440	441
442	443	444	445	446	447	448	449	450
451	452	453	454	455	456	457	458	459
460	461	462	463	464	465	466	467	468
469	470	471	472	473	474	475	476	477
478	479	480	481	482	483	484	485	486
487	488	489	490	491	492	493	494	495
496	497	498	499	500	501	502	503	504
505	506	507	508	509	510	511	512	513
514	515	516	517	518	519	520	521	522
523	524	525	526	527	528	529	530	531
532	533	534	535	536	537	538	539	540
541	542	543	544	545	546	547	548	549
550	551	552	553	554	555	556	557	558
559	560	561	562	563	564	565	566	567
568	569	570	571	572	573	574	575	576
577	578	579	580	581	582	583	584	585
586	587	588	589	590	591	592	593	594
595	596	597	598	599	600	601	602	603
604	605	606	607	608	609	610	611	612
613	614	615	616	617	618	619	620	621
622	623	624	625	626	627	628	629	630
631	632	633	634	635	636	637	638	639
640	641	642	643	644	645	646	647	648
649	650	651	652	653	654	655	656	657
658	659	660	661	662	663	664	665	666
667	668	669	670	671	672	673	674	675
676	677	678	679	680	681	682	683	684
685	686	687	688	689	690	691	692	693
694	695	696	697	698	699	700	701	702
703	704	705	706	707	708	709	710	711
712	713	714	715	716	717	718	719	720
721	722	723	724	725	726	727	728	729
730	731	732	733	734	735	736	737	738
739	740	741	742	743	744	745	746	747
748	749	750	751	752	753	754	755	756
757	758	759	760	761	762	763	764	765
766	767	768	769	770	771	772	773	774
775	776	777	778	779	780	781	782	783
784	785	786	787	788	789	790	791	792
793	794	795	796	797	798	799	800	801
802	803	804	805	806	807	808	809	810
811	812	813	814	815	816	817	818	819
820	821	822	823	824	825	826	827	828
829	830	831	832	833	834	835	836	837
838	839	840	841	842	843	844	845	846
847	848	849	850	851	852	853	854	855
856	857	858	859	860	861	862	863	864
865	866	867	868	869	870	871	872	873
874	875	876	877	878	879	880	881	882
883	884	885	886	887	888	889	890	891
892	893	894	895	896	897	898	899	900

びてやる	先生に詫びる	謝せよと云ふ	始末してやる	謝せしむ	今後を戒しむ	始末する	先生につける	先生に詫びて仕末する	慰める	辨償する	免す
I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96
97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108
109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120
121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132
133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144
145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156
157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168
169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180
181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192
193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204
205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216
217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228
229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240
241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252
253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264
265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276
277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288
289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300
301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312
313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324
325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336
337	338	339	340</								

とならうと思つた。それ故に高等科の答案及びその整理の結果は、全部これを掲載することを避け、唯参考の爲に、尋常科の圖の上にこれを接続して見ることにしただけである。けれども、その結果は尋常科のそれとはいたくその確實の度を異にし、その數の關係を示した圖線も、甚しく不規則に表はれて居る。それ故に高等科の分は十分の信頼は出来ないものと思ふ。(總説二七頁參照)

これに就いてかゝる種類の研究をなす者の深く注意しなければならぬと思つたことは、總てかゝる調査には、その調査人員の多かるべきことである。この研究に於ても、或る學校の或る學年の如きは、殆ど全く同じ答案になつて居たものも往々目に止まつたが、道德に關する事項の如く、得て信仰的になつて居ることは、その受持の教師や學校の校風や、或はその地方の習慣又は最近に起つた事件等に影響せられることが頗る多い。これは決して算術の如く精密に考へられ得る學科や、地理や歴史や理科等の如く事實を主とする學科の答案の如く客觀的であることを得ない。それ故に、少しく教師のその時の言語や態度や、又平生の主義や理想等が兒童から認められて居れば、彼等の答は、どうしてこの影響を受けぬと云ふことは出来ない。かかる事情に影響された答案は、これを整理しても、比較的眞實を語るものと見ることが出来なう。

従つて世間往々にして見るが如く、僅に一學級或は一學年或は一學校等、要するに少數の兒童に調査した結果を前提として、之れから或る結論を引かうとする大膽なことは、大に注意して避けなければならぬところであらうと思ふ。勿論唯一人の兒童の答案でもそれが事實でないとは云ふことはない。従つてその答案を基礎として或る穿つた考案を廻らすことは固より可能なことである。又その考察的確に出来る人は、極めて洞觀力の鋭い人

と云つても宜しい。けれども、一人や二人、或は數十人でも、時には數百人に對して行つた調査でも、若し現れた結果を數量的に利用して或る斷定をなさうと思へば、道德等に關する事項は、頗る慎重な態度を執り、頗る周密な考察を廻らさなくてはならぬと思ふ。

今回の研究は、既に各問とも數に於て五萬以上で、各學年でも少くとも八千以上であるから、その中には、たとひ多少種々の事情から影響せられたところがあつても、それが爲に著しく大勢を左右せられることはあるまいと思ふ。

且つこの研究は、兒童の直接の答案たる所謂小項目を最も主なるものと見ずして、却つてこれ等小項目の類似のものを纏めた中項目に重きを置いたから、單に一二の兒童の言ふところに偏する憂が少からうと思ふ。

將來かかる種類の研究をなさんと志す者は、先づ調査人員の或る程度まで多いことを第一の條件とすることが必要であらうと思ふ。これ實にこの研究をなすに當つて第一に痛切に感じたところである。

第二 不明瞭な答案の多いこと である。これも既に總説にも又第一問の説明にも述べたところであるが、不明・不適當なものが、全く答へることの出来なかつたもの即ち不能の外に頗る多いのは注意すべきことである。これ等は各問ともその數を示してあるが、とにかく道德に關する事項の答述は、兒童に取つては決して容易のことでないと思ふことは、全く察するに難くないところである。殊に尋常一年或は二年の兒童の筆答——尋常一年は口頭で調査された人が多かつたらしいが——は頗る困難であつたと思ふ。それ故に質問法を用ふることにして、筆答となれば中々明瞭に答へ難いと云ふことを豫期しなければならぬ。

否、一步を進めて考へれば、問題其者が既にその答に十分明瞭を期し難い様に見えるのである。これは吾人の頗る苦心したところで、既に當附属小學校兒童に試みた際の経験に依つて、幾分問題の語句を訂正することが出来たけれども、概して十分明瞭を期すること、従つて答案の明瞭を望むことは、かゝる種類の事項の性質上十分と云ふことが出来にくかつたと思ふ。

かくの如く問題としても明瞭を期し難く、答述としても明瞭を期し難いのは何によるかと云ふに、これは全く道德といふ事實の複雑なこと、及び又これに對して吾人の精神の作用して行く状態が容易に反省に入り難いのが最大原因で、即ち道德に關することは、嚴密に云へば理解もしにくければ又發表もしにくいといふこと云ふことに基くものであらうと思ふ。

世間普通に、道德上の道理を悟らしむることは極めて容易であるが如く考へて居るけれども、靜にこの問題を考へて來れば、決してそんなに容易であるまいと思ふ。これを容易である様に假定して、思想の幼稚なる兒童に道德上の理屈を並べることは、教育方法として極めて不適當なものであることに氣が付かなければならぬ。それ故にたとひ理屈を云ふ必要があるにしても、極めて簡明にその主要なる點を捕へしめる様に企てなければならぬと思ふ。

これに因んで直に思ひ浮ぶことは、

第三、高學年の兒童にも不適當な答述の多いことである。否、寧ろ愚答とでもいひたい様な答述の多いことである。これは第一問の如く、學校教育の影響を受けて居ることの多い問題に對して考へれば、たしかに教師の

教育が不得要領で、不明瞭であることを一面に證據立てるものであらうと思ふ。

第一問第二問等は、「一番ヨイコト」「一番悪イコト」である以上、如何に小學校の兒童の答としても、餘りに情ないものが多いと思はしめる様なのがある。これ道德教育修身教授をなすものの深く反省すべきところであらうと思ふ。例へば

第一問「一番ヨイコト」の正解の中で見ても、尋常六年の兒童に、「列を作つて切符を買ふ。」「字を書く。」「左側を通行する。」「などはまだ宜いとしても、「荷物を机の中に入れてすぐ外に出る。」「机の曲つて居るのを直す。」「朝早く来て窓を明ける。」「朝早く起きて御飯をたべる様にする。」「朝蒲團の出し入をする。」「來年の正月にお客が来た時お使をする。」「よく眠むる。」「等がある。勿論考へ方によつてはこれ等も「一番善イコト」でないこともあるまい。けれども、尋常小學校を卒業する際の兒童の答として見れば、餘りに道德や義務の輕重大小に關する思想の不整理に驚かざるを得ない。これは實に吾人の平生の教授や指導法に大なる反省を與へるものである。況んや所謂「不當其二」の原表を一讀するものは、如何に面白い答述があるかに一驚を喫することであらう。これ等の事實を儼然たる教科書の教材の程度に對照して見れば、真に一種の諷刺を感ぜしめる様な氣がする。

第四、男女の差異 はかかる研究に於て常に注意せられるところであるが、この研究の結果に就いても、或る方面に於ては極めて著しくその差異が現れて居るものがある。例へば國家に關する道德は男子に於て最も著しく、家庭に關するものは女子に於て頗る優勢なこと等である。第一問の答案は、可なり學校教育の影響を受けたらしいが、然も學校は男女同一教科書を使用して居るにも係らず、その同一問題に對する答述の結果がかかる差異を

来たすものとすれば、男女に因つて教授上訓練上の手加減を異にすべき理由は、餘程事實の上にその要求を示して居るものと云つて宜しからうと思ふ。

第五 地方別に依る差異 も亦注意すべきもの一つとしたか、これは豫想ほど著しい差異を示して居ない。けれども、大都市・中都市或は地方に依つて、その答述の範囲と内容とを異にして居ることは勿論である。或は某の部にあつて他の部に現れない項目もある。これ等も悉く整理の圖表の上に於て容易に解釋を試みることの出来ないものもある。けれども、その大勢の著しいものは、注意して實際教育上に利用することの必要を感ぜしむるものと稱して宜しい。

第六 この研究の結果の利用 は、直接間接に種々の方面にあらうと思ふが、唯これを妄に輕卒に適用することは他くまでも戒めなければならぬ。今その最も有効と思はるゝものを數へると、先づ

(1) 修身教授或はその他の場合に、兒童に傳へようとする説話や教訓の範囲内容及び程度を適當にする爲に、この研究の結果を一つの有力な參考となし得ることである。即ち例へば兒童に提出する説話の題目は如何なものか適當であるか、その範圍を考へて見ると、自己に關するものであらうか、家庭に關するものであらうか、又或は社會・國家に關するものであらうかを定めるに就いて、この研究は頗る有力な暗示を與へるものである。尤も教師は、教育の目的の上から常に必ずしも兒童の自然に要求する種類のみに従ふことは出来ない。けれども、如何に教育の目的の上からの必要であつても、兒童の眞の興味と能力とを第一に理解して置く必要がある。この理解があつて、而して後初めて教育上の要求を提出すべきことである。否、教育上の要求が餘りに兒童の眞の興

味や能力の程度に合しないならば、その要求の徹底は勞多くして効少く、或は時に有害なる結果を生ずることがないとも限らない。

次に或る題目の説話や教訓をなすにつけても、その内容はどんなものであるべきかは、先づ兒童の意識の内容に標準を置かなければならぬ。今教訓すべき徳目に就いて云へば、例へば孝行と云つたところで、兒童の考へて居る孝行の内容はどんなものであるか。忠義にしても、公徳にしても、儉約にしても、これ等の概念に相當する兒童の意識の内容は、決して大人のそれとは同一なものでない。若し教師は己の思想を以てこれ等の徳目の内容を規定し、これを以て直に兒童に臨んでも、これで決して眞に兒童を動かすことの出来るものでない。或はこゝにも亦、教育上の必要を理由として、諸徳の内容を嚴格に理論的に考へる人もあらうけれども、かかる要求は、一般に餘りに兒童の程度を顧みないものである。たとひかかる案を強制的に實行するにしても、先づその教授の出発點は、これを兒童の現在有する意識内容に求めなくてはならぬ。否、少くとも、直接には全くこれに觸れなくとも、教師は既に兒童の意識内容を知つて居なければならぬ。而して兒童の有するこれ等の諸徳の内容は如何なるものであるかは、この研究の原表が頗る好くこれを例示して居る。殊に孝行忠義の二大徳目に對しては、全くこの目的に役立てることが出来るのみならず、その他の諸徳に就いてもそれ／＼その程度と内容とを暗示するに十分である。尤も忠孝以外の諸徳に就いては、他日を期して更に調査して見たいと思ふ。

それ故に、この研究の結果は、單獨に修身教材を選ふにしても、排列するにしても、又既定の教材を兒童に適應する様に組立て且つ取扱ふにしても、直接間接に參考となることが頗る多からうと思ふ。

その他、總て教材を具體化して行く爲に、據り所となる事實、或は必要に應じて引用すべき比喩・適例・用語等に至るまで、この研究の原表乃至整理の諸表は、頗る便利な參考資料を提供することになるであらうと思ふ。

(2)この研究の結果を訓練の方に採るならば、訓練すべき事項の標準を定める爲に、亦一つの大なる暗示を與へることにならうと思ふ。從來の訓練は、單に教師が定めた案を兒童に要求した感がある。勿論これを定める爲には、日夕兒童を取扱つた經驗から、兒童の力を想像して居たものもあることは言ふまでもないが、然かも一般に兒童の道徳意識の發達に對する確な標準が認められてきたことではなかつた。

それが爲に、多く程度の高い要求を提出して、遂にはこれを教師の熱心で勵行して行くに限るといふことに歸着して居たのである。勿論熱心に勵行することも必要である。けれども、第一にこれ等の要求に無理がないか否かを考へることが更に必要である。若しこの點に大なる誤りがあつたならば、たとひ一時は行はれても、決してこれを永久に持續せしむることが出来るものでない。従つて遂に最後の目的を達することが出来まいと思ふ。ところで兒童を實際に指導して行くにどんなところから順序を立て、行くかと云ふに、思想や感情の内容や程度から云へば、第一・二問の答案が役立つのみならず、實行指導の方針を定める爲には、第五問の如き頗る有益な暗示を與へるものと云ふべきであらうと思ふ。

二 第一問に就いて

第一 國家に關する答案の傾向 は、既に説明した如く極めて頼母しい有様を示して居る。即ち學年の上るに

従つてその數が高まつて行く傾向は最も鮮明なものである。この事實は、學年の進むにつれて「一番善イコト」を國家に關するものに置くと云ふ意味と見れば、忠を以て國民道徳の最高概念とする我國の兒童の意識内容として、最も頼母しいことであるのは言ふまでもない、けれどもこれに就いて更に深い考察を廻らして見れば、種々の問題が起つて来る。第一かかる結果は小學校程度の兒童の意識として、果して最も自然的のものであらうか。若し自然的のものでないとすればこの結果を來たした原因は何處にあるか。第二、又この結果は中等教育の學校に於ては果して如何なる方向に變化するであらうか。第三等しく國家に關することを最高の善と考へても、この内容は如何なる點に重點があるか。又その方向はどうなつて居るか等、何れも極めて貴重な問題が包含せられて居る。

然るに、今第一問整理の圖表や原表に就いて以上の諸問題を解釋して見れば、第一かかる好望な結果を來たしたのは、主として學校教育の結果に歸するのが最も至當であらうと思ふ。勿論國家的事業に關して功勳ある人々などが直接に彼等の注意を惹くこともあり、又これを傳へる新聞雜誌その他の機關が彼等を動かすことのあるのも事實であらう。けれども吾人の察するところを以てすれば、その最も主なる原因は、どうしても學校教育殊に修身・日本歴史及び國語等の教授の影響であらうと思ふ。果して然らば、國家主義教育の努力は、實にこの點に於て先づ全國幾萬の兒童の精神に深い印象を與へて居るものと云つて差支がない。第二この結果は中等教育或はそれ以上の學校の生徒に於て如何に現はれるであらうかは頗る興味ある問題であり、又極めて貴重な問題であるが、惜しいことには今はこれを知るに由がない。唯吾人の想像を以てすれば、中等教育に於ても、その初學年に於ては

或はこの傾向を續けるかとも思はれるけれども、中學年及び殊に上學年に至つては、或は恐らくこの傾向を維持して居ないではあるまいか。これは中等學校の生徒の思想を示した作文、或はその他の場合に於て表はした態度からの推察である。第三國家に關する道德の内容は、第四問に於てその詳細を知ることが出来るが、大體に於て國其者に關するものが漸く上つて行くに反し、天皇に關するものが察する降つて行く様に見えるのは、一方喜ぶべきと共に、一方注意すべき現象と云はなければならぬ。我國の忠を皇室や天皇と離して考へることは頗る考へべきことで、天皇皇室から兒童乃至國民の注意の離れることは、大に考ふべきことであらうと思ふ。とにかくこの點は第四問を参照せられんことを希望する。

第二 家庭に關する答案の傾向も、第三問に於て詳かなところを知ることが出来るが、大體父母を中心として答へられた孝行が最も優勢で、家殊に祖父母とか祖先とかに思想を向けたもの、頗る少いのは孝道の思想の内容上注意すべきことである。尤も小學校の兒童に就いて云へば、父母を主とすることになるのは最も自然的で、家に着眼する様になるのは一般に更に進んだ思想のものに望むべきことであらう。けれども今日の如き社會生活の現状では、成長した生徒に對しても、漸く家に對する思想を高めることは出来るであらうか。これはとにかく深く考ふべき問題であらうと思ふ。

第三 社會に關する答案の傾向は、男女とも餘り優勢でなく、然かも殆ど尋常一年から六年まで高低がなく、高等科に至つても大なる變化はないが、これは如何なる原因であらう。教育上の要求から云へば一考に値するものであるまいか。殊に第二問の結果を考察すると、その「一番惡イコト」と云ふのに、社會が著しく他の何れのものにも勝つて居るとして見ると、この事實の解釋の上からも、又教育上の注意の上からも、十分研究すべき價値ある問題であらうと思ふ。

第四 學校に關する答案の傾向は各種の大項目中で最も低いもので、この結果には聊か意外な感じかする。尤も學校に關することは、性質上國家や家庭や又社會や自己に關するものに比して、自然に優勢であり得ないのであることは言ふまでもなく、従つてこれ等の道德に比して兒童の注意に上ることが劣つて居ても、何等憂ふべきことであるまいとも云へる。けれども小學校兒童の程度として見れば、今少しく學校、教師に對する注意が高まつて居ても宜さうなものとも思はれないこともない。従つてこの事實は、教師對兒童の關係が、全く健全に維持せられて居ないからの結果と斷ずることも當を得て居るとは申されまいが、さりとて今日の狀態が十分健全に維持せられて居ると見ることが等しく當を得て居まいと思ふ。果して然らば、この原因は何ににあるか。これも研究の價値ある問題であらうと思ふ。

第五 神佛に關する答案の傾向はこれ亦最も注意すべきもの、一であらうと思ふ。「一番惡イコト」は何であるかと云ふに對して、神佛に關する答の現れ方が餘りに少い様な氣がする。即ち第一問に於ては、その實數が兒童總數五萬四千四十七名中、僅に(尋一)三八(尋二)五七(尋三)一九(尋四)七(尋五)八(尋六)六(合計)一三五、然もその傾向は尋常二年の五七が最も多く、三年以後は著しく降つて居るではないか。

これは神に關する思想が、歐米諸國に比して著しい差異があるとしても、とにかく教育上頗る注意すべきものであらうと思ふ。

第五、不適当な答案は頗る興味ある考案の材料を提供して居る。即ち第一問に於て、児童の「一番ヨイゴト」として挙げた事實の中には、既に示した如く、單に問題を反覆したものや單に格言のみを挙げたものなどがあるけれども、その他は、

幸福、うれしい、面白い、好き、美しい、役に立つ、欲しい等の意味に相當するもので、主として感情に基礎を有して居るものである。然もこれが可なりの數を以て尋常六年までも續いて現れて居る。殊に「好き」と云ふことを「善い」と云ふこととしたのが最も多く、又「幸福」を以て「善い」としたものがこれに次いで居る。これ等の結果を見れば、普通に倫理學や倫理學史に説かれて居る「善」の概念の發達變遷の跡は、恰も横に現在の児童の意識の間に擴がつて居る様な感じがする。殊にこれを學年の進歩につれて考察して行くことは、道德意識の特質及び發展を研究する爲に頗る興味ある問題である。

三 第二問に就いて

第一、社會に關する答案の傾向は第二問の答案中最も注意すべきもので、既に示した如く、他の總ての項目を併せてもこの一項目に及ばないほど優勢なものである。これは聊か豫想に反したところである。尤もその方向は、男子に於ては尋常二年が最高で、女子に於ては尋常三年が最高で、以下何れも漸く降つて行くが、とにかく全體として比類なきほど優勢であることは頗る興味あり、又重要な意味ある問題である。

然るにこの惡に關する思想感情は、善の場合に於けるが如く、多く教育殊に學校教育の影響に依るものでなく寧ろ児童の實際生活から生じたものとするならば、彼等の自然に有する意識内容を知るには、頗る適當な事實であらうと思はれるが、彼等の答案の内容を仔細に吟味すれば、その所謂「一番惡イコト」と云ふのは、「一番善イコト」に對する答案に於て孝行・勉強・忠義等の價值の高き概念が現はれたのとは頗るその趣を異にして、偷盜・不孝・喧嘩等が最も優勢なものとなつて居る。即ち必ずしも最も價值ありとせられた善の反對が最も惡いとはせられて居ない。寧ろ児童の生活に於て最もよく遭遇する經驗或は實際社會に於て見聞することが最も多いと思はれるのが、主として挙げられた觀がある。これは蓋し惡に關して秩序ある教育が施されて居ないからであらうと思ふ。即ち児童は善に關してはたとひその事が實行され様とされまいと係らず、常に最高の善が教られ鼓吹せられて居るけれども、惡に關しては主としてその事實が行はれた時に、これに對して注意を集められ、教訓を受けるだけであるから、その屢々犯される惡は、たとひその程度がそんなに高くなくとも、その價值がそんなに大きくなくとも、とにかく度重つて自然にその印象が深くなつて來るものであらうと思ふ。従つてたとひ「一番惡イコト」は何であるかと問はれたら、先づ児童の心に浮んで來るものは、平生彼等の意識内に往來して居ることとて、必しも最高價值のあるものではあるまいと思ふ。不孝は偷盜に次いで優勢な中項目であるが、その尋常三年以上漸く高まつて行くのは、一部は教育の結果でもあらうけれども、一部は彼等の實際生活でもあるからであらうと思ふ。

けれども善に關する秩序ある教育は、間接に惡に關する教育ともなつて居ることも全くないとは云へない。これは、惡の社會に關するもの、最も高いのが尋常一・二・三年で、四年以後は漸く低く、これに代つて優勢となるも

の**一部**は家庭であり、殊に國家であるに氣が付いて見れば、大方察するに難くないと思ふ。この事實は教育上如何なる暗示を與へるかと思ふに、先づ惡に關しては、自然に兒童の經驗から得らるゝまゝに放任して置いて差支へないかどうかと思ふことであらう。勿論自然のまゝに放任すると云つても、その偶發の場合には必ず父母や教師や又朋友等からこれに關する思想や感情を得ることは言ふまでもない。して見れば、吾人はこれだけの影響以外に、特に學校教育の立場から取るべき手段はないかと云ふことである。これに關して吾人の感じの一端を云へば、兒童の避けることの出来ない事情から受ける惡に關しては、大體その自然に受ける影響に任かして置いて差支はあるまい。即ちかゝる際に長者その他から自然に受ける教訓や反省等に任かして置いて差支はあるまいと思ふ。けれども、教育上の要求から云へば、某の一事の惡であるといふことに關しては、餘りにその思想や感情が價値の概念に矛盾して居る様なことのない様にしたいたいものと思ふ。相當に成長した人でも、その事のさほどの惡でないと思つて居るところから、遂に大なる罪惡を犯す様になることは、男女共に頗る多い事實である。従つてたとひ善の場合の様に秩序を立て、教訓することがなくとも、その惡相當に、その程度や性質をよく説き聞かせることが、道德教育上頗る肝要なことであらうと思ふ。

第二 神佛に關する答案の傾向は第一問に於けるよりも一層少いのは更に驚かされたことである。第一問に於ても、既に示した如く、尋常科の合計實數百三十五名のみであつたが、第二問に於ては、實に僅に(零一)一(零二)三(零三)一(零四)一(零五)一(零六)五(合計)一〇のみである。これは第一問同様頗る重大なる意味を持つて居るものである。

第三 不適當な答案の傾向は、善の場合に於けるが如く、主として感情に基く方面にも現れて居る。即ちこの答案は、「問題反覆」の外「不幸」「かなし」「あつらふ」「にくらふ」「はづかし」「残念」「あひし」「不如意」及び「不自由」の十項目合計四百餘名あるが、その中最も多いのは「きらひ」の二百五名で、これに次ぐものは「不幸」の七十七名である。而して前者は學年の進むにつれて減じて來るに反し、後者は學年と共に進んで來るのも一寸注意すべきことである。とにかく兒童の道德意識は、純粹に道德觀念のみから成立つて居るものではないことは、善の場合と併せ考へて想像に難くないと思ふ。

四 第三問に就いて

第一 徳目の擴張 第三問は、孝と云ふ一個の徳に關して、十分に兒童の意識の内容を言ひ表はさせたものと思ふべきであるが、これを學年の發達に關係づけて觀察して行くなれば、孝の外延が幼年生ほど狭く、年長生ほど廣くなつて居る。即ち等しく孝と云つても、幼年生は主として直接に父母に關することを言ひ、或は自己に關する方面を言つて居るに反し、年長生は父母に關することは勿論、自己・家・學校・兄弟・國家・社會等に關する行爲を以て、それ／＼孝の一方法と考へて居る。これ等は實際の教授或は指導上參考とすべきことであらうと思ふ。

第二 家—祖先に關する答案の傾向はこれ亦注意すべきものの一つである。これは既に第一問の場合にも述べたところであるが、孝に關する大項目として父母に關するもの多しことは、流石に男女共に認められるが、これに次いで自己に關するものはその三分の一で、家に關するものは父母の十三四分の一になつて居て、兄弟に

も及ばない。祖先に關するものは殆どない。これは小學校の程度としては寧ろ自然であるかも知れない。けれども、家も祖先も、現行の尋常高等の教科書にも説かれてあるにも係らず、その印象のそんなに著しくないと云ふことは、一方兒童の年齢相當の状態として、かかる方面に注意を向け得るか否かを考へ、他方現時の社會狀態・家庭生活の狀態が兒童に及ぼす影響を考へて、然る後これに對する教育方針を立てる必要のあることを暗示する事實であらうと思ふ。これに關しては、中等教育の生徒の思想を知ること亦頗る必要なことであらうと思ふ。

第三、孝の内容上注意すべきもの、の一つは、從順とその他の項目との關係である。第一、從順はとにかく優勢なものである。然もその傾向は、高等科に至つて少しく降つて来る。第二に、父母の手傳をするに云ふが如き具體的・身體的勤勞は、幼年兒童に多く、年長兒童に至るに従つて降つて来る。第三に、親に安心させると云ふが如き精神的のことは、年長兒童には、次第に前者に代つて著しく高くなつて来るのは、何れも自然的な結果であらうと思ふ。

第四、感恩に關するもの、の極めて少いことは頗る注意すべきもの一つである。教科書にも親の恩のことは説かれてある。けれどもその反應は頗る少い様である。これはこの時代の兒童の表はす自然の狀態であらうか。又今日の社會生活・家庭生活から與へられる影響であらうか。大に研究を要する問題であらうと思ふ。

五 第四問に就いて

第一、忠君と愛國との關係、これに就いても第一問の場合にも述べた。即ち天皇も國も併せた意味の國家は、

學年の進むにつれて著し、上つて行くが、さして愈々第四問に於て忠義を主として調べて見れば、國に關するものは漸く上つて行くが、天皇に關するものは漸く下つて行く。國に關するものの上つて行くことは一方喜ぶべきこととであり、又その理由も理解されるが、天皇に關するものの降つて行く傾向は頗る注意すべき事實である。即ち小學校の程度に於ては、第一、大體として、忠義の意識に極めて具體的な印象を與へて、その中心の思想感情となるべき天皇の優勢でないことは如何なる故であらうか。第二、この問題は明かに「ドウシタラテ、ンシサマ、ニチユウギニナリマスカ」と斷つてあるのに、天皇に關することの少いのはどういふ譯であらうか。第三、教科書には天皇に關することを屢載してあるにも係らず、この點に注意の少いのは如何なる原因であらうか。

これは事實其者の眞の原因を十分慎重に研究すべきは勿論、現在の教授や教育の方法に就いても十分反省を促すべきことであらうと思ふ。

若し國に關するものが高まつても、天皇に關するものと連絡がないならば、これは又更に考慮を廻らすべき一つの問題であらうと思ふ。

第二、國に對する答案の傾向、に就いて、男女を観察すれば、自然に男子が高く女子が低い。これは至當のことである。

第三、變時に於ける忠義、に關しても、流石に男子が優勢で女子が低い。

これ等は自然に男女の天分に合して居ることと、強ひて女子の低いものを高くしようとする努力に或る注意を與へるものであらうと思ふ。これに反して、女子は一般に家庭に關するものに於て優勢になつて居るから、この

現象は寧ろ健全な自然的事實であらうと思ふ。それ故に亦、強ひてこの状態を破る様な努力は勞して効なきのみならず、或は却つて有害になるかも知れぬ。

六 第五問に就いて

第一 複雑な態度 これは學年の進むにつれて現れて来るもので、全く自然的のものであらうと思ふ。中には、實際の場合にはとてもそんなに考へてするものであるまいと思はるゝほどのものもある。従つてこの問題の如き偶發的事件に應じた始末の仕方は、兒童のこれ等の態度を參考して行くのが有効であらうと思ふ。例へば、幼年の兒童には簡単に始末をつけさせ、年長の兒童にはその事件其者の始末は勿論、過失者に對する態度、學校や教師に對する態度、及び自己に對する態度にも及ぶ様に指導するのが有効であらうと思ふ。

第二 過失者・權威者に對する態度 けれども概して云へば、小學校の程度に於ては、過失者に對する態度が最も優勢で、又權威者に對する態度も著しいものである。従つてこの時代には、大部分がかかる態度で行動するのが自然的な態度であらうと思ふ。

第三 自己反省の態度 は概して頗る少いが、漸く上つて行くことは明にその發達を示して居る興味ある事實で、これも又自然に兒童を指導して行く方針を立てるに一つの據りどころとなるものであらうと思ふ。

六 雜 感

答案整理の結果から来る反省やその利用等に關する感想は既に大體述べ終へたが、最後にこの仕事を始めてから仕上げるまでの経過の中には、他日同様な仕事を企てる人の爲に參考になることも少くない。依つてこゝにこれを附記することにした。

- 一 この仕事の發端は、言ふまでもなく大正三年十月の第四回全國訓導協議會の決議である。本會はその決議に基づいて、問題を作り、賛同者を募り、これを整理して會員に報告することにしたのであつたが、今から考へれば、こんなに大きな努力と時間と經濟とを要する仕事とならうとは思つて居なかつた。
- 二 當時主としてこの仕事に當るべき當校の修身訓練部の部員は、佐々木秀一・樋口長市・松田真藏、大野佐吉・阿部潔・蘆田惠之助・小林佐源治・田島眞治及び川島次郎の九名であつた。爾來大正四年十一月には、樋口君は多忙の爲に退會して飯田恒作君が代つて入會し、大正五年三月には松田君が愛媛縣師範學校に轉任し、同年九月蘆田君亦多忙の爲に退會したが、その間この仕事の爲に、毎週一回定期の修身訓練部會には、殆どこの問題に就いて多少なりとも協議を遂げないことはなかつたのみならず、時には全くこの問題だけに就いて、途中に晚餐を挟んで議論を闘はしたり、コッパ／＼仕事を運んで行つたことも屢々あつた。
- 三 ところで何よりも一番先に明になつて居なければならぬのは、道徳意識と云ふ概念とその研究法である。これに就いて又々部會の間に種々の議論が出る。結局斯道の研究に造詣の深い在京諸學者に意見を尋ね教を請ふことになつて、それ／＼分擔して訪問することにした。然るに前述の諸氏は、何れもこの仕事に多大の同情を寄せられ、懇切に示教を賜はつたのは實に感謝に堪へないところである。けれどもその間に意見の十分なる一致を見ることが出来なかつたから、これ等の人の意見を參考として、再び部員が研究して、遂にかの發表した様な形にした。
- 四 かくして大方の見當が付いたが、ともかく今まで経験のない大仕事であつて見れば、若しこれを實際に運んで思ひがけない障害が出来ては大變と云ふので、先づ第一に當東京高等師範學校附屬小學校兒童に數箇の問題を試みることにした。これは大正四年三月のことである。然るにこの調査で分つて來たのは、第一問題を適當にするの困難、第二その整理の方法の不明、第三この仕事を仕遂げるに金が要ると云ふことであつた。殊にこの最後のものに就いては實に意外であつた。それで會の方に願つて數十金の補助を得て、とにかく當校の分だけを分擔して整理することにした。
- 五 當校の調査で大體の様子が分つたから、愈々本當の仕事に着手することになり、問題を作り、調査の方法に關する條件を定めて、遂にこれを公表して賛同者を求めることにした。然るにこれに賛同を與へた全國の學校は、その數實に百二十九校であつたが、愈々調査の時になつては、種々の事情等で答案を送ることの出来なかつたところが出来て、結局百一校となつた。その中に答案の一と通の整理をしたものを續々送つ

でもらふことになり、中にも京都府の惇明小學校の如きは、整理の表と共に、全く児童の手に成つた答案をも送られたから、その實際の状況が頗るよく分つた。もとく本會當初の考では、児童の書いたものをその儘送附してもらふことに考へて居たが、それではとても平生忙しい仕事を引受けて居る部員の片手間には出来ないと思つたから、各校では、全く同じ答案はこれを一緒にしてもらひ、又これを學年別に表にしてみらふことを贊同の諸君の努力に願つたのである。本會は實際の仕事を試みた經驗上、地方諸君の努力に對して多大の感謝を表するものである。

六 然るにこれ等の材料が全部集つて見れば、僅に六百名足らずの當學校の小規模の調査の場合といたく違つて、到底部員の片手間にのみ任せて置くことが出来ないと思つたから、先づこれ等一切の材料をカードに記入がへをしたり、部員の指導に従つてそのカードの分類に従事したり、又これを作表したり計算をしたりするなどの仕事の爲に、どうしても専任の人を要すると云ふことになつて、遂に或る期間、多い時は四人、少い時でも一人を雇うてこれ等の仕事を補助してもらふことになつた。而して最も長くこの仕事にたづさはつてくれたのは原五郎君である。かくして最も仕事か忙しく、會の事務所に一室を仕切つて、書いたり讀んだり算盤をはじいたりして居る時は、焉として村役場の觀があると或る人が穿つた批評をくれたこともあつた。

然かもその間部員の者も、一方に於て修身訓練部特有の仕事があり、又一方に於て、總貫學士の民族心理學的に研究せられた道徳思想の進化の講演を聴いて、この仕事の間接の参考にしたリする等、随分忙しい状態に陥つて居たのみならず、この仕事の中に殊に議論の種となつたのは、實に答案分類の方法及び實際の分類で、これに就いては少からず頭を悩ましたのである。即ち分類の方針の確立は第一の困難で、又その實際の分類は更に第二の困難であつた。

次に愈々分類を終へてからの整理に就いても又々議論が沸騰し、幾度か方案を變更して遂に現在の方針になつた。且つ又何れの方法に従ふにしても避けることの出来ない主なる數の百分比を出すことも、亦頗る部員の骨折りとなつたことである。

次に又整理の結果を明にする爲に描いた百以上の圖表の爲にも、經濟の不如意なところから、これを専門家に任がせることも出来ず、悉く部員の手でこれを仕上げることにした。

七 その他原稿が出来上つた上でこれを出版するに付いても、又々種々の困難もあつたが、一方本會會員の厚き同情と補助とによつて、とにかく印刷に附して賛同者諸君及び示教を賜はつて諸氏に呈することが出来る様になつた。今にしてこれを思へば、この仕事に賛同してくれた人、この仕事の方法を指導してくれた人、この仕事の實行に努力と資力を供給してくれた人、皆悉くこの仕事の完成者である。吾人は唯有ゆる方面に對して援助の厚きに感謝の意を禁ずることが出来ない。

八 終に臨んで一言したいのは、この研究はもとく児童道徳意識を知る爲には、ホンの一部分の参考にしかならない。又仕事其者の出来ばえも頗る不十分である。けれども、少しでもこれが天下の教育者に、児童を精確に研究しようとする志を起させる助けとなるならば、これは實に望外の幸である。

大正六年七月十九日印刷
大正六年七月廿二日發行

(児童道徳意識に関する研究叢附)

定價 金貳圓八拾錢

著者 東京高等師範學校附屬小學校内
初等教育研究會

發行兼印刷者 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社

右代表者 專務取締役 宮川保全



發行所

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座東京二一九番

各府縣下 特約販賣所

275
63

終

